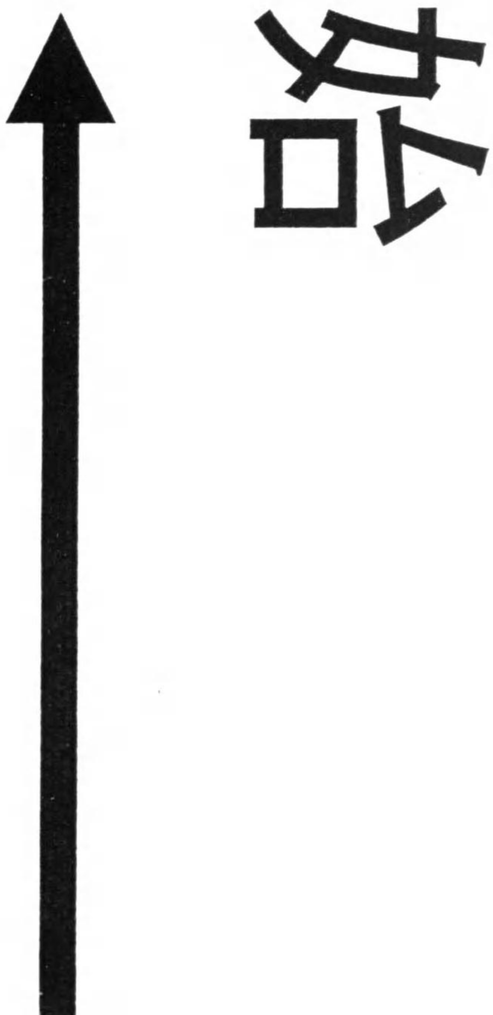
14-227
12007015925 73
14
227



二ト T60

哲學館第十二學年度
高等宗教學科講義録

近世哲學史

三宅雄二郎

14
227

近世哲學史目次

緒論……一
謂はゆる近世哲學……九
デカート……一一
ギユーランク及アアルブランシユ……一七
スピノザ……二二
ベーコン及ホツブス……二九
ロック……三四
ライプニツ……三八
ウオルフ……四四
ベルクレー……四九
ヒユーム……五一
コンヂヤック及ヘルベシュス……五四

近世哲學史目次 畢

ラ、メットリー幷に万有の躰系……五六
カント……六〇
フヰヒテ……九九
シェーリング……一〇四
ヘーゲル……一一一
第一　理法學(存在、本素、總念)……一一七
第二　万有哲學(重學、物理學、有機學)……一三〇
第三　精神哲學(主觀精神、客觀精神、純全精神)……一三六
ショペンハウエル……一五五

近世哲學史

三宅雄二郎

緒論

哲學とはフヰロソフヰーの譯語にして、理學とか知學とか、窮理學とか、致知學とか、色々に譯せられたる者なり、原と理窟を何處までも推しつめ穿鑿し盡くすとなれは、理學若くは窮理學と稱するを可とすべけれど、第二語はいつとなく物理學(フヰジック又ナチュラル、フヰロソフヰー)にのみ相當する樣に爲りたるを以て、うかと使用すれは混雜を生するの恐あり、且知り得らるゝだけ知り盡くさんとする學問なれは、知學若くは致知學と名くるも差支なきやうなれど、斯く新奇なる語を使ひ始めては、却て理會しにくゝ爲るのみならず、エピステモロジー(哲學字彙に致知學と譯せし者)と判然區別するに苦まざる能はざるへし、哲學といふ語も隨分珍らしき詞なれど、明治十年四月舊東京大學の文學部に一科の名として使ひたるより爾來十餘年間教育上に用ひ續けたれは先つ其儘に採用し置く方穩當ならんと思はる、文部省に

て中江篤介氏の飜譯に係る理學沿革史を出版せしとき、世間にては化學生理學物理學等の進歩を記載せる書なりと思ひ謬れると云ふ、名は實の賓なり、大抵の塲合にては慣例に隨ふぞ最も宜しからん

抑もフヰロソフヰーといふ語は希臘のピタゴラスが稱へ始めしといはれ、幾多の學者の爲に幾多の定義を附せられたるものなれど、要するに原理を考究する學なると必せり、原理を考究する學と云へは、原理とは何事なるか考究とは何事なるかを尋ぬるやうになるが斯く尋ぬるは即ち哲學の一法にして、哲學を講し了らねば到底充分に定義を理會する能はさる筈なり、定義は極く〳〵大躰を顯はす者にして、會社の定義を知ればとて、會社の組織を辨する謂はれなく、社會學の定義を記臆すればとて社會學の條理を會得する謂はれなきが如く、哲學の定義を識ればとて、なか〳〵哲學の何たるを悟る能はざるへけれは、發端に定義の是非に就て喧く議論などするは、當を得るものに非さるへし、定義は門前の看版の如し、書林の印刷所にあらす呉服屋の料理屋にあらさるを辨別すれは可なり、看版を視て内部の模樣を熟知せんと欲するは、餘計の苦勞といはさるへからす、但し看版なりとて無鐵砲に

掲くるを得さると同く、定義も無闇に呈出すへからさるわけなれは、哲學を稱して原理を考究する學なりと稱せしも、種々の都合を見計ひたる上の事なり、此定義は甚た簡短なれとエーベルウェヒなどの好て使用する所にして古來學者の下せる雜多の定義と別段齟齬する無きかと考へらる、友人徳永氏曾て哲學の定義三十餘を聚集したるとあれは參考のため左に錄す

(第一) ピサゴラス氏　哲學は知識を愛する事なり
又　哲學は萬物の存在を研究するものなり
又　哲學は天道人事を研究するものなり

(第二) プレートー氏　哲學は實在の事物を研究するものなり
又　哲學は人力の及ぶ限り神靈に模倣するものなり
又　哲學は不滅不變の事理を考究するものなり

(第三) アリストートル氏　哲學は技術中の技術學問中の學問なり
又　哲學は第一原理及原因を考察する學問なり
又　哲學は實躰を研究するの學なり即ち萬有の究竟基趾及原理を研究するものなり

(第四) ストア哲學者　哲學は物理倫理論理の諸學に於て道德即理論上并に實際上の熟練を求む

るものなり

(第五) エピキュラス氏　哲學は幸福を求むるが爲に道理を使用するものなり

(第六) セント、トマス氏　哲學は諸有る眞理の根基たる眞理即ち實在の第一普遍原理に關する眞理の學なり

(第七) ベーコン氏　哲學は個体物に關せず又個体物より直接に受る印象を顧みず只如此き印象より生ずる抽象的總念を考究して天然法に順して之を合成或は區分するものなり

(第八) デカート氏　哲學は明瞭に第一原理に基く所の事理を研窮する學なり

(第九) ポップス氏　哲學は原因を推して結果を尋ね或は結果に由て原因を求むるの學なり

(第十) ロック氏　哲學は事物の確實なる知識なり

(第十一)ライプニッツ氏　哲學は充足眞理の學なり

(第十二)ヴォルフ氏　哲學は可有的事物の可有なる所以を窮明するものなり

又

(第十三)バークレー氏　哲學は萬有又其變化の存し得へき道理上の基趾及原因を求むるものなり

(第十四)コンデラック氏　哲學は智慧及眞理の研究なり

(第十五)カント氏　哲學は可覺的及抽象的事理を考察する學なり

(第十六)フセテ氏　哲學は人性(人間の理性)の必要目的と諸知識との關係を研究する學なり

哲學は科學中の科學なり

(第十七)スチュアート氏　哲學は宇宙の秩次を整成する所の繼起せる事變中に於て確定せる聯絡を考察するものなり即ち宇宙の現象を注記して其普通法に歸せ合るものなり

(第十八)シェルリング氏　哲學は絶對の學なり

又

哲學は理想と實体の絶對無差別を研究する學なり

(第十九)ヘーゲル氏　哲學は均同及不同の均同なり

又

哲學は絶對の辨證的化醇を研究する學なり

又

哲學は自己容包的理性の學なり

(第二十)ヘルバルト氏　哲學は概念を詳晰するものなり

(第二十一)ガルッヒ氏　哲學は知識と行爲とに亘れる思想の學なり

(第二十二)ロスミニ氏　哲學は窮覚基趾學なり

(第二十三)ハミルトン氏　哲學は第一原因を考窮する學なり

又

哲學は心を研窮するものなり

(第二十四)コント氏　哲學は諸科學全關の理論なり即ち科學の普通方法普通關係及特殊差異を判定するものなり

(第二十五)シュウエグレル氏　哲學は反省なり思想によりて事物を考察するものなり

(第二十六)フェリアー氏　哲學は理性の指示によりて絶對眞理を求むるものなり

（第二十七）マンセル氏　哲學は事物の原理原因を研窮するものなり
（第二十八）リュース氏　哲學は宇宙の現象を窮明するものなり
（第二十九）ユーバーウヒ氏哲學は原理の學なり
（第三十）スペンサー氏　哲學は完全に統一せられたる知識なり
（第三十一）フヒスク氏　哲學は宇宙萬有の研窮なり然れども其要本質原因創造目的理由を求めすして現象進化規律方法を尋ぬるものなり

哲學の原語が西洋より來れるため、哲學といふ學問も西洋人の專有物の如くに思はるれど、哲學の意味を含める事柄は、古今東西何の國にも存在したるなり、地理上にて、哲學を區分すれば、東洋と西洋とに分れ、東洋哲學は支那印度波斯猶太埃及等を包括し、西洋哲學は希臘羅馬英倫獨乙佛蘭西伊太利等を包括し、佛敎も儒敎も道敎も頗る高等の地位を占むへけれど、唯だ東洋哲學は西洋哲學の樣に都合よく順序を立つる能はさるよりして何となく西洋哲學を目して眞正の哲學とするとと爲れり、試に高僧に問へ、如何にして敎法を修むへきかと、彼れ必す先代の慣例を引きて答辨せん、試に碩儒に問へ、如何にして孔孟の意見を窺ふへきかと、彼れ必す朱子の註釋などを示めして應對せん、試に道敎に得意なる人に問へ、如何にして莊子

の懷抱せる志望を察すへきかと、彼れ必ず書中の語句を摘出して■辨せん、愈々問へは愈々錯雜し、遂に茫乎として判別すへからさるに至らん、是れ三敎の麤漏なるにも非す、此に從事する者の拙劣なるにも非すして、從來順序を立てゝ解說するの慣習なかりしに依るのみ、之と違ひ西洋哲學に在て、は前後の關係を熟察し、彼是れ相ひ對照して推考するの便あるを以て、數万言の議論も一線を引き延はす如くに解說辨明し得たるめ、淺薄も高尙に聞ゆると少からず、儒佛に於て順序を立てゝ辨解する樣になれば、或は西洋流に打越すやうに爲るやも測られざれど、目今の處にてはまだ〳〵他に隷屬し居らさるへからざるかに覺ゆ、順序か順序か、順序の優劣は實に東西哲學の優劣を判斷する標準と爲れり、若し智者大師を兜率に呼ひて釋門の敎法を說かしめ、王陽明を九地に起して聖門の敎義を解せしめはヘーゲルを壓しロッチハルトマンを抑ゆるに於て何の難かあらん、誰か玆に力を出すや、望み哲學館に在らずや

何にせよ今日に在ては、哲學といへば纔に西洋哲學を指し、哲學史といへは單に西洋哲學の歷史を指すと、妥當ならざる所あれど復た是非も無き次第なり、而て歷史

上の講義と云へは、哲學者の傳記を述ふるとの樣に聞ゆれど、なか〳〵左樣なるわけに非すして、直に哲學の眞相を察すとも言ふへく、宇宙に遍滿せんとする大思想の成り行きを看るとも言ふへきものなり、エルドマン曰く諸種の哲學に於て一個の哲學を觀ると、フェルリエル曰く哲學史は哲學に時間を加へたるのみなりと哲學史を區分して上世哲學中世哲學近世哲學とするが、上世哲學は希臘哲學とも稱し、概して三期に分割し、第一期はターレスよりアナザゴラス及び原子論者に至り宇宙の形質を論することを主とし、第二期は詭辨派よりストア派エピキユラス派及び懐疑派に至り、人類の意志思想を論することを主とし、第三期は新ピタゴラス學派より新プラトー學派に至り、神の本性并に神と人間世界との關係を論することを主とせり、中世哲學は哲學を以て宗教の附屬物と爲せる者にして、別段に考察を煩すに足らざるが、時期を立つれば第一期はヨハンテスコタスよりアマルリックに至り、アリストートルの論理學及ひ新プラトー學派の說義を基督教の主意に順應せしめんとし、第二期はハーレスのアレキサンデルより文學再興に至り、前期の教義を一層擴張し宗門の意見をして毫も動搖する能はざらしめたるなり、近世哲學

は哲學が宗教の羈絆を脫せんとせしより起れるものにして、第一期は中世寺院の教義より離れて上世哲學の眞意を窺ひ、更に追て汎濫散漫の新學理を呈出するに及ひ、第二期は經驗教獨斷教懐疑教の興隆せる時代にして、ベーコン、デカールトよりヒユーム及び叢書學者に至り、第三期は最も新くして、カントフヒテシエリングヘーゲル等より延て今日に至るなり

近世哲學

近世哲學は近世史と共に始まれる者にして、種々雜多の新事變に激動せられて興起したるなり、貨財の增殖せしと都民の自由を感ぜしと、詩歌小說の流行せしとの如きは、間接に勢力ありしなるべけれども、直接に力ありしものは、希臘人の遁逃印

刷器械の工夫、米洲の發見地動說の發明、宗敎の改革等なりとす、希臘人が土耳其人の侵略に苦しみ、續々として以太利に遁逃し來りし爲め、プラトーアリストートル等の意見を原書に就て考究するを得たるを以て從來文學上にて僧侶に籠絡せられ居たる徒輩は、大に感悟する所ありて、彼の論も非ならずやと疑ひ、此の說も誤らずやと疑ひ、宗門にて解釋し置きたる事どもを盡く撤去せんとするに及べり、從てプラトー等の學說を擴張せしは論を俟たず、希臘學者は甚だ尊重せられてストア派はリプシユスショッピユス等に由て再發しエピキユラス派はガッセンヂに由て再發し、懷疑派はモンテインシヤロンサンシエル、ヴァエルに由て再發するとなれり

而も年月を經るにつれ宗敎の改革益〻進捗し、理學の發達愈〻著明になりたるより、獨立の論者漸次に增加し、上世哲學は不滿を抱き、プラトーアリストートルも信を置くに足らずとし、遂に第二期に推移するに至れり、此期に在ては、一方に獨斷學者の特立するありて、眞理を得るには實驗の外に出てゝ、上帝の在存靈魂の不滅等を討究すべしと論し、又た一方に經驗學者の堅執するありて、哲學の研究法は專ら事物

を試驗し確實なる事件を蒐集するに在るを辨し、又た他の一方に懷疑學者の起るありて、世間の諸事物は眞實なりと認むるに由なく、視ると聽くと疑惑を容るべからざるなしと主張せり、然れども時ありて、三者混合する無きにあらざるなり

デカールト

獨斷敎の主者はレネ、デカールトなり、佛國デウレイン州の人にして、幼より學風の弊を看破し、人に習ふは自ら治むるに如かざるとを信せり、二十才の時學藝を棄てゝ軍隊に加り、數年の後脫して諸處に旅行し、或は僻遠幽邃の地に入り、或は繁華隆盛の府に止り、只た宇宙變動の實事を視察し、世態人情の眞狀を講究することに勉勵せり、胸中略ほ定るに及んで、國を去て和蘭に移住し、二十年間身を靜閑に處して眞理の討尋に從事し、僧侶の忿怒に罹りたるに拘らず、漸々に哲學唱首の名を各國の學者中に傳播するとなり、アルノルドガッセンヂーカーテルミルセンヌホッブス等「と書翰の往復をなしたること少からず、五十歲の時瑞典の女皇に召されストックホルムに赴き、其翌年を以て沒せり(千五百九十六年に生れ千六百五十年に死せり)

其の哲學を一新せし意見は左の如し、(一)凡そ學理を陳述せんとせば、先づ基礎を確

實ならしめ、一點の疑惑を容る能はざらしむべし、感覺より來るものも疑ふべく智力に屬するものも疑ふべし、色聲香味觸は更なり、理學に說く所の一定の格率は決して信を置く可らす、二二が四と云ひ、圓は方ならずと云ふは眞實らしく覺ゆるも何を以て鬼神の我を欺きて、然らざるものを然りと辨識せしむるにあらざるを知らんや、外物は疑ひ得るを以て除くべく、身軀も疑ひ得るを以て除くべく、右も左も上も下も疑ひ得るを以て除くべきなり、(二)而も疑と云ふとのみ除くべからず、疑ひて彼を除き、疑ひて此を除く、其の疑のみ除くべからず、隨て其疑をなす所の吾と云ふとも除くべからす、吾あらされは何に由て疑ふを得るか、吾あらざれば一事を疑はんとするも能はざるに非ずや、苟も疑ふ即ち疑ふと想ひ得るからには、必ず存在するなり、然るを以て「吾は想ふ故に吾は在り」の二句を指して、眞實なる基礎となすなり、(三)吾とは何物なるかと尋ぬるに、單に思想に外ならず、吾と云ふことより足を分離し、手を分離し、腹を分離し、頭を分離するを得るも、決して思想を分離する能はざるなり、故に吾の本質は思想なり、即ち精神なり、靈魂なり、微妙なる理性なり、吾は視るべからず、聽く可らず、外物に比して辨明す可らず、唯た自ら察知するに於ては

瞭然として現じ、井然として顯はるゝなり、(四)「吾は思ふ故に吾は在り」といふ句は理證の法則と稱するとの標準を定むるなり、何を以て此句を目して、理證を得たるとなすか他なし極めて明瞭にして、極めて眞實なりと認定せざる能はざるを以てなり、然らば如何なる事物にても、此と同樣に明瞭眞實なりと認定し得る者あれば、理證を得たりとなして、更に爭論するとを要せざるなり、(五)彼の二句の外に別に理證を得たるものあるが、之を考ふるには、思想中にありとあらゆる者を悉く究察せざるべからず、但し思想即ち觀念には、諸感覺の如く、外部より受けたるものあり、妖怪惡魔の如く、自力にて發出したるものあり、眞理思想の如く、天賦にて保有したるものあり、何は兎もあれ尤も重要なる觀念は上帝に外ならざるべし、此の觀念は、純全と云ふとを含み、隨て無限無邊と云ふとと自存自在と云ふとを有するなり、然る如きとは、如何にして現出したるか、紛々たる感覺より通するの謂れなきを考ふれば決して外部より受けたりとなす可らず、不純全なるものは、純全なるものを生するの謂れなきを考ふれば、決して自力にて發出したりとなすべからず、唯た萬能の上帝か直に吾に賦與したりとなすべし、吾も人も世界の諸事も、百方制限を受けざる

なく、相互に關渉して僅かに維持保存せざるなし、獨り上帝や、量なく極なく悠々として宇宙を覆載す、上帝は眞に實在するなり、上帝の存在すと云ふ觀念は豈に天賦にあらずや、且つ上帝のあるとは、自己の不充分なるよりも證明すべし、吾既に不充分なり、而して純全なるとあるを知る、其純全なるとは誰か有する所なるか、元來純全なるものにあらすんは有する能はざるべし、三角合して二直角とならさるものは三角となすべからざるか如く、虛に存在するものは斷して純全となす能はざるか故に、元來純全なるものは眞に存在せざるを得ず、彼の上帝は元來純全なるものゝ謂なり、焉ぞ眞に存在せざるを得んや、上帝の存在は理證を得たりとして可なり、(六)上帝の存在の理證を得たるは、大關係を及すとなれり、始に疑はしき事物は悉く除去すべしとなし、圓は方ならずと云ふと迄取るに足らすと主張したれとも、上帝にして眞に存在すと定まりたる上は再ひ斯く辨するを得ざるなり、强て斯く辨すれは、上帝を誹謗するの恐あり、上帝は純全なり、至善至真なり、奚ぞ人を欺きて樂となさんや、奚ぞ人を惑して快となさんや、吾か明瞭に領會する所は總て信實なり、信用して可なり、外物も明瞭なるを以て信ずべく、身軀も明瞭なるを以て信ずべく、右も左も上も下も、皆な明瞭なるを以て信ずべきなり、(七)理學の原則は素より取るべきなり、二元の關係も採用すべきなり、凡そ自ら存在して、一も他力を假らざるものを本躰と名く、實を言へば、上帝のみ本躰と稱すべきなれども、心意と物躰とは上帝の外他に依賴する所なしとて、推して本躰の名を附するとせり、此二種の本躰即ち二元は、各自特別の性質を有す、心意には延長なくして、物躰には延長あり、一は毫も尺度にて測られずして喜怒とか愛樂とか單に精神的に解すべくも、一は少しも精神的に解せられずして何里何町なり何間何尺なりと專ら尺度にて測るべきなり、共に本躰なるか上に斯く互に反對するに於ては決して直に限係を有する能はざるべし、身軀は吾か所有の如くなれとも、元と物躰の一部なれば我が靈魂と直接の連絡をなすを得ざるなり、連絡ある樣に見ゆるは靈魂が壓迫せられて腦髓の一部分に止りたるに由るなり

前に陳述せる所を概括して見るにデカールトは左の三事に於て近世哲學の開祖とも稱せらるゝに似たり第一に從來流行せる諸種の理論を排擊し單に此樣に見へ彼樣に聞ゆると云ふのみにて信用し來りたる事件は何に拘はらず一切振り捨

てゝ顧みざるとなせり、第二に自ら思ひ自ら考へ自ら究むるを大切なるとなし自ら察知するに於て瞭然として現する微妙なる理性あるとを説けり、第三に靈魂と身軀心意と物躰意識と成立等の二元は全く分離して互に背戻するとを辨し其の連絡する模樣を説明するは即ち哲學の大問題となるべき樣に論究し置きたる也、此等のとは總て容易なるが如くには思はるれども第十七世紀の始まり迄は世人の曾て考へ及はざる所にして、後人をして新に意見を開發するの便を得せしめたるものとす

デカールーの時代に在て氏の所説を駁擊せるもの少からず、ブルダン曰はく万事疑ひ得れば万事疑ひきらざるべからず疑と云ふとのみ除くべからずとは實に怪むへき言なり疑ひ居るのみにて可なり何そ疑より強て信を取るを要せんや若し一の信を取るを得ば万事を疑ひ得ると稱する能はさるに非すや全稱否定より特稱肯定を生せんと欲するは無知の至なり且つ万事を疑ひ得れば万事を疑ひ得ると云ふ一事も疑はざる可らずして万事を疑ひ得るとて万事を疑はんとするは眞に万事を疑ひをるに非さるなり疑を以て起らんとせず必ず虚無

に歸せんとガッセンヂー曰はく吾は思ふ故に吾は在りとは無益の言なり吾は歩行す故に我は在りとも謂ふを得へし吾が思ふは意識に依れど意識なきも吾能く存在すされば吾が思ふといふ事より吾が在りといふを斷するは甚た不可なり又た彼の判斷は總へて思ふものは在り吾は思ふ故に吾は在りと云ふ推測式を畧せる者なるが總へて思ふものは在りといふ大前提を證するには吾は在りといふ斷言を前以て假定し置かざるべからざるが故に自ら匿證佯爭の弊に陷るなりとデカールは一々答辨せり後回に別の駁擊論案と共に答辨を掲載せん讀者姑くデカールトに代りて答辨の勞を取れ又自ら駁擊の論案を作れ

ギユーラン及びマアルブランシユ

デカールトは已に心意と物躰と互に背戻し身軀も物躰の一部なるより吾が靈魂と直接の連絡をなす能はざるとを辨せり然らば靈魂は如何にして身軀の上に働き得るか身軀は如何にして靈魂の上に働き得るか二者何ほど連絡せすと云ふも常に相待ち相依りて働き居るが如く思はるゝに於ては何か其間に關係樣の如きものなきを得さるべし何樣に之を辨明すべきかとは是れアルノルドギユーラン

(千六百二十五年アントウエルプに生れ千六百六十九年レイデンに死せり)幷ひにニコラスマアルブランシユ(千六百三十八年巴里に生れ千七百十五年に死せり)の主として講究する問題となれり

ギユーラン曰く靈魂は直接に身軀の上に働くを得すして身軀も直接に靈魂の上に働くを得ず吾れ能く五體を運動すと雖とも吾といふ者は決して其運動の原因にあらず何となれば吾は其の如何にして運動し得たるか如何にして運動の力が腦髓より手足に達したるかを辨知する能はされば自ら如何にして成るべきかを知らずして能く事を成就するを得べきか決して得ざるべし茫然たりながら適當の事件を爲すとは甚だ解し難きとなり身軀にさへ運動を起こす能はすとすれば身軀外の雜多の事物には猶更ら起こすを得ざるべし吾は此世界に對しては全く無勢力にして唯た一の傍觀者たるに過ぎず天地の森羅萬象を觀覽する者たるに過きす吾の本分としてなすべきとは唯た考察にあるのみ然るに此の考察は實に不思議なりと云はざる可らず看よ如何にして万般の外物を考察し得るか外物は決して直接に吾を刺擊するとあらず其の吾を刺擊するは光線の目に映する

が如く腦髓に一種の印象を殘すものとするも其印象なるものは則ち物體に外ならざるなり何を以て始より物體と背戻する吾が靈魂の上に雜多の作用をなすを得んや斯の如く彼も此を侵すとなく此も彼を侵すとなしとすれば其の能く關係を保有する樣なるは單に上帝の働作に外ならずと爲さゝるべからず獨り上帝は能く靈魂と身軀とを合併し心意と物體とを連結し外部の事物をして內部の觀念たらしむるとあるなり心物の連絡は一として上帝の行爲に依らざるあらず吾か此事をなさんと願ひ彼事を行はんと望むに當て樣々に運動の生するは吾が願望に基くにあらずして上帝の意見より來るものとす吾が靈魂に願望ある時は上帝は吾身軀に運動を起こし吾が身軀に變動ある折には上帝は吾靈魂に觀念を生するなり靈魂と身軀心意と物體の關係は恰も二個の時計が同時に動き一個が十二時を打つとき丁度他も十二時を打つが如くなりとす甲は乙の原因ならず乙は甲の原因ならず原因は全く上帝にあるなり二者の關係は只た上帝の力にて同時に運轉活動する迄のとなり二元の關係は豈に奇妙不可思議なるに非すやと

マアルブランシユは初めの程は之と同樣に辯明し來りたれとも稍々進んで結果

に近くに及で大に差違を現はすことなれり其意見に曰く日月星辰其の他遠方の物件を知覺するは靈魂の身軀を脱し天上に徧歴して之を採取するにあらざるべく又た是等の物體か遙に飛び來て吾靈魂中に混入するにあらざるべし日月等を見るは其實體にあらずして其觀念に過ぎざるなり然らば此の觀念は如何にして生ずるか固より外部より受けたるにあらざるべし又た自力にて發出したるにあらざるべし若し吾が心意の作用にて生出したりとせば必ず吾が好む所に從て隨意に致すを得べき筈なるに忽ち來り忽ち去り忽ち强くなり忽ち弱くなりて少しも己れの意志に從はざるなり且又た天賦にて保有したるものともなすを得ざるべし若し然りとなさば靈魂は生してより種々の觀念にて充滿せり一事思ふ每に限りなき程發出し來り紛々雜々として歸着する所を知る能はざるなり更に進んで考ふるに是れ又た決して上帝の直に吾に賦與したる所にあらざるべし上帝の所爲は極めて單純にして一度々々に觀念を與ふるが如き錯雜極るとあるとは思ひもよらざるとなり然らば如何が解して可なるか他なし諸種の觀念は悉く上帝にありて吾の之を得るは心意の上帝に合併するとなすべし神は在まさゝる所なし

しと云ふも之を云ふのみ上帝の靈魂を支配し万般の觀念思想を包括するは空間の天地を包み太陽太陰山川草木を囊括する樣に見ゆるに異ならざるべし吾は實に上帝の腹中に在りて思ひ且つ考ふるなり正圓は確に思ふべく正三角も確に思ふべけれども此の如きは何處にても見得るとなきなりとても感覺より得られたりとはなす能はざるが故に又た引て以て上帝に純粹の觀念あるとの一證となすべきなり知る所覺る所一として上帝より出でざるあらずとすれば二元の互に背戻したるを密に連絡せしむるとも此の万能にして無限無量なるものゝなす所たるや毫も疑を容れざるなりと

然らば則ち二氏の考究せし所は師の見解を論理上に整合せしめんとしたるに外ならずデガールトは上帝のみを本躰となせしかども心意と物躰とは上帝の外他に依頼するとなければ姑らく推して本躰の名を付け置くを可とするとて甚た曖昧に付し去りたるか爲め色々と不審を受くるとなり已に上帝に依頼するとあれは何そ本躰と稱するを得んや何そ純全たる屬性となさゝるを得んやなどゝ尋問さるゝとなりしなり二氏(殊にマアルブランシユ)は玆に見る所ありしより心

意も物躰も全く上帝の管轄する所なりとし一にも上帝二にも上帝と万事万物上帝の作用に皈せさるなきに至らんとせり是れ頗る矛盾を避るに似たれども前後を穿鑿するに及んでは尙ほ論法の精密を失する所少々ならさるを見るなり一方に偏するの嫌あるにせよ能くデカールトの意見を齟齬なき樣に解說し成るべく完全ならしむるを得たるは蓋し彼のスピノザなり

スピノザ

バルク、スピノザは和蘭アムステルダム府の人なるが幼にして父母と共に猶太教に屬し孜々として經典の類を講究したりしも中頃變して專らデカルトの著書を研究するとなりしより同宗の徒輩の爲めに破門を以て目せられ將に大に窘迫せられんとせしかば去てリンスブルグに赴き事稍々靜定するに及て更にハーグに住居し眼鏡を磨きて衣食の料を取り只一心に學理の推考に從事し居りしなり身體虛弱にして遂に肺病にて沒せり氏は温和にして情慾に薄く淡泊にして名利を厭ひ居常悠々として一仙人の風ありしと云ふ(千六百三十二年に生れ千六百七十七年に死せり)概して看ればスピノザの論は涅槃を說くかと思はれ玄之又玄

衆妙之門の句を解釋するかと考へらるゝなり姑らく問はん人と云ふは何ぞや牛馬犬豕と異なるも動物の一部にあらずや動物とは何ぞや植物と異なるも有機躰の一部にあらずや有機躰とは何ぞや無機躰と異なるも物躰の一部にあらずや物躰とは何ぞや空虛と異なるも延長の一部にあらずや延長を去て何處に歸すべきや次第〻〻に推し上くれは玄妙にして一の對待すへきなく一の比喩すべきなきに至らざる能はざるにあらずや玆に至て大極と云ふも可なり大易と稱するも可なり眞如と名くるも不可なりとせずスピノザは之を本躰とし上帝とし萬事萬物之に依賴すと爲せるなり

順序を追ふて看ればスピノザの哲學の躰系は三種の總念に本けるものにして第一を本躰とし第二を屬性とし第三を模樣とするなり(一)先つ初めにデカルトの說により本躰は自ら存在して毫も他力を假らさるものなりとし更に開陳して謂らく此の本躰は唯一のみあるなり何となれは毫も他力を假らざる者は必す無限ならざるを得ざるが無限なる者は決して多く成立す可らざればなり若し無限なるものにして多く成立すれば互に制限して無限たるとを失ふが故に本體は是非共

一のみとせざる能はざるべし世間の事物を見るに孰れも制限ありて互に依從する樣に思はるべけれど其然る樣に思はるゝは即ち制限なくして全く獨立する者の存在を考得るとを表するなり實に限なくして全く獨立する者あり而して後ち限ありて互に依從する者ありとなす水ありて而して後ち波あり水なくして波のみありと云ふは誠に不都合の事なるへし本體は洋々たる大海の水に類し生するなく滅するなく增すなく減するなく千万万里の外に出で千万万年の後に存するなり人の浮沈する草木の榮枯するは漣波の動くに同しくして世界萬類の發生し進化し衰頽し破壞するは洪濤の上下するに異ならざるべし本體は實に六合の大原因にして一より億万迄を管理す焉ぞ全能の上帝なりと稱せざるを得んやと(二)次にデカルトの二元論を採り別に一說をなして云ふ本體に思想と延長との二屬性あり吾人は由て以て本體を辨識するを得るものとす本體自らに就ては何とも判斷する能はざるも思想の屬性より觀れは思想となりて顯はれ延長の屬性より觀れは延長となりて現はるゝが故に上帝を名狀するにも無限の思想若くは無限の延長と云ふとを以てすると最も當れりとするなりと又たデカルトの如く二元

の互に背戻するとを論すれ共此か關係を辨するに及ては大に之に異なる所あり其說に由れは思想と延長と分割し居るも本體に入るに當ては全く同一の者と認めらるべし唯々其分るゝは何時にても本體を二樣に見るとを得るに由るものにして何なりとも一事件あれは思想內に在りと爲すと同時に延長內に在りと爲し何なりとも一變動あれは延長內に在りと爲すと同時に思想內にありと爲すなり圓と云ひ方と云ふとき一二の觀念の如くにも聞へ一二の物體の如くにも聞ゆるは同一の本體を一度は思想より窺ひ一度は延長より窺ふが故なり如何に廣大なるものも如何に微小なるものも如何に衆多なるものも如何に僅少なるものも斯く二種に見られざるなし世界の存在するも實に玆に在るなり(三)然らは天地間に千万無量の事物あるは果して何に基くべきか他なし本躰の模樣にして始終二個の屬性に管轄せらるゝとすへし模樣とは前後左右綿密に制限せられ縱になり橫になり樣々に現はるゝとにして則ち前に述へたる漣波や洪濤に當るなり是等の模樣は眼前に屹然として現はれ出るも實に有るかと思へは忽ち消失し去り實に無きかと思へは忽ち生出し來り有無誠に測る可らず故を以て萬物は一も眞とし

て取るに足らずと爲すなり眞として取るべきは唯々夫の本躰のみ大海の水が波濤の有無に關せざる樣に本躰は毫も擾々たる雜物雜事の爲めに增減損得するとあらざるべし

以上は是れスピノザの意見の大略なり之を逆に見て約言すれば宇宙萬物は無數に現はるゝ模樣に過ぎずして模樣は思想延長の二屬性に入り屬性は絶待の本躰に歸するなり即ち次第々々に推上り玄妙にして一の對待すべきなく一の比喩すべきなきに至りたるなり或人之を獅子の窟に比し彼窟に入るの足跡多きも彼窟より出るの足跡なしと云へり此言や啻に以てスピノザを評すべきのみならず復た以て老佛の徒を評すべし何れも複雜より單純に赴く事のみ思ふて單純より複雜に赴くことを忘れたり

終に臨み一言すべき事あり此の如き學理に基て道義を說明せんとせは如何が爲して可なるか素より常人の地位を降下して論せざるを得さるべしスピノザ言へらく人間は一種の模樣に過ぎず何ほど威權を張るとも何ほど富貴を得るとも夕カの知れたるものなり彼を善とし此を惡とし甲を正とし乙を邪とするは一時假

に名くるのみ是等事實の本來一定して存在するに非ず本躰の水より觀察すれは善と云ふも一小波なるべく惡と云ふも一小波なるべく正と云ふも一小波なるへく邪と云ふも一小波なるべし奚ぞ喧しく議論するに及ばんや而も更に推して謂ふ所の善惡とは何そやと尋ぬれは善とは吾人に利益あるとにして惡とは之を妨くるとなりと答ふる外なかるへし其利益の中にて第一位を占むるは道理を辨知するとなり道理なけれは意志を發する能はず外物に對抗する能はず天地の規則に順應する能はざるなり人にして道理なければ何ぞ久しきを保つべけんや偖て道理の最上なるは本躰即ち上帝を覺知するとにして善の善なるは上帝を認識し上帝を敬愛するとなりとす上帝を知るに當ては心中全く清淨と爲り榮光に會して悅はず侮辱に遇して怒らず澹泊を極め高尙を盡くすに至るなり諸人玆に達すれは爭亂紛擾を見んと欲するも其れ能く得んやと此處にても亦た老佛と符合するあるを見るなり實にスピノザの說を擧けて老佛の敎義を解すへく老佛の非を認めてスピノザの意見を駁擊すべし

マアルブランシユは快想を逞くしスピノザは虛無を主とするに拘らず二人互

に思考の方向を同くするが如し、一は云ふ知る所覺る所一として上帝より出てざるあらずと、一は云ふ本躰は實に六合の大原因にして、一より億万迄を管理す焉ぞ全能の上帝なりと稱せざるを得んやと、唯だ一は益々進達して繁雜に渉たり、一は愈々退縮して純一に歸せんとするのみ差の在るところ同の存するところ頗る考察を煩すべきものあり讀者熟考して是非を判定すれば裨益を得る尠少ならざるべし

スピノザの後ち最も獨斷敎を使用せるはライブニッツなれども歷史上の便利を謀れは其前に經驗敎の主張者を掲載し置かざるべからす蓋し哲學は一定の理法に隨ふて變遷發達すると云ふものゝ之に從事せる諸學士は種々の刺擊を受け反對說と維持說との間を通行するとなれは是非とも年代に依て彼此の狀態を對照する樣に爲さゞる能はざるなり世態の變動を純粹の規制に應して充分に解說するを得は己まん哉も人名を用ひ年代を賴み國土を稱する上は哲學の史乘も亦た幾分か形而下の變更と共に顯はれ出てさる可らす是れスピノザに繼てホッブ、スロックを掲くる所以なり而も世代の新舊は哲學史の大に拘泥するに

及はざる事なれは尋常の躰裁の歷史を終るに當り更に一理を以て諸派の學說を貫通せんと欲す

ベーコン及ひホッブズ

フランシスベーコンハセームス一世の朝に在て玉璽官となり大法官となれる人なり或は之を評して人類中最も智慧あり最も榮光あり而て最も卑劣なる者としたるが適評に非されとも復た其行爲如何を窺ふへきか(千五百六十一年に生れ千六百二十六年に沒せり)デカールトと俱に近世哲學の開祖と稱せらるゝが實に之と同く經歷に富み物理を考究するを好み從來の妄說を掃除して一新の實學を興起せんと欲せしなり但しベーコンは方法を述へしのみにて沒しデカルトは方法を述る外に不充分なからも方法を應用し心物の妙理を說くとを得たり世人或は是を以て二人哲學上の功績を優劣するなりベーコンの一新を唱ふるや曰く哲學之所以不振起者、蓋起因于左之五件、一曰從事於實驗、則以爲汚辱人類之高位也、二曰偏信宗敎、不復顧實理也、三曰羅馬人深貴道德政治、爾來爲宗敎之頭首者、依倚之、而除此二者、則專修天道之學也、四曰固信古哲、不欲脫者範圍也、五曰雖就實物而究實理、以

其不得速成輙放擲之也、今竊案振起之方策、惟有洗滌哲學之根抵之一法耳、而其爲方策無他、百般事物、一實驗之、以討究其理、一也、自古所傳者確言名說、猶且不取之、二也、果如此則庶幾其可矣、と是れ當時に在ては實に比類なき議論にして科學の一時に興起せんとしたるは職として之に由ると云ふも强ち過言と稱すへからざるなり然れともベーコンの哲學上の事業は此に止るのみ世人をして新作の必要を感せしめたるに過きさるなり事物を實驗に徵して果して何の結果を得たるか陳腐の舊說を去りて果して何の意見を發したるか返答に苦むとなるべしヘーゲル言へらくベーコンは英人のいはゆる哲學なる物を大に隆盛ならしめたる功あり學者をして常に實驗實驗と稱し工匠や農夫の如く眼前の事物を考究するとのみに汲々たらしめたりとベーコンによりて此の如き狀勢生したるなるか此の如き狀勢によりてベーコン力を顯すを得たるなるか孰にしろベーコンは純粹の哲學に於て大功あるものと顯すべからず然れとも猶ほ依然として開祖の地位を失はさるは開祖といふとの人より先きの義にして人に超越するの義にあらざるに因る開祖何そ必しも超越せむや否な哲學の開祖のみ獨り然りとせず政治にまれ宗教にまれ商業にまれ工藝にまれ創業の任に當り赫々の功を立つるものは慨ね然りとせさるへけんや

トーマスホッブスはチヤールス二世に臣事しベーコンデカルト等と友とし交はれり毀譽まち〳〵の人なり(千五百八十八年に生れ千六百七十九年に沒せり)其論する所ろ哲學史より寧ろ政學史に列すへけれど復た經驗教に關し一家の哲理を存するを以て聊か茲に其要旨を述るなり曰く哲學は原因結果を考察して得たる知識なり宗教は天啓現示にて得たる知識なれは哲學より除去せさる可らす信仰と道理とは決して混同す可らず經典は現世界の事を教ふる爲めにあらずして別世界の天堂に達するの道を教ふる爲めなり知識の本源は感覺にして之を刺激するは若干の運動なり感覺は刺激せられたる後尙ほ永續するとあるが之を名けて記憶想像とす記憶は經驗の本となり經驗は心期の本となり隨て警戒節制の本となるなり記憶よりして符號を發明し交際の爲めに語を定むるに至る語は衆多の事物を代表するより概括と云ふとを生するなり符號と意義とを合するは理會するとにして符號と符號とを合するは計算すると思惟すると推理するとなり能く之

を合するを眞實と稱し惡く之を合するを虛僞と稱す故に語を明晰に解釋するは第一義哲學にして時間空間原因結果本躰屬性を講究するは之に次くものなり哲學は唯々有躰に限る精神の如き無躰のものありとするは四角の圓を存在するとなすに似たり上帝を哲學中に辨するも或人が之に形躰を賦與したるによる實に哲學の區域は有躰に限るなり故に之を分て自然と人造とに爲すとあり乃ち第一義哲學物理學人類學政治學の區分を立つ第一義哲學は前段の所說の如きを云ふ物理學は數學星學生理學視學等を包括す人類學は認識の理を始めとし語の發明の事を論し人間の道德上の能力に及ぶなり理論は實用の爲めにして目的とすべきは唯々利益にあり單純なる幾何學の類も器械に應用する爲めに設くるに過ぎず其實用と云ふは快樂を求め苦痛を避るの計を指すものにして此計に優等なるあり劣等なるあり此を擇み彼を捨てんとして意志を生ずるなり何にても好むへき事は皆善にして何にても嫌ふへきとは皆惡なり善の中にて最上なるは性命を保つとにして惡の中にて最上なるは性命を失ふとなり人々互に此最上の惡を被らするの力ある故に天然の儘にては世間一般に畏懼恐怖の念を懷くのみとす左

れとも生命を保つの念の切なるよりして相集りて平和の約束をなし從て種々の情勢を生ずるに及ぶなり即ち互に自由の動作を制限するなり此の約束は仁愛の情より起るに非ずして私慾と畏懼とより生ずるなり而も此約束は衆人を一人に服從せしむるに非れば履行する能はざるなり因て國家を生す(以下即ち政治學の範圍に入るなり)國家の君主は其の靈魂と看做すべし君主は即ち國家にして餘人は毫も權力なきものとす時に判斷すへきは正と不正とのみなるが正とは君主の命する所にして不正とは君主の禁する所なり主權は多數の人にも歸し少數の人にも歸し一個人にも歸す先つ最初には多數の人に歸す而も最も善良なるは一人に歸する時にありとす一人に歸するに及ては再ひ變革するとを務む可らず然らざれは以前の爭奪殺傷の世に復するなり臣民は君主に對して一の權利を有せざるも君主は何の法律にも束縛せられざるなり國の爲めにするにせよ君主に背くは極めて惡しき事にして眞に國の爲めにせんには何處迄も君主に服從するに若くとなきなりと嗚呼是れ實にホッブスの有名なる著書デシヅ及ひレビアタンの大意なり

ロック

ベーコン、ホッブス共に經驗教を主唱するも此教に頭首たる者はジョン、ロックなり。ロックはリングトンに生れ幼にして哲學醫學に志させしが身躰虚弱なる爲め醫業を廢し專ら文事を職とするとなれり深くシャフツベレ伯に信用せられ其宅にて當時有名なる諸士に接するを得たり朋友の勸告により彼の人性論を著はせり(千五百八十八年に生れ千六百七十九年に死せり)

其哲學は約言すれは智識を考察する學問と名くへきものにして左の二題を充分に辨明譯解せんと務めたるなり第一(反面的)本然の觀念は存在せさるなり第二(正面的)知識は總て經驗より來るなり其説に曰く世人は本然(天賦)の觀念と云へると信して生るゝとき一種の知識を心中に受け來るべしとなし其證として何地の人間も本來同樣の性を有するとを示すなり然れ共是れ誠に不當の事なり假令ひ人間が本來同樣の性を有するとを事實とするも其事實を他の理由にて解釋するを得は證たるの効能は果して何の處に在るか況んや其事實の取るに足らざるを

や世人の妄信たる知るへきなり彼の事實は實際にも理論にもあるまじきなり實際を見んに通常本然中の本然とする道義は時代と土地にて色々と變更するなり理論を見んに有る者は有ると云ひ事物は有ると同時に無きを得ずと云へる言は天下普通の正理の如くなれとも小兒愚人並に教育なき人々に尋ぬれは夢裏にも知らさる事共なり心中に受け來るとは知るを得ると同樣の事なれば此等の觀念が眞に本然なれは何程幼稚なるものも判然と知らざる可らざる筈なり或は謂ふ小兒の之を知らざるは此の道理を用ゆるの必要なければなりと是れ亦た服す可らざる辨解なり小兒は早くより甘の苦ならざるとを知れども有ると同時に無きとを得ずと云ふ道理を用ゆるを思はざるのみならず種々の理論を述べ立るに至ても中々此理を領會する能はさるなり本然なるものは本然ならさる者より前に存在する譯なれは舌や耳目にて本然ならさるものを知る折には業既に本然なるものを知り居らざる可らざるなり而して事の全く反對するは本然の觀念の存在せざるが故なり心意は本來無一物にして例へは一點の墨蹟なき白紙の如きものなりとなすなり

然らは心意は如何にして觀念を得るか曰く經驗にて之を得るなり經驗は實に知

識の基礎たるものなり經驗に二樣あるが一は五官にて外物を覺知するとにて感覺と稱し一は內心の運用を覺知するとにて反省と稱するなり感覺と反省とは心意に諸種の觀念を供給するものにして心意の闇室中に觀念の光を通する窓なりと認めらるゝなり偖て觀念は單純と複雜とに分るゝなり單純の觀念は心意の刺衝を受取る恰も鏡の物影に於る樣なるを云ふが其一部は一個の覺官より來るものにして例へは視官にて色彩の觀念聽官にて聲音の觀念を得るか如く又一部は種々の覺官より來るものにして觸官と視官とにて延長運動の觀念を得るか如く又一部は思想意志の觀念の如く反省より生し來り又一部は感覺と反省と合して發生し勢力唯一連續等の觀念をなすに至るなり是等單純の觀念は知識の材料となるが次第に群集して複雜の觀念を形成する毫も語集りて句となり句集りて章となるに異ならず而して複雜の觀念は樣式本躰關係の三類に分るゝなり樣式の觀念は空間(距離外面圖形等)時間(急速永遠等)及ひ思想(覺知記憶抽象等)の變化より成るなり本躰の觀念は若干の單純の觀念が俱に共に發出するを認め如何にして斯く俱に共になるかと考察して遂に其觀察の奥に万事統轄の物件あるを推量す

るより起るなり關係の觀念は事物の間に聯絡を付するに從て生出するか故に豫め其敎を確定する能はざれ共最も緊要なるは同一と差異との關係并に原因と結果との關係なりとす凡そ知識は單純複雜の觀念より成立し單純複雜の觀念は共に經驗より來るとすれは經驗の知識の基礎たると疑を要せさるとなるべしと

ロックの人性考察の法は第十八世紀に在て英佛獨三國の經驗敎の主眼となり大に前代の學理并にデカールト派の哲學を壓服するの狀を顯はせり但し獨國にてはライプニッツの主義の擴張せし爲め稍〻其勢を減殺するを得たりロックの意見に基きて却て所謂る唯心論に傾きしもののペルクレーあり唯物論に心理を混せしものハートレー、プリストリーあり而も歸する所を同しくして別に大影響を生せしは則ち彼のニュートンなり其說に云ふ分解法は常に總合法に先んぜざる可らずデカルト派の虛妄に陷りしは此に注意せさりしに由るのみ分解法は試驗と觀察にて斷案を爲し複雜より單純に赴き特別の事より一般の事に進み結果を視察して原因を考ふるにあり總合は全く之に反し原因を推して結果を求むるに在りとニュートンは痛く臆說を立つるとを惡みしが自ら實驗究察するに當て之を免る能は

さりき物理學上に大功ありしは固より爭ふ可らざるとなるも宇宙全躰に關して一種の說を懷き居れり曰く人は覺官によりて事物を知る全能の上帝は覺官によらずして事物を知る諸般の事物は實に上帝の包含する所なり無限の空間を以て上帝の感受官と稱するも不可なかるべしと但上帝の存在は世界の結構生物の機關等より引證して論せり此他道義の說を敷演せるクラルク、ウオラストン、バチソン、モーアル、カドウオルス、マンデビル、ベットラル等皆多少ロックの流を酌めるなりロックの經驗說を完成せんと務めたるはヒユームにしてヒユームは終に懷疑敎に陷りしに拘らず實にロックの相續者とも稱すへきものなり故に玆にヒユームを揭出すへき筈なれとも年代に依て彼此の狀情を對照せさる能はさるとあれば之を措て更に獨斷敎なるライブニッツの事を記載するなり一通り歷史を了るに及て別に一理を以て諸派の學說を貫通せんと欲す

ライブニッツ

ゴットフリード、ウヰルヘルム、ライブニッツはライプシッヒに生れ十分に學業を了へたる後ち外交に從事して諸國の朝廷の間に周旋せり曾てルイ十四世の獨國を圖ら

んとを恐れ巴理府に赴て埃及政略の利を說きたるとあり伯林に大學を起すの許可を得て之が總長となり次てドレスデン、ヴヰンナにも仝樣の學校を設けんとを計りたれども事成らざりし諸方に奔走せし爲め大部の書類を編述する能はざりしかども時に論し時に辯し一章を作り一編を爲し長短巧拙の混淆する間に於て前人未發の新說を發出したること少からざりきアリストートル以來尤も才識に富みたる者なりと云ふ(千六百四十六年に生れ千七百十六年に死せり)

ライブニッツはスピノザの如く本躰と云ふ事を以て哲理の基礎と爲したれども之を解釋するに至て大に反對の意を表せりスピノザの本躰は玄妙にして一の對待すべきなく一の比喩すへきなきものなりライブニッツは本躰を以て元子となし元子を以て無數に存在するものとなし更に論して言へらく本躰は活動力ある者にして常に活潑に動作せんとする恰も張りきりたる弓の今にも矢を彈き出さんとする如くなり然るに此の如く彈力樣の事を有せんとするには何處迄も己れを保存し何處迄も他を抗拒するの狀なかる可らず其の己れと云ふ一個躰は即ち元子にして他といふ事柄も各々一の元子に外ならず本躰は元子なり決して一に限る

可からず一に限れば他を抗拒するに由なきなり必ず數多ならざるを得す數多ならざれば己を保存する甲斐なきなり今ま元子の通常謂ふ所の分子と異なる箇條を擧けんに第一に元子は各自相互に差異ありとす蓋し世界一として全く同樣の者あらざる筈なり第二に元子は單に一點にして何樣に分割せんとするも得可らずとす蓋し分割は延長あるより起るものにして延長は實在とするより寧ろ不明晰の概念となすべきなり第三に元子は精神的の物件にして始終生々の狀を有する者なり抑も元子は乾坤に遍滿し幾千万個なるを知る能はざるが其一個一個は各精神を具へ次第に昇進し次第に變更改化するの傾きあるのみならす自立自存の小世界を形成し互に他の摸樣を覺知し百般の狀勢を推量するを得るなり原來宇宙は元子の集合より成り視る所聞く所一として多少の元子を包括せさるなし而して元子に生命あるが故に何程微細なるものも何程廣大なるものも幾分か生活發育の素を含有せざるなきなり物躰の構造を譬て云はゝ池に魚ありて池は死物に見ゆるも其内自ら生物を蓄るが如くなりとす偖て天上天下共に元子の充滿するのみにして元子は各自一種の小世界を爲とすれは幾多の元子は互に何樣の

關係を有するとするか他に非ず元子に知覺力の異同ありて千百万の元子あれば千百万丈け認識の度に差異あるが概すれば不明晰と明晰とに分別し金石水火等の無機躰は尤も下等の元子にして認識の不明晰なると夢も現もなき熟睡の有樣なりとし草木は稍々發達して成長を表し動物は頗る發達して感覺記憶を現はし人間は更に上達して道理を辨知し認識の明晰を得たりとなすなり是を以て元子互に他の模樣を覺知するも覺知するの狀に曖昧なるあり明亮なるあり茫然たるあり判然たるあり各自全世界を推知するの力ある鏡の物影を現するに同じきも力に相異ある亦鏡の中に鏽たるもあり曇りたるもあり明になりたるもあるに異ならざるなり元子各々上帝に類するは通常の元子は智識甚だ不充分にして上帝は知識極めて充分なりとす斯く思想の及ぶ所只々原子の不明晰なると明晰なるとのみなるが其の千万無量に存在するに拘はらず能く一致を遂げ敢て乖戻矛盾するに至らざるは預定和合と云ふものあるに由るなり即ち事々物々必ず充分の道理を有し且つ必ず綿密に連續する爲め初めより一が幾分か進歩すれば他も幾分か進歩すると定り居れるなり

靈魂と身躰との關係の如きも預定和合より說明せらるゝなり原來元子は何處迄も己を保存し何處迄も他を抗拒するの狀なきを得ざれば靈魂が身躰に抑制せられ身躰が靈魂に干涉せらるゝなどは決してあるまじきとなりとす然れは二者の密に關係するは如何なる作用に由るかと尋るに預定和合に歸する外詮なかるべし靈魂は靈魂たるべきとを爲して身躰は身躰たるべきとを爲し一は目的に依りて運用して一は器械的に活動し互に背戾して存在するも最初より一定せる和合の爲めに甲が何とか爲せは乙も何とか爲す樣に確乎と極り居るなり初より和合あり初より一致あるに由りて屹然獨立して他の順序を紊亂せんとするも得可らず靈魂と身躰とは毫も互に交涉するなきも十分に齊整平和なるとを得るなり抑も二者の關係に付ては三說の現はるゝを免れす第一は普通の解釋にして相互に關涉すると爲すとなり第二はギユランの如く上帝の力にて順應すると爲すとなり第三は則ち預定和合を旨とするとなり而して第三のみ辨解の宜きを得たりとす靈魂と身躰との關係を二個の時計の針の一致せるに譬へんに第一の說にては一の時計の針が常に他の時計の針を引き付け居るとし第二の說にては時計師が

絕へず雙方の針を一致する樣に働くとし第三の說にては機械は全く獨立なるも毫も齟齬するとなきものとす孰か優孰か劣言はずして知るべし偖て預定和合の元子論に由れは靈魂は固より不朽不滅の者ならざるを得ず推し詰れは死去と云ふとは無き筈にして通常死去と云ふは靈魂より身躰構造の元子の分離したるに過ぎざるなり死すれば產生以前の有樣に立戻ると知るべし

ライプニッは本躰の事に付てスピノザに反對せし如くに知識の本源に關してロックに反對の意を表せり乃ち智識は本來固有に存在する者にして決して內外感覺の經驗より發出するに非ざると辨ぜり而して本來の智識にして諸種の理論の原則となるべきものは第一に事々物々必ず充分の道理を有すると第二に事々物々必ず綿密に連續すると第三に事々物々必ず多少の相違あると是なりとす實は第二第三は第一より分出したるなり第一にては如何なる事件も止むを得ざるとあるに非れば生出する能はさる者とす若し偶然與起したる事柄あれば何故に偶然與起したるかの疑問なきを得ず之に限りて偶然なりとは不審に非ずや偶然ならずして出來得ざりしとは怪むべきとにあらずやと段々と問詰すれば偶然も必

然の道理となるなり斯く道理の免る可らざるを知れは一事一件として連續せざるなきことを許さざるを得ざるべし何となれば或る所にて連續の絶ゆるあれば何故に搭段に其所に斷絶して他所に斷絶せざりしかを穿鑿するを要すればなり又一事一件も同樣なることを能はざるとをも許さざるを得ざるべし何となれは假令二事の同樣なるありとするも時若くは場所の差異を認め一は前に在りて一は後に在りと云ふことを陳述するを要すればなり畢竟するに宇宙間の事物一として突然發出するとなきものにて偶々忽然として現れ倏然として滅するが如くに覺ゆるも其由來を問へば他の事件より少々づゝ推移し來り少しづゝ變化し去ることを知るなり而して少しづゝにもせよ必ず多少殊異の點を有せざると無きを疑ふ可らざるなり此數々條の原則はライブニッツに在りては諸說の基礎と定められ前陳の元子論の如き之が結果たるに過ぎずとす

ウオルフ

ライブニッツの見解に基き更に一種完備せる學理を提起したるはクリスチヤンウオルフなり初めハレに於て哲學の敎官たりしも宗敎上の紛議の爲め內閣の命にて四十八時間內に普國より退去せさる能はざる有樣となりしがフリードリヒ二世の即位に及ひて召されて貴族に列し敎官の任に當るとなれり(千六百七十九年に生れ千七百五十四年に沒せり)其の徒弟ビルヒソゲルはライブニッツウオルフ哲學と云ふ名目を作爲したりしもウオルフは之を非として强ちライブニッツと同主義なりと呼ばはるゝの不當なることを辯明せり而も先輩の說に大に感化せられたるは自らも許す所なりきウオルフは新奇の意見を立つると能はざりしが哲學をして諸種の法を包含し全世界の原理原則を統轄するものとなさんとせり由りて之が定義を下だして曰く哲學は可能の學なりと即ち何にても存在し得べき事共を辨知するの學問としたるなり而して可能とは矛盾なきことと定めしかば可能の學は何等の事柄より形成するかと問ふに範圍頗る廣濶にして左の諸學科を綜轄する者と爲すを得へし吾人に認識の能力と意志の能力とあれば哲學をも理學哲學と實用哲學とに分たざるを得ずして論理學は兩哲學の初めに位し理論哲學(弟子の下せる名稱にしてウオルフ自らは形而上學の語を用ひき)は實躰學、世界形質學、合理心意學、自然神道學を含み實用哲學は倫理學(人を一個の人として

論す家政學(人を家族中の人として論す)政治學(人を國家中の人として論す)を有するなり

實躰學は主として範疇と云ふ樣なるとを辨ず先つ初めに矛盾の題を擧け一物は有ると同時に無きとを得ずとす次に可能性即ち出來へきとと云ふ題を擧け可能は矛盾なきとにとす必然とは反對すれは矛盾となるべきとにして偶然とは反對するも差支なきとなり、總て可能性あるは想像に出るにもせよ純然たる事物たるべきものにして凡て可能性を有せさるは虛無なり、一物が多物より成る時は一物を全躰とし、多物を部分とす、而して物の容量は部分の數にて定むるなり、若し甲が乙の何故に存在するかを示し得る事情を存すれば其の事情を指して乙の根據とし根據を有する所の甲を認めて原因とするなり、空間は相共に存立する事物の秩序にして場所か事物の相共に存立する特別の式なり而して運動は場所の變更にして、時間は連續して發出する事物の秩序なりとす、(以上矛盾、可能、必然、偶然、虛無、全躰、部分、容量、原因、空間、時間、等はアリストートルの所謂範疇を改正せし者にして哲學的の語を一定するの便あり

世界形質學にては世界を目して一定の法則にて相互に關係する所の事物の連續なりとす事物は悉く空間と時間とにて連結すれは世界を一個の集合躰とし集合の方法を世界の本質なりとせざる能はず增加するも減縮するも進暢するも退却するも皆自ら爲す所にして要するに世界は一の大器械を成すなり物躰は固より運動の勢力を有するが此勢力に基く事件は自然に成ると稱し否ざるものは神變若くは靈怪若くは不可思議と稱するなり世界の全成とは事物が相共に存立するにも連續して發生するにも能く一致和合するとを云ふなり

合理心意學の說く所は左の如し顧みて己れの己れたるを知るもの之を靈魂とす靈魂は己れと云ふ事物の外に種々の事件を辨知するが辨知するに明白なると明白ならざるとありて明白なる辨知を思想と名くるなり靈魂は躰形なくして世界を覺知するの力を有するとせば下等動物にも靈魂ありとなせども悟性と意志とを含むとすれば精神と云ふ義になりて人間のみに之ありとなすなり精神の身躰と合併したるは即ち眞の靈魂にして其能く合併するは預定和合の理に由るなり吾人の靈魂は單純にして分割すへからず從て滅死す可らず下等動物の靈魂は悟

性なきが故に死後に前の事情を追回する能はず只々人能く之を爲せは人の靈魂のみ不死不滅と稱するなり

自然神道學には万有の事理を解釋する所なきに非ざれども要するに上帝許多の世界を形成せしめ此世界を以て最も善良なる者と爲すとの意を敷衍したるに過ぎず

元來ウオルフの説はライブニッツに從ふ所多きが最も分離するは元子論にして此に分離せしが爲めに却て種々の不都合を釀すとありき而もライブニッツに比すれば前後まとまりて甚だ理會し易かりしより獨逸の學理上に大影響を及ぼせり巧に開陳したるはビルヒンゲル、バウマイスデ・ル、バウムガルテンマイエル等なり爾來觀念論を濫用するもの甚だ多くして由て以て靈魂不滅を論するメンデルソンの如きあり由て以て功利的の道德を辨ずるカルベーエンゲルアブトの如きありバセドウは一個人の幸福を以て究竟の道理としライマルスは宗敎が現世の快樂を賤まずして却て之を奬勵するの傾あるを述べスタインバルドは凡そ智慧と云ふもの最上の快樂を得るに外ならずして基督敎も此理を主として興起したるものにして主樂敎と稱へらるゝを至當とするを説けり主觀法の流行するより一轉して自分一個を考察することを好むの甚しき遂にルーソーの懺悔話を出すに至れり

バルクレー

ライブニッツもウオルフも獨逸の人なり其の主觀を本とする異とするに足らず英國の人にしてロックの經驗派に屬し而も觀念を主として殆んど極端に達したるはヨルヨ、バルクレーなりとす其人となり甚だ善良なりしと云ふ（千六百八十五年に生れ千七百三十四年に死せり）

バルクレーの説に依れば吾人の感覺する所は凡て主觀的に存在するなり外物の森然として成立すると思ふは大なる誤謬なり前後を眺め山あり海あり草木あり禽獸ありとするは斯々の感覺あり若くは斯々の知覺ありとするに違はざるなり暮色遠きよりして至ると云ふも見る所は暮色のみ遠寺の鐘聲を聞くと云ふも聞く所は鐘聲のみ遠を稱するは皮膚の感覺并に筋肉の感覺を交へたるなり一間とし一町とし一里とするも外物の實に然るに非して種々の感覺の合併して顯はる

ゝなるべし外物は實に存在せざるなり外物は即ち內なり天上天下の森羅万象みな感覺の外に出てざるなり奥を極むれば只た精神のみありとす概念と意志を本とする所の精神のみ存在するとす然れども翻て考るに感覺は精神自ら造出するに非ず朱を見て黑と思はんと欲するも得べからず青天を仰て雷を聞かんとするも得べからず感覺の意志に交はらざるや明白なり然らば如何にして生する乎吾人の精神より一層優等の精神ありて之を司どるなるべし上帝吾れに万般の感覺を與ふるなり上帝吾れに諸種の知覺諸種の思想を授くるなり何となれば是等の件々は精神的の者に非れば採用する能はざるなり但し觀念を授與するのみにて自ら何の觀念をも存せざるとは甚だ不道理なるを以て上帝自ら諸般の觀念を懷包すると爲さゝるを得ざる可し吾人は上帝の觀念に付て万事を察知し能ふなり假令ば大陽が熱を生するとは實は上帝が視覺よりして程なく熱を感すべしと云ふことを通知するを指すなり宇宙は觀念の連續と俱有とに過きずして宇宙の法則は觀念の連續し若くは俱有する一定の順序に外ならざるなり

右は論說の大要にして左まで大切ならざる樣なれども其の學理上幷に宗教上に

功ある實に莫大なり視覺と他の感覺と關涉するの說は後世の心理學に大影響を及ぼし上帝に關する意見は教學共に尊ぶの社會をしてベルクレーの名をカーライルイマルソンと幷稱せしむるに至れり哲學に關してはハマンの言あり曰くベルクレーあらざればヒユーム出でずヒユーム出でざればカント顯はれずと格言に非れども妄言にもあらず

ヒユーム

ロックの經驗論を成るべく矛盾なき樣に釋解せんとし遂に純然たる懷疑教に陷りたるはデビッド、ヒユームなりヒユームは初め法律を學び次に商業に從事せしも後に專ら歷史と哲學とを修むるとに決せり巴里府の公使館に書記の任を帶びし時彼のルーソーと交友し居れりと云ふ(千七百十一年に生れ千七百七十六年に歿せり)

ヒユームはロックより一歩を進み萬事萬物悉く習慣に成るとを主張せんと欲せり曰く吾人は如何にして二物の間に原因結果と云ふ關係あるを知るか先天に依るにもあらず經驗に基くにもあらざるべし、何故かと尋ぬるに先天の智識は甲は甲

なり、乙は乙なり、と云ふ如き同一の事件にのみ限るとあれば原因と云ふとより之と全く相違する結果と云ふとに移る能はずして經驗は二個の事物の前と後とに連續するとを覺へしむるに止まりて彼れ必ず此れを起す此れ必ず彼れより生すと云ふ必然の意味ある事柄に轉するを得さればなり、實は經驗にて推理すと稱するは偏に習慣に基くとなり一の事が常に〳〵他の事に伴ひて起るを認れば習慣にて彼事が出れば此事は必ず現はれざるを得ざるべしと思ふべく、幾度も風吹きて草の靡くを視れば風は草を靡かす原因なりと勝手に斷定するに至るべし、左れども時間の連絡は固より原由の連續と異なる所あれば推して想へば習慣のため更に經驗外の觀念を生し眞僞如何を判斷するに由なき樣になると爲すべきなり偖て原由の說は他の必然の關係即ち勢力の如き者にも應用するを得其の勢力の觀念は何處より得ると問ふに決して感覺よりすると答ふる能はざるべし、感覺を刺衝する外界の事物は個々別々に存在するとを示すも必然の關係を現はすを得ざるなり、然らば反省よりすると答ふべき乎早く考ふれば然りと云ふべくして意思の爲めに身躰の動くより勢力の觀念を生せりと云ひ得るが如くなれども能く

考ふれば斷して然りと云ふ能はざるべし心意は身躰が如何にして動き得るかを知らざるのみならず、身躰は必ずしも意志に從ふて動くにあらざるとなれば自ら身躰を動かすと云ふも經驗の業に歸せざる可らざるやうなるが其の經驗なる者は一物の他物と共に存在するとを示して一物の顯はれて他物を抑制するとを表せさる明白の事なれば若干の觀念が連合して習慣の久しき遂に左樣なりと決定するに至れりと爲す外なかるべし必然の關係は一として觀念の連合より起らざるなし色々樣々の觀念あるが或は相合し或は相離れ或は相近つき或は相遠かりて終に外物と云ひ自己と云ふ樣なるとを生出するとし靈魂の類も觀念の集合する習慣より斯るものありと認むるに過ぎざれば觀念離散するに及んでは固より滅亡せざる可らざるとすと故にヒユームの說に從へば万般の道理諸種の原則盡く習慣にて認定せるに及へりと爲さゝるを得ざるべし斯く習慣に飯せしは思想の力を熟知するの階梯となり後世の哲學上に偉大の影響を與へたるなり看よ勢力の如く原因結果の如く經驗より來らざる知識ありとせず經驗敎を脫して別に考究する所あるへき筈に非すやカント實に此に感悟せしなり

コンヂヤック及ひヘルベシユス

ロックの說はヒユームの爲めに懷疑敎に飯したるが之を極端に達せしむるは佛人にあらざれば爲す能はざるとなりき佛國は第十八世紀に在ては百般の事物腐敗を極め、すると爲すと一時の感情を主として眼前の道理を貴びしかば經驗論を受くるに及んで手の舞ひ足の蹈む所を知らざるに及ふ固より其所なりしなるべし先つ始めにアツベヒ、コンヂヤックの感覺敎を唱ふるあり彼れ最初ロックの說を固信したれども後進んで別に一機軸を出せり(千七百十五年に生れ千七百八十年に沒す)

コンヂヤックはロックに從て智識は總て經驗より來ると云ふ命題を用ひたれども經驗は感覺と內省とに飯するとを非として內省も原と感覺に異らざるとを陳べたり乃ち曰く內省は感覺に外ならず心の作用は意志にせよ觀念の結合にせよ一として感覺に本かざるなし人間の智識は全く感覺より成りて毫も下等動物に違ふ所なければ人間を指して完全なる動物とするも可なるべく動物を指して不完全なる人間とするも可なるべしと斯く論すれども而も上帝を存在せずとし靈

魂を物質とする迄に論する能はざりき之を辨し詰めたるはヘルベシユス以後に在り

ヘルベシユスは巴里府に生れ二十三歲にして農業取締に任し大に貧民の愛敬を得しかども種々困難の事情に遭遇せしより辭して哲學に從事し往々新說を發して內外の耳目を驚かせしも痛く僧侶の憎む所となり殆んど身を措くに苦まんとせり其の意見は極端に走るの恐あれども其人となりは溫厚篤實にして博愛の情に切なりしと云ふ(千七百十五年に生れ千七百七十一年に沒せり)

種々偏僻の論說あるが中に倫理に關する見解は私愛を本とせしものなり蓋し万般の智識が外部の感覺より來るとすれば諸種の意志も外部の感覺より來るとし道德の原素も苦樂の情に限らんとするは自然の勢なりヘルベシユス曰く吾人の行爲は一として私愛に由らざるなし學問を修め事理を研究する如きも私愛に出るのみ而も其の私愛は凡て肉躰の快樂を主とするものにして心を勞するも力を勞するも感覺情慾を滿足せんとするに過きずとす道德の原理も職として此に在るなり善の爲めに善を働き惡の爲めに惡を働くと云ふの類は愚の甚しきものな

り善と云ふ特別の事柄もなく惡と云ふ特別の事柄もなし有る所は唯自愛の情のみ人は動物と同しく慾心深くして常に快樂を求め苦痛を避けんとのみ務め居れは政治が賞罰といふとにて衆人を服從するか如く道德の苦樂を主とし善を爲せば快樂を增進し惡を爲せば苦痛を增加する樣に定めざる可らず然らされば道德は毫も効能なきものなりと

ラ、メットリー幷に万有之躰系

佛人中に斯の如く道義を蔑視し何事も苦樂を標準とするに至る者あるは蓋し國家腐敗し道德宗敎政治共に虛妄の事を喧くし人民に適切に有益有利なる事件を悉く放却したるに由るなり左までもなき事に義の爲めなり、上帝の爲めなり、天子の爲めなりと嚴しく談し詰めらるゝに當りて、之を厭ひ之を惡むの心あれは、自ら人間を赤裸にむき出し凡そ人は斯く々々のものなり、何とか彼とか定則ありげに云ふは、皆僞言に過きすと辯明するに及ふへし、固より初めは抵抗の心ありて爲すにあらざれども、勢ひ茲に立至らざるを得ざるなり、餘りに阿彌陀を尊へは、下駄も阿彌陀も同し木の切れと云ふ口言の出るに異ならざるへし

ポルテール、デデロダランベルの徒は敎義を賤み世上の格式を嗤笑したることあれども唯物論の甚しきに至る能はさりき、甚しかりしはラ、メットリーなり、（千九百九年に生れ千七百五十一年に歿せり）其說に曰ふ、精神上の談は盡く妄想より出つ、人生の尙ふへきは唯、肉體の快樂なり、上帝を奉信するは無實にして無益なり、世界は上帝を無きものと定めざる以上は、決して幸福の域に達するを得ず、一たび上帝を除き去らんか、宗敎の爭亂は頓に止み無用の僧侶は直に跡を收むへし、靈魂は名ばかりにして、强て實を附すれば、腦髓と稱する外なき樣なり、腦髓に思想力の纖緯あるは、何そ手足に運動力の筋肉あるに異ならんや、人の下等動物に勝る所は、腦髓の結構と敎育の作用とに在るが故に、之を除けは啻に同等の地位に下るのみならず、雜多の事に於て數等以下に居らさるを得ざるへし、靈魂不滅とは何等の愚痴そやと

ラ、メットリーは斯く唯物論の極端に走れり、其死後數十年にして萬有之體系と云へる書の著はれ出つるあり、是れ唯物論を尤も巧妙に解說したるものなれども何人の著作に係るかを知り得べからさるあり、或は曰ふホルバックなりと、或は曰ふ其

師匠ラグランジュなりと、或は曰ふ全く別人なりと、未た判然せざるなり、書中に云ふ宇宙間唯だ物體と運動と密に結合するあるのみ、物體靜止すと云ふは、運動するとを妨けられたるまでにして、運動の力を失ふたるにあらず、運動に引力と拒力との差あり、二力の差用にて許多の變化をなし、万般の事物を發出するなりと、之を基礎として左の諸論を布延せり(一)人は物體なり人に心意と物體との兩部ありと云ふは、甚しき誤謬あり、心意も亦た物體なるのみ、心意の延長なくして見るへからさるとを稱する者は、果して何事を思惟するか、天下豈斯の如き奇怪なるものあらんや、靈魂の身體にあるとを云ふより、腦髓の身躰にあるとを云ふへし、思想も意志も皆な腦髓の發動に外ならさるなり(二)心意と物躰との兩部ありと云ふ謬あるより、上帝の存在と云ふ虛妄極まる考を爲すとなれり、人間は艱難に遇ふて其原因を解する能はざるなり、上帝と云ふ一種奇怪の事を作り出し、一にも二にも之に依託すへきとと定めたりき、恐怖難澁愚昧は是れ上帝を製作するに必要なる材料なり、祖先の卑屈なるは實に、及はざれども、今日猶ほ神學など唱へて眞面目に上帝の所行爲を說明するは、實に片腹痛きとなり、天地の大道は無神敎にあり、但し此敎を

守るには敎育と勇氣とを要するなり、之なければ謬信惑溺の流行する時代に於て焉んそ能く正大の理法を說くを得んや、無神敎已に眞理ならは、揮て之を世間一般に傳播するを至當となすへし、己自ら宗敎を信せざるも、下民の放蕩を制限する爲に、暫く上帝を尊ひ、經典を講し置くと云ふ如きは、迷誤の甚しきものにして人が所有品を濫用せんとを恐れて、之に毒藥を與ふるに異ならざるとなり、(三)靈魂不滅自由意志等は固より有るましきとなり、人間は世界の一小物にして金石草木と共にあらゆる情勢に束縛せらるゝなれは、若し之を指して万物の靈にて、外物を支配し得るとせは、天地の公道を破壞せんと勉ると同樣の事となるへし、僅々六尺の身にて千万年間千万里内に活動し居る大勢力の外に立たんとするは、愚痴極まるとなちずや、身亡して魂存すと思ふは、機械破るゝも其作用のみ殘ると思ふに類するなり、眞の靈魂不滅は名譽を後世に傳ふるとなるべし(四)前の諸說は萬有の躰系に由るものにして大を信するは眞に有益有利のとなりとす、眞の宗敎は人をして妄想に淫惑し、無用の事柄に困難を盡さしむるも萬有の躰系は人をして現世に安心し、爲し能ふとを爲して、爲す能はざるとを爲さゝらしむ、其得失言はずして知るべし、

道義を實行するにも、私利を主とし、人々各自に最も利用あるとを考へしむるを可とす、善人とは自己の利益を專らとし、他人が利益を謀るに是非とも俱に共にせざるを、得ざらしむる樣に働く者を云ふなり私利は是れ道義の根本なり

以上の四個條は書中論說の大意にして、經驗敎を極端に奔らしめたるものなりロックが智識の經驗より來る事を述べたるより、其流を酌むものは次第に經驗を重んじ、成丈け經驗に歸せんとし、經驗なりと論し詰め、終に究竟の唯物論に陷り萬有之躰系と名くる書の著はれ出るに到れり、玆に到りて亦た如何とも爲すべからさるなり

カント

獨斷敎と經驗敎と極端に達せんとする時に方り、諸派の學理を合併し、一種完成せる哲學を興起したるはカント其人なりとす、前世記の終りに、ストイドリン之を評して曰、新出の哲學は、諸學科の上に、不可思議の勢力を有す、從來哲理の何たるを知らざるものにも、此學を講究するの愉快なるとを感せしめたりと、同時に、フィヒテ評して曰ふ、此哲學は未た芥子の人粒に過きざれとも、久からずして、諸方の人類を

掩屏するの大木となるべしと、過稱ながら大謬なかりしなり

イムマヌエル、カントは普國クニフスベルフに生れり、兩親は馬具を業として、甚だ貧困なりしも、敎法に熱心して、頗ぶる正直篤實の狀ありき、由りて初めの程は母の師友たるシュルツに從て、專ら神學を修めしも、哲學、數學、物理學、は生來に好む所なるより却て大に上達するを得たり、クーノフィセル謂らく、デガード、スピノザ、カントの如く新派の哲理を主張するもの多くは、後年力を盡して、排擊する所の敎育法にて養育せられ居るとは奇なりと云ふべしと、父死してより、益々貧困に陷り、一二富家の子弟を敎導して、僅かに糊口を繫き、故鄕の大學の下等講師たるも尙ほ活計の道を求むる能はざりしが、書籍館の係りと爲るに及ひ年に五十圓を得る樣になれり、十二年間敎授たらんと欲して任に當るを得ず、四十六歲にして、始めて論理學、及形而上學の敎授と云ふ名を有するとなり、五十七歲にして、漸々夫の純理學を著し、爾來十年間に用理論、斷定論、其他種々の書冊、を出たし、毅然として當時第一の大家たりしとの名聲を上世に博するを得たり、常に故鄕に止り、エイナより聘するもエルランゲンより聘するもハブルより聘するも應ぜずして、爲めにクニフスベル

フの大學を以て全國の注目する所となし、修學の爲め數百里外より到來する者あらしむるに至れりウルツブルフの哲學教授ロイスカントを訪ふて曰予は單に先生を一見せんが爲めに、三百餘里の道を經過し來れりと、居常淡白にして、嘗て妻を娶りたるとなし、身躰弱小の方なりしも、身を攝する堅固にして、無病健全にて八十歳の高齢に達せり、(千七百二十四年四月二十二日に生れ千八百四年二月十二日に死せり)

カントは心理上にて哲學の分類を定めんとし、心意に認識、意思感情あるより認識自らの道理に關するを、純正道理と爲し意思の道理に關するを實踐道理とし苦樂等の感情の道理に關するを判斷とし、從て批判の目的よりして、純正道理批判實踐道理批判、判斷批判、の三大書を著述するとなれり

純正道理批判は、純正道理にて抱有する所を總括して論する者にして換言すれば吾人が先天にて辨知する所を充分に究察するものと認めらるゝなり、吾人の知覺するは、如何なる作用に依るかは、即ち最初の問題にして、カントは、覺性と悟性との二性よりして說明を始めたり、先つ第一に、覺性よりして先天に抱有する所は何等

の者なるを問ひ、第二に悟性よりして先天に抱有する所は、何等の者なるかを尋ね第一をば、超絕感覺學に、第二をば超絕論理學に辨せり、冒頭を概すれば、覺性と悟性とを以て、認識の要素とし、覺性の爲め感覺を得て事物を感受し悟性の爲め、總念を作りて事物を思惟すとし、感覺を踏まざる總念は空虛にして總念に合せざる感覺は紛亂なりと定むるなり、要するに感覺と總念とを目して、吾人の通曉力を發出すると斷するのみ、偖て是より前の二問に應答するとなるなり

第一の應答は超絕感覺學(感覺の先天の原理を究むる學)にあるなり、論して曰、感覺の先天の原理、即ち色、香、味、觸、等の諸感覺に本來固有する形式は空間と時間とに外ならざるなり、空間は外部の覺性の形式にして時間は內外兩部の覺性の形式なるが、空間は事物をして吾人の外に成立し、所々方々に排列する樣になさしむ、空間時間が先天に存在するとは、二樣に辨明すべし、一は、直接にして、形而上辨明と稱し、事件其自らに付て討究すると二は間接にして超絕的辨明と稱し其事件にして先天にあらざれば、尤も確實なる理學も、消滅に歸すべしと、斷定するとなり、

形而上辨明にては、初めに空間時間の先天に出つるを說き、次に二者が覺性に屬し

て悟性にあらざるを說く先天に出つるは、明白の事にして、四方を眺め、內外を悟るは、既に空間を覺るに依り、前後を察し、遲速を談するは、既に時間を覺ゆるに依るなり去れはとて、矢張り感覺に屬せざる能はず、何となれば悟性に屬するには彼れ是れと、特別の總念を作らざるを得ざるに空間も時間も無限に連續して、甲の空間と乙の空間とか判然と分離するに由なければなり、超絕的辨明にては、尤も確實なる理學として、純正數學を取るか、純正數學は、何に基するかと云ふに、空間時間に歸するに外ならざるなり、而して、此學は、必然にして普く應用せらるゝ勿論なり、必然にして普く應用せらるゝは、經驗より起らずして先天に表はるゝなれは、空間時間の經驗より起らすして、先天に表はるゝとは疑を要せざるなり、然れとも、此の空間時間の感覺は、客觀即ち外物の關係にあらずして單に主觀の形式に過きざれば、如何なる感覺も、多少主觀の原素を混せざるを得ずして事に對し物に接し、之を見之を聞くも、其事物の眞性を爲すなく、唯其事物が、空間時間と云ふ、主觀の形跡に捲き込まれ、一種異樣の狀態と爲すべきなり、是即ち吾人の知る所、現象に止りて、實躰に及はずとし經驗的に正確を信して、超絕的に疑惑を免れずとする所以なり

空間時間は經驗より來らず(一)机や書物に觸れて空間の觀念をなすに非ずして空間の觀念ありて後机や書物あるを覺知し得るなり器物にして長なく幅なく厚なければ何に由て其器物たるを辨すべけんや尤も空間の觀念ありとて外物に接せざれば存在を知る能はざれど是れ猶ほ眼あるも物品に對せざれば視力あるを知る能はざる若きのみ(二)物躰は總へて虛無に爲ると考へうるも空間は決して思想外に放棄すへからず(三)何等の事物も界限を有せざる無けれど空間は無邊無限なりと認めざるを得す(四)空間は宇宙に遍滿して一躰を成し彼れ是れ差別するとあるも均く廣大無邊の空間に屬すと爲さゞる能はず斯く空間は事物と相違するを以て事物の經驗より來る抔とは思も寄らざるとなり時間の經驗を離るゝこと亦之に准して推知すへし

第二の應答は超絕論理學に在るが此學は超絕分解法と超絕敏辨法とに分別するなり、超絕分解法は先つ純正の總念を發見するとを務む、夫のアリストートルは夙に此に見る所ありて、若干の範疇を數へ上げたれども經驗上に揭載せしのみにて啻に一定の理法に由らざるのみならず、空間時間をも包括したるを以て、擾々とし

て、紛亂、錯雜するの弊あるなり、純正の總念を枚擧するには是非とも一の原理に基かざるを得すして、之に基かんには論法的の斷定を察知するに如くなきなり、論法的の斷定を悉く列擧すれば悟性に屬する純正の總論を、悉く辨知するを得べし、而して、論法にては、斷定に四種ありとし從ひて純正の總念即ち所謂範疇にも四種ありとす、比較すれば左の如し、

分量	單稱的	此甲は乙なり	唯一
	特種的	或甲は乙なり	衆多
	全稱的	諸甲は乙なり	總計
形資	肯定的	甲は乙なり	實在
	否定的	甲は乙にあらず	假空
	無限的	甲は非乙なり	界限
關係	合式的	甲は乙なり	本躰及屬性
	臆測的	甲が乙なれば丙は丁なり	原因及結果
	離接的	甲は乙若くは丙なり	相開(動及反動)
樣式	未決的	甲は乙ならん	可能及不可能
	實說的	甲は乙なり	存在及不存在
	分明的	甲は必ず乙なり	必然及不必然

以上十二の範疇よりして、諸般の先天の眞理を制定するを得るなり、此範疇は、固より、先天に出つるを以て次きの二事を明かにす、曰く此等は必然にして、普く應用せらるゝを得ると、曰く此等は形式に過きざるを以て、感覺の爲めに充足せらるゝを要すと而して、感覺的の事物と純正の總念と、合併するの摸樣は、大に注目すべきとなりとす、若し二者にして、本性を同くすれば、直に合併するを得べきなれども、差異の存する黑白より甚だしきを以て、媒介なくては到底一致和合する能はずして、其媒介なるものは、一方に於て感覺的の事物に類し、又一方に於て純正の總念に似たる質を有せざるを得ざるべし、然る如き媒介は、只空間と時間とにして、殊に時間を可となすなり、時間は先天に著はれて、範疇に順應すると全樣に万物を囊括して、感覺に整合し、以て双方を自由に結合するより、名けて超絶的の連結とするとあり(一)時間が分量と連結し得るは其連續して一に一を加はへ更に一を加はへ漸次に數

へゆくに依るなり其連續を最初に止むれは誰一に應し何程か續くれは衆多に應し無限に續へしとせは總計に應するなり(二)時間が形質と連結し得るは其資料の充足すると充足せざるとに依るなり感覺にて充足せらるれば實在に應し感覺にて充足せられざれは虛無に應するなり(三)時間が關係と連結し得るは其順序を顯はすに依るなり何事にても關係を察せんとせば必す一定の時間を感せざるべからず時間に於て永く實在を表すれば本躰に應し次第に連續すれば原因に應ず一物の狀情と他物の狀情と俱に共に發出し居れば相關に應ずるなり(四)時間が樣式と連結するは其事物と一致するに異同あるに依るなり時間一般一致すれば可能に應し時間の一部分が一致すれは存在に應し時間の總躰が一致すれは必然に應するなり

範疇と連結とにて感覺より來る諸般の現象を統轄し得るが統轄するに一定の規則なしとせざるなり四種の範疇に准して四樣ありとす(一)凡そ感覺は外延的の分量を有す何等の事物にても部分全躰の差別を立つる能はざる無くして差別を立つる能はざる時は思想中に包容するを得ざるに似たり時間は視る可らず聽く可

らざる者なれ共其經過を考へんとするには是非とも一分二分三分とか一日二日三日とか一年二年三年とか順次に計算しゆかざる能はず幾何學に二點間に一直線を引くと云ひ二直線にて一面を圍む可らずと云ふも斯く外延的に考察せし上にて辨明するに外ならず事皆な然り此則を名けて感覺の單則と爲す(二)凡そ感覺の資料たるべき者は內包的の分量即ち度を有す熱といひ寒といひ反對の意味を呈出するや何そや熱實に存在すとすれば酷烈の熱なるか微弱の熱なるか何にせよ多少の差あるや必せり微弱の熱を次第に減却すれは冷となり大に減却すれは極寒となり遂に毫も熱を留めざる樣に覺ゆるが熱と寒との違ひを尋ぬれは唯だ熱が餘計なるか少きかに過きず白といひ黑といひ堅といひ軟といひ剛といひ怯といひ賢といひ愚といふも度を異にするのみにして百度若くは五十度若くは零度と稱するが如きなり有り無しは多少に依ると知るへし此則を名けて知覺の豫料と爲す(三)經驗は知覺必然の連絡を顯はすより成るなり一定の秩序あらざれは何をか思考するを得ん抑も時間に恒久、連續、俱有の三狀あれば時間に顯出する諸物件は素より此三樣に依從せさる能はざるべし第一に云ふへし何等の變更に於

ても本躰は不變の性を有すと物躰が轉變する如く考へらるゝは轉變せざる所に對して言ふのみにして轉變せざる所なければ轉變の如何を考ふべからざるなり第二に云ふへし何等の變更も原因結果の法則に從ふと二個の物件連續するも一を原因とし一を結果とせざれば確實に連續といふ事を思考する能はず而て連續なくして經驗ある筈なければ原因結果の關係は諸物成立の基礎を表するなり第三に云へし同時に顯出し居る物件は充分に相關の有樣ありと甲乙同時に存在すれば甲は乙を感化せんとし乙は甲を感化せんとし互に感化しあはんとす地球月を引き月地球を引くのみならず地球や月に引れおる吾人が手を擧げ足を動かせば幾分か地球幷に月を動搖するなり、以上三則を名けて經驗の對比と爲す(四)經驗の形式的狀情に一致するは可能にして現象と爲り得へきとなり經驗の資料的狀情に一致するは現實にして正に現象たるとなり經驗普遍の狀情にて現實の性を顯はせるは必然なり是れ皆な事物の本質に關せずして事物と認識力との干係の模樣を表す山なり川なり花なり人なり同樣の物にてもいつも三通であらうであるでなければならぬ)に思考するを得へし此則を名けて經驗的思想の公準と爲す

此等範疇の諸則は總へて先天に存在して形而上學の基趾たるべきものなり而も是れ經驗的の事物にのみ適用すべくして經驗外に出て事物の眞躰に合同す可らず彼物を視て範疇にあてはめ、此件を聽て範疇にあてはめ、前後左右盡く範疇にあてはむるも斯く刺衝し來る者は空間時間に顯はるゝ雜多の感覺に外ならざれば何程眞奥を穿たんとするも詮なきなり、先天の範疇なりとて感覺を混せざれば空虛同樣にして何の益もなけれど先天たりと云ふが爲め動もすれば感覺の範圍外に馳突せんとすることあり然れども此に於て危險猶ほ未た甚しからす別に古來哲學者の喜て使用せし所に拘らす空理妄想に陷り易くして最も危險の恐ある者の存するあり之を辨明して從來の獘を一洗するは超絶敏辨法の目的なり

譬へて言ばゝ超絶分解法に於て說明したる所は常に太平を歌ふへき島國なり山川の形狀歷々として指定すへし但た海上を望めば雲霧漠々山嶽の如きもの島嶼の如きもの處々に顯はれ船舶を造り順風に乘して進行すれは水烟奔騰し波濤激衝するあるのみ斯く人目を迷はすは理性の然らしむる所なり超絶敏辨法にては先つ悟性と理性とを區別す悟性に範疇ある如く理性に觀念ありて悟性が範疇よ

り單則を生出する如く理性は觀念より原理を生出するなり理性の第一義とする所は有碍に對して無碍を發見するにあるが實は人性の癖として個々特別の事件に滿足せず悟性にて種々に統合し得たるより更に進て究竟の大道理を覺知せんとするに基けるなり之が爲め著大の虛僞を生す原理をば推測式に歸すとすれば虛僞の由て生する所の合式約結離接の三段に別るべし蓋し(一)合式にては

諸丙は乙なり
諸甲は丙なり
故に諸甲は乙なり

と云ふ式を幾度もくり返へし常に主位に留まりて實位を爲らざる者を認めんとするなり認め得れは固より自主自在の自己たるへし(二)約結にては

甲が乙なれは丙は丁なり
甲は乙なり
故に丙は丁なり

と云ふ式を幾度もくり返へし常に原因に留まりて結果と爲らさる者を認めんと

するなり認め得れは固より萬物覆載の世界たるへし(三)離接にては

甲は乙若くは丙なり
甲は乙ならす
故に甲は丙なり

と云ふ式を幾度もくり返へし常に全躰に留まりて部分と爲らさる者を認めんとするなり認め得れは固より全智全能の上帝たるへし第一は合理心意學の根本となり第二は合理世界學の根本となり第三は合理神道學の根本となるなり(四十七頁及四十八頁のウヲルフの說を參看すべし)

合理心意學にては自己即ち所謂靈魂を說き靈魂は物體に關せすして永久絕滅するなしと爲すなり是れ不當の言と謂ふべし斯の如きとは素と「吾は思ふ」といふより生するが「吾は思ふ」は一の認識に過きすして絕えて總念の部類に屬せざれば何ほど「吾」の存在を確めんとするも自ら自身の面相を見んとすると一般毫末の結果を獲ざるへし若し「吾は吾を思ふ」として强て吾の存在を思はんとすれば其思はるゝ「吾」が果して實際に存在するときには必す一度は感覺を通過し來らざる能はざ

る等なるに「吾」が感覺を通過する抔とは思ひも寄らざる事なれは「吾」の別段獨立して成立せざるは疑を要せざるなり靈魂を不滅とする類ば總へて無根の妄語とすへし要するに合理心意學は新知識を開發するの力なくして徒だ人をして考究に界限を置き唯物論の甚しきにも至らす精神論の極端にも走らしめざるの益あれは足れりとす

合理世界學は範疇の順序を追ひ分量上にて世界の總計を考へ形質上にて物質の分性を考へ關係上にて原因の連續を考へ樣式上にて現象の依從を考ふるなり然るに一々背戻の理論と供ひ甲說を確乎たる正理と認むると同時に之が駁擊に當るへき乙說をも確乎たる正理と認めさる能はさる樣なり(一)甲は曰ふ世界は時間に於て元始あり空間に於て邊際ありと、乙は曰ふ世界は時間に於て元始なく空間に於て邊際なしと(二)甲は曰ふ何等の事物も單獨の多く集合するより成り世界には單獨若くは單獨の集合のほか存在すへきものなしと乙は曰ふ何等の事物も單獨の集合より成らずして世界には曾て單獨なるものゝ存在するなしと(三)甲は曰ふ世界の現象を興起する機制的の原因のみにあらずして別に自由意志の原因と

いふ者の存するありと、乙は曰ふ諸事機制的の原因を有す自由意志の原因といふ者決して存せずと(四)甲は曰ふ世界には其一部若くは其原因として必然なる者ありと、乙は曰ふ世界には其一部としても其原因としても必然なる者あらず、と甲を是とすれば乙をも是とすべく乙を是とすれば甲をも是とすべく二者互に衝突し互に矛盾して消滅虛無に歸し了らん

甲にも理あり乙にも理あれど孰れを眞實と決しがたくして愈々論辨すれは愈々分離し遂に水掛け論に終るへき例を擧けん

甲曰はく世界は時間に於て元始あり(世界に始めあり)若し元始なければ今年若くは昨年若くは何の世代に在て既に無限の變動を經過し了らざる可らず然るに無限の變動は經過し了る等なくして經過し了れは限を有するを以て無限の性を失ふなり故に世界は是非とも元始ありとせざるを得ずと

乙曰はく世界は時間に於て元始なし元始の前に何樣の事物も成立せずして何樣の事物も成立せざれば元始が有りや無しやをも定めがたし元始に先て虛無ありとするは元始なしと謂ふに同じ故に世界には決して元始ありとするを得

ずと

甲曰はく世界は空間に於て邊際あり(世界に限あり)若し邊際なければ世界全躰を無限とせざるべからざるが何事も覺知するには一部一部と限ある間を尋ね ゆくを則とすれは無限の世界を覺知する迄には尋ね廻ることと無限ならざる能はずして限なく尋ね廻るとは到底爲す可らざる事なり町を知り縣を知り諸道を知り而て後ち日本全躰を知り得るが世界にして無限なれば斯く漸次に知るとも無限なるや必せり是豈に爲し能ふ事ならんや故に世界に邊際あるは疑ふべからずと

乙曰はく世界は空間に於て邊際なし若し邊際あれば世界は空虛の内に懸ると となるが空虛に對して邊際ありと謂ふは邊際なしと謂ふに異ならざるべし故に世界には邊際なしと

甲曰はく世界の現象を興起するは機制的の原因のみにあらずして別に自由意志の原因といふ者の存するあり若し機制的の原因のみならば原因に原因あり其原因に復た原因あり其原因の原因に復た原因ありて遂に究極すべからず然

るに何事にも原因ありとし而も世界究竟の原因は孰れに在りとも定めがたしとすれば世界は單に機制的の原因に依らざるや明かなり(千萬の盲人が手を引きあひて進行するに寸分も行列を亂すとなけれは固より眼あきが輔助し居ると考へざるを得ざれど機制的の原因のみを信ずる者は眼あきなどの輔助なく無數の盲人相ひ寄りて明を生すと言はんとす呵々)

乙曰はく諸事機制的の原因を有す自由意志の原因といふ者決して存せず何等の原因も前に原因なけれは發動せざる譯にして世界究竟の原因を以て他の原因に先だゝれずとするときは無論存在すまじき事なりとす自由意志の原因をして全く自由たらしめは原因の稱を下たさゞるも可なるべきに機制的の原因を統轄すと爲し機制的と同樣にして自由の性を失ふが如くならしむるは自家撞着の言なり自由意志の原因何故に存するかと問ふに機制的の原因に最先の活動力なきが故に之を運轉せしめんが爲めなりと言ふに外ならず最先の原因なりとて後件を起すべき理ありて後件を起せば少も機制的の原因に異ならず自由たるところ何處にあらんや世界には機制的のみありて自由意志あらざる

なりと

合理神道學は上帝を説明するが要するに三種の理論に基くなり第一は實躰學的の理論なり曰はく完全なる者は存在せざる可らずして存在する能はざる者は完全と稱し難ければ上帝の如き完全なる者は固より存在せざるべからずと(是れデカールトの論説なり第八頁に云ふ三角合して二直角とならざるものは三角をなすべからざるが如く虚に存在するものは斷して純全となす能はざるが故に元來純全なるものは眞に存在せざるを得ず彼の上帝は元來純全なるものゝ謂なり焉そ眞に存在せざるを得んやと然るに是れ寔に論破し易し存在する存在せざるは總念に於て何の利益もなし金百万圓ありと云ふも、金百万圓なしと云ふも百万圓といふ事には毫も變化なくして實際の變化は我が手の中に在りや無しといふ所に存するのみ、充分に考へ得たれはとて、豈に其眞實を證するを得んや、第二は世界學的の理論なり、曰はく世には盛衰榮枯ありて果敢なき事のみ多けれは、必す之を總括する大能力なかるべからず、限制ある者ばかり顯出しをる樣なるが限制ある者ばかり有りとは思考すべからざれば、制せられず限られざる萬能の上帝あるは

當然の事なるへしと、是亦た正理あるものに非す、世間亂雜なりとて、何そ必しも純眞の上帝あるを斷すべけんや、制限ある者ばかりにて不都合なるとも何そ必しも別に無限の能力あるを保すべけんや、皆な假空の妄想より發出せしのみ、第三は預匠的の理論なり、曰はく天地間巧妙なる規律あり、日月星辰の整然として運行する山嶽河海の森然として成立する、實に感歎するに餘あり上帝の造作する所に非すして豈能く此の如くならんやと、是れ古來言ひ傳ふる所にして理もあり趣味もある事なれど、眞正の論法に照らせば、容易に挫折せざるを得ず、世界の宏壯なる形狀より上帝を考ふるは上帝を以て至大の建築家とするものにして、之を以て材料の物躰を創造すると爲すにあらず、大工は木を切り釘を打ち莊嚴なる宮殿を作るも木や鉄は何樣にしても製出する能はず、世界の預匠のみより推せば上帝も或は之に類するならんか、且つ世界の構造は巧妙は則ち巧妙なれど、巧妙を究極して全く完全無缺の域に達したるかは、斷言すべからざる所にして、隨て之が製造者なるものも果して至善至智なるかは、亦た斷言すべからざる所なり、又假令構造を完全無缺とするも何を以て製造者の一個の上帝のみにして、他の同類なきを判定すべけ

んや推しつめて辨難すれば預匠的の理論は維持に苦しみて世界學的の理論に讓らんとし世界學的の理論亦た維持に苦しみて實眸學的の理論に讓らんとし、四分五裂して歸する所なきに至らんとす斯く合理神道學の上帝論が破滅に屬する如くなれど、人をして宇宙を一躰と見做し、六合の事物個々別々に獨立せずして、唯一の大原因に隨從する樣に推考し得せしむるの益あり上帝の存在は證明しがたきに拘らず上帝あり上帝の万有を主宰するありと假定し置けば寰宇全般の秩序を考ふるに大なる便利なれば、強ち棄却すべき物躰にもあらず、唯た便利は便利なりとし、知る可らざるは知る可らずとし、考察の區域を判然たらしむれば可なりとす」

理性の觀念より合理心意學合理世界學合理神道學の諸原理を顯はせるも、皆な假空の妄想に基きたるとは、前に陳述せし如くなるが、此等の諸原理が眞に無用無益のものならば、別段に顯はれ出でまじき筈なるに、著大の勢力を以て表出し來り、種々雜多の議論を包括し去らんとする傾向あるは、訝かしき事にあらずや、實は前條にも少く辨せし通り、假空の妄想に基くも、議論を整齊するの便益あるなり、合理心意學に說く處の靈魂は實理上甚た不都合なるにせよ、吾人が心意の作用を解說す

るとき、靈魂が直に活動し居るかの樣に考へざれば、困難を感する尠少ならざるべし、合理世界學に說く處の原因の類も實理上甚た不都合なるにせよ、宇宙の現象を解說するとき、原因が絕えず連續し居るかの樣に考へされば、困難を感する尠少ならざるへし、合理神道學に說く處の上帝も、實理上甚た不都合なるにせよ、乾坤の躰制を解說するとき、上帝が萬物を統轄し居るかの樣に考へざれば困難を感する尠少ならざるべし、必竟するに妄想は妄想として排斥するも、多年の經驗にて收得せる許多の知識を整合するの益あらば、心意學なり世界學なり、神道學なり、若干の改正を加はへて永く保存しおくとも不利を來たすなかるべし、且つ此等の觀念は論理の如き實用的の事件に益ある莫大なりとす、自由意志靈魂不滅、上帝存在、などは知識開發の點に於て何の効能もなけれど、德義を養成するに須臾も欠くべからざるのみならず、實際德義の感情に厚きものは須臾も離す能はざるに似たり、純粹の現論は一寸も曖昧なる事情を許容せざるも實際活用の範圍は悠々寛々として優美の資性を備ふる多くして大なり、純正理性批判玆に去て實踐理性批判將に出てんとす

六十二頁より此處までは專ら純正理性批判に關するなり即ち

緒論　（六十二頁十一行より　六十三頁　六行まで）

超絶感覺學　（仝　七行より　六十五頁　十行まで）

超絶論理學　（仝　十一行より　七十一頁　九行まで）

超絶分解法　（仝　十行より　八十一頁十四行まで）

超絶敏辨法

原書には緒論以下を原素の超絶的敎義と方法の超絶的敎義との二大部に分ち、超絶感覺學超絶論理學を原素の超絶的敎義に包括したれど方法の超絶的敎義は極て短簡なる上に、左まで必要も無きものなれば、哲學の歴史上別段揭出せざるを常とするなり

實踐理性批判は純正理性批判と殆と全く反對の地位に立ち彼に破壞する所は此に保存し、此に主張する所は彼に非難する有樣あり、蓋し主旨を異にするものにして

て純正理性批判にては道理が先天に事物に關涉し得るかを尋ね（五十五頁）實踐理性批判にては敎理が先天に意志を限定し得るかを尋ね、事物に就ては感覺を主とし、意志に就ては原理總念を主とする爲め、自ら順序を顚倒せざる能はざるなり、純粹の理論に於ては、事物の本性に進めば漠然として自失するの狀あれど、實用の思想に於ては、始より斷乎として顯はれ出で自由意志靈魂不滅等を憑信するに及ばんとす、道理が先天に意志を限定し得るは無論の事なれと、吾人の行爲が大抵喜怒愛樂等の情に因て興發する樣に見ゆるより先天の模樣を覺知せんとするも得べからざるとより、此がため實踐理性批判を二分し分解法に於て意志が感情に依賴せずして直に道理の制裁を待つことあるを陳へ、敏辨法に於て道理の支配と感情の拘束と相ひ干係する狀を辨せんとす

分解法は先つ所謂る道德の規則を以て意志が道理に依從するの證となす、道德は情慾の外に立ち快樂あるも溺れざらしめ苦痛あるも堪へ忍ばしむる力あり善の爲め「せよ」の命を受くれば、是非ともせざる能はざるが、其「せよ」の命は快樂に反して出づるともあれば感覺に依らざるも時にして、一身の說に逆ひて起るともあれば、

各自特別の狹隘なる道理に關せざると疑なし、實に道德は普通の道理に基くも、のにして、普通の道理が意志の方向を定むるより起れど、意志の方向が普通の道理に定めらるゝ時は、則ち意志と普通の道理と一致し居り、意志自ら決行して顯はるゝに異ならざるなり、自由意志は素より爭はれざる事なるべし、しかも自由意志の働作を熟知せんには、意志尋常の發動を觀察せざるべからず、抑も通例は苦を避け樂を求むるを望み、苦と苦を較へて大苦を逃かれ、樂と樂を較べて大樂を受けんとし、事々物々苦樂を標準として判斷しをるが如し、苦や樂や死生を決するほどの勢あるに拘らず、毎に轉變して一定せざるの恐あり、我が苦とする所人に於て樂となり、人の苦とする所我に於て樂となり、我が大愉快なりとして歡喜するものも、人に在ては左まで快樂の情を喚起するなく、人が非常の苦難として憂愁するものも、我に在て何等の配慮を煩はさゞるとあり、加ふるに昔日の樂今日の苦となり、今日の苦後日の樂となり、何を以て快樂とし何を以て苦痛とするやも測られさる樣なれば、到底苦樂の二件に因て人間萬般の行爲を決定するものと斷言する能はざるべし、感覺敎を奉し快樂のほか主とすへき所なき如く思惟する者は甚しき誤謬に陷り

しに非すや、然れども苦樂の意志を刺衝すると弱小ならず、意志は純粹の道理にて支配せらるゝも苦樂と供はざれば、果して支配せらるゝや否やをも識別する能はざれは、苦と樂とは充分に注思するを要す、唯だ苦なり樂なり人々特別のものを取らずして、普遍の道理を幷合し得べきものを取らんこと肝要の點なり、故に道義最上の原理に曰ふ、自己の行爲をして普通の理法に適合する如くに働作せよと、乃ち苦を去り樂に就くも、一身偏頗の情慾を抑へて、諸人が服從すべき普遍の道理に依從せざるを得ざるなり、若し何物が意志をして道義の法に隨はしむるかと問はるれは、道義の法を尊重するの一事と云はんのみ、尊重せざる可らざるとならば固より一種の苦痛たるべけれど、其尊重は己れ自ら爲すところにして毫も他に强制せらるゝ無けれど寧ろ快樂の稱を下すを至當とす、但し自ら尊重の念を發して自ら尊重の狀を顯はすに快樂たるに相違なきも、世間一般の人々が道德に對して斯の如くあらんとは、決して思考すべからざる所たれば、悲くも道德を歡喜するといふ事は單に想像のみに留め置かさるを得ず、誰か喜て人の危急に赴くか誰か喜て資財を窮民に投與するか、當代に在て道德に隨從せんと欲せば是非とも多少の苦痛

に遭遇せざる能はざるなり

敏辨法(七十一頁)に云ふ理性の第一義とする所は有碍に對して無碍を發見するにあるが實は人性の癖として個々特別の事件に滿足せず悟性にて種々に統合し得たるより更に進て究竟の大道理を覺知せんとするに基けるなりと是れ原より然るべき事なるが、純正理性批判に於ては究竟の大道理を空漠に歸する傾向ありとし、實踐理性批判に於ては判然として現出すべしと爲すなり(其差違の理由は八十二頁に在り)更に轉し無上の善即至善は何なるやを尋ぬん、若し至善を目して諸種の善の基本たりとせば直ちに德なりと答ふべきのみ、而も有情の人類は每に幸福を希求するを以て、德のみにては至善と稱し得ざるに似たり、至善は須く最大の德と最大の幸福を幷合せる者と爲すへし、然らは最大の德と最大の幸福と何等の關係を有するか、幷合するは分解的なるか、總合的なるか、古人は大抵分解的に主張し、ストア派は幸福を以て德に屬すとなし、自己の德を認知する是れ幸福なりと云ひ、エピキユラス派は德を以て幸福に屬すとなし、幸福を獲るの道を認知する是れ德なりと云へり、然れども、德と幸福とは元來性質を異にするが故に、如何にしても德

を幸福に屬し若くは幸福を德に屬するわけにゆかざるべし、依て幷合は必す總合的ならざるべからざる樣なるが、總合的たらば一を原因とし一を結果とし、德ありて幸福あり、幸福ありて德ありとする外なし、而も德と幸福とは原因結果を爲すと言ふと同時に、德と幸福とは原因結果を爲さずとも言ふを得、實際德を修むるも幸福を受けずして幸福を有するも德を欠くと尠からず、兎は云へ原因結果の關係は抛棄すべきものに非ずして、現世に於て其關係を亂すやうなるも虛靈の世界(視聽等の感覺に依らずして心神を活動する不可思議の境界)に於て充分に之を保持すと爲す、虛靈の世界にて至善を行ひ、虛靈の世界にて最大の德と最大の幸福と二つながら具備すべし、但し最大の德を有せんには靈魂不滅を要し、最大の幸福を有せんには上帝存在を要す、(一)人類は甚た不完全なる者にして、漸次に德を養ふは勿論なるへけれど、德を積み德を積みて最大の德に達するには、無限の時間を必須とするが、既に最大の德の目的とすべきあれは、無限の時間に堪ふへき靈魂なかるべからず、靈魂奚そ滅亡せんや、(二)至善には最大の幸福あり、最大の幸福とは欲する所として得ざるなく、願ふ所として遂けざるなき事とすれは、到底人力の能くすべき者

に非ずとす、德義に於て少しも欠乏するなく、而も居常絶大の快樂を受けんとは、聖人も難しとするところにして、凡夫の夢裡にも企及し得ざるものなり、上帝なかりせば何に由て最大の幸福を享くを得んや、上帝か全智全能にして人類の志望を熟知し居れは必す得がたき快樂受けがたき幸福を授くるとあらん

斯く自由意志は道德の成立より證せられ、靈魂不滅は最大の德より證せられ、上帝存在は最大の幸福より證せられ曾て純正理性批判に於て消滅し了りたる件々、此に至て確乎と現出するとと爲れり但し確乎と現出したりとは言へ道理上どこまでも受け合ふへきものに非すして單に實用上須臾も避くるを得ざる事件なりとなすへきのみ自由意志果して非難す可らざるか其的實なるとを證する能はざるなり靈魂不滅果して非難す可らざるか其的實なるとを證する能はざるなり上帝存在果して非難す可らざるか其的實なるとは證する能はざるなり的實なるとは證すべからざるも而も判然として顯はれ毫も非難を容れられざるは即ち實踐理性の純正理性に異なる所なり曖昧に聞ゆるも曖昧の區域明晰なれば道理を錯亂するの憂ひなし荒唐に類するも荒唐の區域瞭然たれば知識を紛擾するの恐れなし究察の致らざるところ亦妙趣なきにあらず夫の三事焉ぞ冷笑に附し去るを得んや

八十二頁より此處までは專ら實踐理性批判に關す序に掲くへきは宗敎の事なるがカントは自家の宗敎說を「純正理性內の宗敎」といふ書に出したれは左に其大意を陳述し置かん先つ問はん宗敎と道德とは何樣の關係を有するかと若し道德を以て宗敎に依從すと爲せば畏懼希望を善行の本源と定めざる可らす若し宗敎を以て道德に依從すと爲さば（八十六頁に述ふる如く）何の妨碍にも遇せざるへし至善至幸を思へは自ら上帝の存在を假定せさる能はざるも上帝の存在を思へばとて決して德義を守るの必要を感するに至らず要するに宗敎は吾人の義務を上帝の命なりと認むる事に外ならさるへし吾人の義務たるを知る前に上帝の命たるを認めざる可らざる如き規制は天啓宗敎と名けられ上帝の命たるを知る前に吾人の義務たるを認めざる可らざる如き規制は自然宗敎と名けらる凡そ敎會といふは多數結合の力を假りて罪惡を制止し德義を增進せんとする倫理的の集會なるが眞實の敎會は上帝の座下に善男善女の謹愼する

を指すものにして世上の教會は之を巧に模倣し見るべからず聞くべからざる虚靈の境界を見るへく聞くへき物躰の境界に寫し出されんとするものなり既に虚靈を去て物躰に就く上は固より範疇の作用に隨はざるを得す(六十四頁六十五頁を參看せよ)乃ち分量に於ては教會は總計を主とすへくして假令幾多の意見に分離するも一種確定せる條理にて統轄せざる能はずと云ふとあり形質に於ては教會は純粋を主とすべくして謬信に惑溺し惡鬼に恐怖し狂癲に類似すること無きやうに深く注意せざる能はずと云ふとあり關係に於ては教會は會員相關の狀にて自由を主とし獨裁に傾かず民治に流れず誠實に共同一致せざる能はずと云ふとあり樣式に於ては教會は規制の動搖せざるを主とし施行上種々の變更あるも根本の法度を何處までも維持保存せざる能はずと云ふとあり要するに教會は德義的の確信を基礎とし此確信に依て動作し此確信に依て運動せざるへからさるなり然れども人性の卑弱なる遽に德義の必要を感するを得ずして何程德義が教會の基礎たりうるとを聽くも別に上帝の惠與を被り新膚にて過分の福祉を享けんとを希望する樣になるなり故を以て何等の教

會にても二個の要素を幷合す則ち一方に於ては純粋の德義に因りて道理上須臾も離れがたき事件を憑信し又一方に於ては先代より遺續し來れる若干の規則に從ひ固陋に見え惑溺に聞ゆるも更に顧慮するに及ばすとするに至る而も斯く德義と習慣の兩樣に顯はるゝにせよ教會の價格は全く二者の比例に存する者にして德義が習慣を制すれは善良なりと稱し習慣が德義を制すれは醜惡なりと稱するなり僧侶が權柄を專にして種々奸猾なる計謀をなすは從來の惡弊の積み重なるに外ならずして教徒一般に神明を奉信して和氣雍々たるの狀あるは德義の勢力の發揮し來るに過きすとす經典の要旨は德義に在り若し經典にして德義に關せざるとあらは使用せざるも可なり抛棄し去るも可なり德義を離るれはポールの言として何かあらん凡そ經典は誤解せらるゝも德義の念を保合する以上は精確に解釋せられながら德義の念を離脱するに優ること萬々なりとす經典の一語一句を德義に適應せんとせは必す牽强附會に渉るの恐あるへけれど世態の進歩し學理の發達するに隨ひて自ら德義を綿密に幷合する樣になるや疑を要せざるなり唯た德義のみが教會の主眼とする所なり若し

唯だ德義のみが世人を支配するに及はゞ即ち天國に達したるものと謂ふへし然れとも此に及ふには無限の世代を經過せさる能はさるを奈何せんや云々前に陳述せし所は取りも直さずカントの宗教論なり

曾て曰ふカントは純正理性批判實踐理性批判斷定批判の三大書を著述せりと前既に純正理性批判の大意を解說せり又既に實踐理性批判の大意を解說せり餘す所は徒だ斷定批判のみ若し斷定批判の大意を解說し了れば則ちカントの哲學躰系を畧ぼ陳述し得たりと謂ふへし抑も斷定批判は何の爲に設くるかと云ふに純正理性批判にては悟性を主とし悟性外の事件は恃むに足らずと爲し實踐理性批判にては理性を主とし理性外の事件は貴ふに足らすと爲しゝより悟性と理性と互に相ひ背馳するの狀を顯はしゝかば若し斷定にて二者を和合せんには如何なる結果を得へきかと考察せしより起れることなり斷定といふ能力は實に概念の能力たる悟性と原理の能力たる理性とを和合し能ふが如し純正理性に在ては何事も自然法に隨從するとし實踐道理に在ては何事も自由力にて決定するとし相ひ容れざる樣なるも斷定は特稱を全稱に包括し個々別々の物件を一統普通の模

樣に歸して雜駁なる自然法を單一なる自由力に協合し毫も戾る所なきやうに爲し得ざるに非さるなり而て万有自然の事理を心中自由の意志に順應すとするは取りも直さず造化の意匠といふ事にして此を目的として動作すれば自ら快樂の感情を發するなるべし故に早く言はゝ斷定は意匠に關し兼ねて快樂苦痛に係るものとして可なり

造化の意匠を認むるに二樣あり(主觀的)物に接して未た何等の概念をも生せさる前に快樂若くは苦痛を感するを美妙の能力と稱し(客觀)先つ一種の概念を生し而て後ち物の順應し得るや否を檢するを結局の能力と稱す扨て美妙の能力に移らんに始めは固より分解法に依らざるへからざるが分解法には美麗に屬するものと宏壯に屬するものとの區別あり何をか美麗とするかと問ふに形質に於ては私慾を離れて滿足する樣にし分量に於ては諸人推しなべて滿足する樣にし關係に於ては目的を示めさずして意匠の結構を顯はす樣にし樣式に於ては概念を經ずして是非とも滿足せざる能はざる樣にするものとす何をか宏壯とするやと問ふに(美麗は形質を旨とし苦痛は分量を旨とす分量に於ては絕大にして万物に超過

する樣にし形質に於ては苦痛に打ち勝ちて快樂を感する樣にし關係に於ては天然に勢力ありとしながら自ら之に優り得ると思ふ樣にし樣式に於ては必ず首肯して歎服せざる能はさる樣にするものとす

此類の事はシオペンハウエルハルトマンの審美學を解釋するとき分明に爲るべけれど然りとて此儘に過き去れば曖昧に渉りて何とも理會し得ざるかの嫌なきに非さるを以て聊か類例を擧けて辨明し置かん美麗と宏壯との差別は文字のまゝにても稍々判定するを得へく美麗とは「うつくしき」「やさしき」等の意味を有し宏壯は「りゞば」「すばらしき」等の意味を有するなり春和景明、波瀾不驚、上下天光、一碧万頃、沙鷗翔集、錦鱗游泳、岸芷汀蘭、郁々青々、而或長烟一空、皓月千里、浮光耀金、靜影沉璧、漁歌互答、とあるは美麗の光景にして淫雨霏々、連月不開、陰風怒號、濁浪排空、日星隱曜、山岳潛形、商旅不行、檣傾楫摧、薄暮冥々、虎嘯猿啼、とあるは宏壯の情狀なり前の景は實に心曠く神怡ひ寵辱皆忘ると云はるゝが如く私利私慾を離れて充分に滿足するを得へく誰れ彼れの區別なく洋々として樂み理を知ると知らざるに論なく熙々として喜ふを得るなるへし之に反して後の狀は一と

して苦痛を生せざるなし淫雨霏々、連月不開は樂からす陰風怒號、濁浪排空も樂からず日星隱曜、山岳潛形も樂からず商旅不行、檣傾楫摧も樂からず薄暮冥々、虎嘯猿啼も樂からず啻に樂からざるのみならず誠に艱苦に際するの思あるが而も之を讀て何となく面白みを生しいつか斯樣の境遇に會したく觀念するは不思議に非ずや好みて讀むばかりで無く實際旅裝を調へて深山幽谷を跋渉するとも人の進て爲さんと欲する所なりとは亦た不思議に非ずや是れ宏壯たるには苦痛に打ち勝ちて快樂を感し天然に勢力ありとしながら自ら之に優り得ると思ふ樣にすへしとある所以なり艱難に堪へうれば快樂を生し艱難に在りながら艱難とするを要せさるも大に快樂を生す然れとも此の如きは美麗の光景に於ける如くに何人も容易に樂む能はさるかに見ゆ美麗は老幼男女共に樂むべくも風雨を犯す若き宏壯の狀は老人の欲せざる所兒童の好まざる所女子の忌む所にして眞に愉快に思ふ人强壯の男子或は剛氣の婦人に過きざるなり而も此樂みは實に存在するなり言はゞ美麗も是非とも滿足せざる能はずとし宏壯も必ず首肯して歎服せさる能はずとするとも宏壯の方は輙く爲し得ざるも

のと知るへし宏壯は絶大にして万物に超過すとあるが充分に然りうる者は事實上存在せざる譯なるも無限といふ觀念を適應して然るやうに爲すと難からす海洋は眺むるも圓の如く限あり蒼天を仰くも穹の如く限あり視線の及ぶ所ろ限なしとするも感解する所は限なきに非す其限ある區域に於て無限を認むるこそ宏壯の妙と云ふへけれ且つ宏壯には形狀の整然たるを望まずして紛亂錯雜し居るも顧みさるとありとす敏辨法に照さんに美麗といひ宏壯といふ趣味は主觀的なから普通に適應し得るを以て自ら二通の背反せる意見を呈出し來るやうに爲るなり(七四頁以下合理世界學を參考すへし)乃ち一は趣味に就て爭論なしとし一は趣味に就て爭論ありとす曰はく趣味の斷定は概念に依從す可らずと曰はく趣味の斷定は概念に依從す可しと孰を取りて宜しきや實は斯く背反するは表面に止まるとにして精密に考察すれば充分に協合し能ふなり趣味は決して確定せる概念に依從せざれば精細に顯示するに苦むと勿論なりと雖も確定せざるにせよ概念に依從し居るとは疑ふべからざる所なり背反無用に屬すへし(灰色を白とするは不可なれども黑とするも亦不可なるに非すや)

然るに別に疑問の存在するあり事物が斷定の能力に順應して美麗と顯はれ宏壯と現はるゝは事物固有の作用なるか將た吾人自からの働作なるか實躰論者は事物固有の作用なりとし美麗なる者ありて美麗を感し宏壯なる者ありて宏壯を感すと爲す而して觀念論者は吾人自らの働作なりとし單に機械的なる雜駁の形式に接觸して美麗宏壯を認め得ると爲す然らば奈何にすべきかと云ふに盡く倫理の表象を爲すに若くなきなり即ち趣味の原理(いはゆる美術論)も宗教と同しく倫理を以て基礎とせざる可からず(宗教の事は八九頁以下に在り)柳宗元鈷鉧潭西小丘に遊ひ而して枕席して臥せば清冷の狀は目と謀り瀯々の聲は耳と謀り悠然として虛なる者は神と謀り淵然として靜なる者は心と謀ると云へるは殆ど實躰論觀念論の上に出て倫理の表象を認知するの赴あり扨て結局の能力は何樣なるか分解法に依れば事物順應の種類を判定するを要するが必竟するに事物が預匠に和合するは外部の關係か內部の關係か孰れかの一に基つくものとす外部の關係とは此物は彼物に對して有益也と纔に相關の和合を指すのみ海岸に平沙の連亘するは松の繁茂するに必用なれど松あるが爲め平

沙ありと定むべからす雜草や米麥や菓實は動物の生存に欠くべからざれど動物あるが故ゑに此等の品々ありと判すへからす万有自然の機制と考ふるも少しの不都合なきに似たり有機物は全く之に反す人躰の頭あり手あり足あるは必然の情狀にて結成し居る者にして奈何樣に臆測するも偶然に集合し來りたりと爲す能はさるなり是れ全く究竟原因即ち結局に應するものに非すして何そや然り而して敏辨法は此の兩關係の背反し居るを幷合するを旨とす乃ち一方に於ては萬物唯だ機械的の法則に隨ふのみと云ひ又た一方に於ては物により機械的のみならずして整齊せる預匠を要するとありと云ふ時は客觀上の論に在ては背反するを如何とも爲すべからざれど事理研究の爲めとして主觀上の考へに移れば容易に背反の箇條を徹去するを得るなり古人は何事も預匠ある樣に說きしが今は斯く獨斷するに由なきも理法整合のため万端の事件に預匠ある如くに假定し置くを望むべし宇宙果して預匠なきかは敢て問ふ所にあらずして注意すべきは預匠ありとすれば個々別々の各部分を一躰に團結しをる者と看做し得るの便利ある事是なり乾坤は茫々として廣濶なり一部づゝ觀察しゆけば漠として路を失ふに

至らんか若し直覺的の悟性ありて世界全躰を看破し得ば已むべきなれど苟も通常の悟性にて漸次に概括するの有樣ある上は考究するとき豫め預匠を設けずして可ならんや

フヒテ

ヨハン、ゴツトリーブ、フヒテは幼にしてシレシヤの貴族の誘導する所と爲り僧侶に從屬し更にシユルプホテルの學會に入れり十八歳の頃エーナ大學にて神學を修め頗ぶるスピノザーの哲學を好みしが後訓導となりて諸方に敎へあるきライプチヒにてカントの哲學を見るに及で大に其說に服せり乃ちカントに面會せんを爲め早急に一書を著はしたりしに世人讀て以てカント自身の著作となせりと云ふ宗門上の事より一旦放逐せられたるとさへありしが後幾ばくもなく赦されて伯林に歸り敎授の職を奉せり時に那翁歐洲を蹂躪し普魯西も亦其有に帰すフヒテ乃ち奪て那翁に反對し主として之を退ひ退けんとの說を唱へ頗る勢力を得しかども終に普國の獨立を見るに及ばずして逝けり蓋し其妻負傷の兵士を看護し熱病に感ぜしより傳染して遂に起きさるに至れるなり（千七百六十二年に生れ千

八百十五年に沒す）

フヰヒテはデカートと其性質は全く相異なるも其說は妙に相似たり其說カントに本づくも其結果は大に異れりカントは物質の本躰は吾人の意識外に在り而して吾人の知り得べきものは獨り意識內のものゝみに止まり意識外のものは全く知る可からずとの說を執れるがフヰヒテは其物質の本躰をも意識の範圍內に皈し以て唯心論を完成せり其哲學の原理を構成するや曾てデカートが何事も疑て之を除くを得べし獨り疑のみ除くべからずとて我あるとを確定せしが如く先づ第一に全然獨立にして毫も他に依賴せず苟も之を口に言ひ顯せば一の證明を須たずして何人も復た爭ふ可からざるほどのものを定立せざるべからずとし以爲らく今例へば「甲は甲なり」と云ふが如き命題を提出せば何人も之を爭ふ能はざるべし但し斯の如きは形式に於ては正當にして復た爭ふべからざるも其躰質は猶未だ爭ふべからざるほどのものと謂ふべからず例へば「鐵は金屬なり」と云ふが如き鐵と金屬との關係のみは正しきも鐵の躰質金屬の躰質に至ては猶未だ明晰ならず又「甲は甲なり」と云ふ命題は「甲があるならば甲なり」といふ意味にも考へ得らるべ

けれは旣に「あるならは」といふ事情を附加するを要するを以て決して獨立のものといふべからず故に今「甲は甲なり」の命題に代るに「自己は自己なり」といふ命題を以てす蓋し自己といふときは已に自己の本質を證明して此上更に說明を要すべきなく世界には唯〻自己のみ爭ふべからざるものにして事を疑ふにも事を知るにも常に其基礎とならさるとなし

次に「甲は甲なり」といふときは直接推演法によりて「甲は非甲にあらず」といふとの出來るが如く「自己は自己なり」といへば直ちに「自己は非自己にあらず」といふ命題出來ざるを得ず自己は上にも云へる如く復た爭ふべからざるものなるが之に對する非自己とは即ち世界のとにして元來は自己のみなるも已に自己ありと定むるときは同時に非自己なるもの出來るなり詳言せば自己は元より無限のものなれども其の自己ありと定むると同時に非自己即ち世界なるもの出來ざるを得ずされば其の自己は自己を限定するが爲めに造出せるものにして畢竟非自己は即ち自己なりと云ふを得べく世界はたゞ自己に附屬して存するものとなすべきなり

以上は純理批判の大畧なるが、今其實踐哲學の要領を擧れば既に純理批判に於て自己を確むる爲め非自己なるものを造出し自己に性質を附するため之に反對せる種々のものを造出せしと同じく今自己なる人間を明に人間と顯はす爲めには自己に反對せる衆多の人間を造出せざるべからず是世間に衆多の人間ある所以にして總て他人は皆な自己を明にせん爲め自己より造り出せるものなりされば人々互に他人を造り出す譯になりて隨て互に相制限せざるを得ざるに至る是に於て衆人の間に行はるゝ所の正義或は公義等の如き自然法生ず蓋し法とは即ち權利のことにして(獨逸にては權利と法律と同一字を用ふ)先づ原本の法たるべきものは人々自己を確むる爲めの自己精神の自由及び財產の權利是なりさて人々各〻斯の如く權利ありとせば遂に相衡突紛爭するに至り隨て相制限するの必要を生ず是に於て强壓法起る强壓法とは人々相爭ふ間に顯はすべからざるものは無暗に打消すの法にして由て以て社會を團結せしむるものたり政治の法は實に此に發するものとす夫れ既に團結あれば此に契約起る已に人々契約に依て事を爲さんとするに至れば即ち社會全躰の意望なるもの生ず此全躰の意望を名けて立法

といふ而して此立法の實地に執行せらるゝに至れば乃ち之を行政といふ然るに其行政となりて世に顯はるゝの前自己の意識內に於て既已に豫期せられたる一定の順序あり而して彼の非自己なる政治上の運動が能く此の自己豫定の順序に應合するときは之を善良なる政治といひ又政治の進步ともいふなり之を要するに自己なるものを確むる爲めに幾多の他人を造り出せしに外ならざるなり

以上は表面上より論じ來れるものなるが今や裏面なる道德に就て論ずるも亦自己の一點に歸するを見る肉躰なるものは元來自己を顯はす爲めに造出せる非自己の一なるが吾人動もすれば此肉躰に重を置くの傾向あり蓋し肉躰は自己を顯はす所以のものなれば之を愛護するは固より可なりと雖とも兎に角自己は主にして非自己なる肉躰は之が從たらざるべからず道德とは自己を以て非自己を制するの謂なり良心といひ良能といふも畢竟自己が造出せる諸般の障碍物に打勝ち又打勝ちて竟に能く自己精神の全然自由なることを顯彰するの働きに外ならざるなり夫れ斯の如くにして自己が万般の非自己に打勝ちつゝ順序よく進み行き竟に全く自由なる精神を證得するに至れば即ち是れ上帝の域に到達せるものに

して是に至て宇宙復た一の礙滯する所なきなり是故に道德を行ふの要は上帝を知るに在り己に能く上帝を知らば自己即是上帝なり而して眞成なる宗教の本務は實に斯の道德を勵むるに在りとす世間の宗教動もすれば自己精神の外に向て無限全能の上帝を立てんと欲す抑も亦惑へり

右はフヰヒテ哲學の大要なるが今其論法をスピノザに比すればスピノザは常に兩事物の相反對せる性質を除去し又除去して竟に泰一の上帝に帰着せり然るにフヰヒテは其裏面より看來り常に相反對せる性質を立てゝ以て互に相發揮せしめ因て一を以て他を制し斯くして竟に上帝の域に到達す是二子論法の相異なる要點なり而してスピノザの行狀が能く其哲理に合同したる如くフヰヒテの行狀も能く其哲理に合同するを得たりフヰヒテは實に傑出の人物なり言ふ所爲す所決して偶然に非ず自己の意志は千辛萬苦を經て毫も屈撓する無く辛を嘗めて意を固く苦に際して愈々強く希有の障碍物に打勝たんとして死して而て後ち已むに至れり全國の人民爲に奮激し敵國の暴威爲に挫折せり偉なりと謂はさるへけんや

シェーリング

シェーリングは始めフヰヒテに從ひて後ち一家を成せり其聲望初年に盛にして晩年に衰ふ嘗てチユビンゲン大學に在て二大論文を草し大に才名を轟しゝが其時年齒猶未だ二十に滿たざりしといふ是より名聲愈〻揚りエーナ大學に住きフヰヒテに代り自家の新說を交へて授業したる事ありしも三十歲の頃迄には既に殆ど滿腹の持說を傾瀉し盡せしものゝ如く爾後凡三十五年間は復た一の著述をもなさゝりき而してミユニヒエルランゲン等に名譽の職を奉せしに拘らず其名の漸く聞ゆるなきに至りしは蓋し當時ヘイゲルの雷名漸く學問世界を震動し爲めに世人の耳目を奪はれたるにも由るなるべしヘイゲル死するの後に至り稍其聲望を恢復せりと云ふ是猶太陽始めて沒して月星再たび光あるを見るがごとき歟（千七百七十五年一月廿七日に生れ千八百五十四年八月廿日に沒せり）

初めフヰヒテの流を亞ぎ其學說を繼承せんとせしが後漸く其非を知り別に一派を立てたり而も晩年に至るまで其說を變改すると凡そ五次の多きに至りたれば之を一系に括るとやゝ難しと雖も今其概畧を示さんにフヰヒテは自己を以て哲學の起點とし宇宙を擧て一切其胸中に在りとなして以て絕對無二の本躰を定めしが

シェーリングは之に反して以爲らく自己は非自己ありて始めて知るとを得るものなるときは是れ相對にして絶對にあらず相對の者焉んぞ他を造るを得んや且つ自己と万物とは終に内外の別なき能はず然らば則ち自己をして自己たらしめ万物をして万物たらしむる所以の本源別に此二者に先ちて存せざるべからず何ぞや一種絶對無限の靈躰是なり其狀冥然として復た名くべからずと雖も其力實に能く無數の相反對せる者を統一して之を調諧融和せしむるに足るものなり夫れ絶對は得て名くべからず名く可きは絶對にあらず名くべからずとて決して虚無なりと謂ふを得ず譬へば猶磁石の陰陽兩極を具るも其中央は之を陰とも陽とも名く可らざるが加し陰陽の名なしとて中央豈獨り虚無ならんや而して斯の靈躰の一旦居然として表發するに及では則ち自己となり万物となりて現ずるなりと斯の如くにしてシェーリングは物心の上に適かに此二者に勝る所の靈妙なる原躰を立て一に之を至理と呼び又之を上帝とも稱せり而して其の本來自躰に有する所の力を以て次第に開發して物心兩界を生じ各界又開きて遂に万象を生ずるものとなし之を名けて至理の進化と曰ひ又之を上帝の所作と稱するも敢て不可な

るとなしとせり物心開發の模樣を云はゞ物界に在ては更に二樣の相反對せる力即ち親和力と抵排力とに現はれ一は万物をして一躰たらしめんと欲し一は各物をして万殊ならしめんと欲す心界も亦之と均しく更に被制限力(差別)と無制限力(無差別)との二樣に現はれ一は世界を以て全然自己の外に置かんと欲し一は自己をして渾然世界と同躰たらしめんと欲す而して外形より觀れば物界と心界とは本より相反すと雖も而も實狀に於て劃然相異なるに非ずして心界中にも自から物界の性質を含み物界中にも亦自から心界の性質を帶びざるを得ず心界物界一にして二なり二にして一なり心界は觀視すへからざる物界にして物界は觀視すへき心界なり而して又各界均しく相反對せる二力を併有するは恰も磁石の一躰大に兩極に分るゝも其分子の各個は又一々自から其兩極を具るが如し是故に心界中にても被制限力は無制限力に比すれば物界の性質を帶ると多く物界中にても親和力は抵排力よりも一層心界に近きものと謂ふべし

右は進化の大躰の趣なるが今少しく細やかに開發の順序を陳ぶれば客觀(物界)に於ては第一に重力、惰性、物躰の三樣に現はれ第二に光、運動、勢力の三態を開き第三

に生命、有機、動物の三相を成す而して重力と光とは集散を以て相反對し(重力は攝入を主とし光は散出を主とす)惰性と運動とは常變を以て相反對し(惰性は慣習の原因にして運動は變化の原因なり物躰と勢力とは隱顯を以て相反對す(物躰は形ありて外面に顯はれ勢力は形なくして內部に行はる)且つ第一は幾んど全く客觀に屬し第二は稍〻主觀に近く第三は主觀の性質を帶ると最も多しとす又主觀(心界)に於ては第一に眞實、理學、普通觀念の三となり而も眞實と理學とは普通觀念より生ずとなし第二に善良、宗教、感情の三となり而も善良と宗教とは感情より起るとなし第三に美妙、技藝、自由活動の結果の三となり而も美妙と技藝とは自由活動の結果に出づとなす而て第一は最も客觀に近く第二は稍〻遠く第三は最も遠しとす之を圖に表はせば左の如し

- 客觀(物界)
  - 第一
    - 重力
    - 惰性
    - 物躰
  - 第二
    - 光
    - 運動
    - 勢力
- 主觀(心界)
  - 第一
    - 眞實
    - 理學
    - 普通觀念
  - 第二
    - 善良
    - 宗教
    - 感情
  - 第三
    - 美妙
    - 技藝
    - 自由活動
- 原躰
  - 第三
    - 生命
    - 有機
    - 動物

之を要するに物界心界大に相反すれども亦自から一致する所あり而して各界中にも亦互に相容れざる性質を幷存しなから而も能く其間に調和を保つ所以の者は復然兩界に超絶せる至理の存するありて以て兩者を統括するに由らずんばあらずとし因て一種不可思議の原躰を立つ是れシェーリングの大にフヰヒテに異なる所なり(蓋しフヰヒテはデカルトに類しシェーリングはスピノザに似たり而してシェーリングはフヰヒテに對しては心界よりも寧ろ物界の方を重く說き做し乃ち非自己

よりして自己を生するやうに立論せんと企てたれども竟に然る能はざりき）

シェーリング初年には大に文藝を崇尚し美術を以て學者の當に修むへき最高尚の一科なりとなせしか其頃は所謂絶對の原體を以て寂然無爲の理體なりとせり然るに晩年に至て大に道德と宗教とを重んし更に之を文藝の上に置て以て人事の極則と爲すに及ひ乃ち翻然其說を改めて謂ふ万物の本原は最も活潑有爲なる純然自由の一大意志なり而して道學の要は人々一己の意欲を去て務めて彼の世界の精神たる大意志中に融合するを求むる必在りと要するに其晩年の學は頗る神人感合說に傾けり

シェーリング嘗て以爲らく本原の靈躰は甚だ知り易からずと雖ども吾人は專ら一念を凝して工夫純熟するに至れば一旦四面玲瓏の心地に住するを得是に於て恍惚の際微く之を窺ふを得べしと此四面玲瓏の心地を名けて智慧の頓悟と曰へり又曰く彼の絶對の妙境に在ては事物有無の分本より未だ知るべからず其の一旦開發して自己と非自己とに現ずるに及で始めて有無の相を認むへしとヘイゲルは此の所謂絶對を評して暗夜の烏の如しと曰へり蓋し亦妙喩と謂ふ可し

ヘイゲル

ゲチルグ、ウ井ルヘルム、フリドリヒ、ヘイゲルハ千七百七十年八月廿七日スチユットガルトに生まる十八歳の時チュビンゲンの大學に入りシェーリングと倶に業を修めしが未だ人の注目する所とならず當時シェーリング獨り才名を擅にせり大學を辭するの後暫らくシェーリングを助けて共に哲學評論雜誌の編輯に從事せしも猶之に雁行するを免れず其後屢〻學校の教官たらんとせしが毎に戰亂の爲めに其椅子煖なるに暇あらずエーナ大學の教授となりしも亦長く其職に安ずる能はざりしかども該地に大戰爭起り砲聲未だ歇まざる時精神現象學と題する一大書を完結するを得たり而も猶未だ世に知らるゝに至らず後ベンベルフに徙り凡そ二年間衣食の爲めに政事上の雜誌に關して筆を執りしが千八百〇八年の秋に至りてヌルンベルフ大學の講師となり是より幾ばくもなくして名聲漸く顯はる尋でハイデルベルフ大學の教授となりて哲學叢書を出版し更に伯林大學の授業を擔任するに及で大に其懷抱を伸へ盛に著述に從事して哲學を大成し有力の學派を興起せり是に於てヘイゲルの名忽ち天下に震ひ聲望一世を曠うして始ど復た人のシェー

リングを稱するなきに至れり千八百三十一年十一月十四日不幸「コレラ」病に罹て沒す遺骸はヲヰヒテの墓隣に葬ると云ふ

シェーリングは精神と世界との上に別に一種の原躰を立て是を絶對無限のものとなせしがヘイゲル之を非として謂く此の如きは是知識の外に知識ありと言ふ者にして猶知覺に上らざる物を知覺せりといふに異ならず夫れ吾人の知識は本と相對の關係より生ずるものなるが故に苟も相對の境を離るゝときは復た一物をも知る可らず而るに彼れ且つ知る可らざるの處に就て敢て所謂絶對なる者を求めんと欲す惑へりと謂ふべし抑も絶對は相對を離れて存すべきに非ずして相對本より絶對の中に寓し無限は有限を離れて知る可きに非ずして有限本より無限の中に存す兩者未だ始めより二致あらず是故に絶對を知らんと欲せば須らく之を相對の境に求むべく無限を窺はんと欲せば宜しく之を有限の處に究むべしと是其學のシェーリングに異なる要點なり

ヘイゲル以爲らく純有と純無とは俱に吾人の知る能はざる所にして吾人は唯だ有無兩間の關係を知るに過きず蓋し世界は猶關係の網の如し關係微せば吾人焉

んぞ世界あるを知らんや既に世界を以て關係に過ぎずと爲す則ち所謂關係なる者は果して何に由てか來る曰く思想是のみ蓋し關係とは思想に起れる彼此異同の相の謂にして彼此異同の相は則ち思想が自から造出せし所なり然れども思想をして明かに思想たらしむる所以のものは亦夫の彼此異同の相に由らずんばあらず然らば即ち所謂關係と思想とは結局同一躰のものと爲さゞるべからずして思想が毫も他に依らずして關係を造り出す處より看れば思想は絶對自由のものに相違なきも其の關係あるを待て始めて思想たるを得るの點より看れば思想は關係と相待て乃ち相對の者たらざるを得ずされば絶對も相對に對して亦相對たり此れ彼れの原因たらば彼れ亦此れの原因たるべく彼れ此れの結果たらば此れ亦彼れの結果たるべし是に由て之を推せば思想の關係に於ける絶對の相對に於ける本より同一躰たらざるべからざるや明けし其れ已に同一躰なりとせば關係の全躰は即ち思想の全躰なりと謂ふを得べし抑も前に世界は關係より成ると言ひしが是に至て轉じて「世界は思想なり」と謂ふも決して不都合なかるべし夫れ已に世界の思想なるを知らば又思想の法則の万有の法則なるを知らん然らば則ち

思想は絶對なり無限なり自由なり獨立なり之を至理の本躰と謂ふ固より可なり之を上帝と稱するも豈不可と爲さんやされば思想開發の第一歩は即ち世界の創造にして世界の進化は即ち思想の發達なり而も此に第一歩と云へるは第一歩の前は寂然一物なきの謂に非ず抑も思想の躰たる極めて活潑々地にして進動已むなく常に轉輾關係を造出して以て思想自己をして一歩より明瞭に現せしむ是を思想の進化といふ思想進化の次第を言はば之を發するに理法を以てし之に次ぐに万有を以てし之を終るに精神を以てし而して精神の作用復た理法を追隨し始む是を思想の循環といふされば思想進化の全程は即ち關係の一大環にして所謂開發の第一歩とは則ち此の大環の一節たるに過ぎず譬へば甲は乙の原因にして乙は丙の原因なるも丙丁戊己相遞して遂に癸に至れば癸は亦甲の原因となり甲は亦癸の結果となるか如し始未だ必しも始ならず終未だ必しも終ならず終始は相對の關係にして之を一躰と觀るときは即ち無始無終なり是れ前に思想と關係とは結局同一躰たらざるべからすと言ひし所以なり

之を要するにヘイゲルの哲學は先つ宇宙の全躰を擧げて悉く之を唯一の思想に

歸し而して斯の廣大無限の思想が如何にして開發進歩するかを思想必然の次序に從て歴叙講究するに在り其全系を大別して三部となす第一理法學第二万有哲學第三精神哲學是なり

此に理法學と云ふは論理學の義なれども通常所謂論理學とは大に其方法を殊にするを以て姑らく別名を用ふるのみ通常の論理學は兩斷法を用ひ今云ふ理法學は三斷法を用ふ三斷法はカントに始まりフィヒテ、シェーリング相傳へてヘイゲルに至て始めて大成せりヘイゲル以爲らく通常所謂論理學は相反せる二義の兩立を許さゞるを以て大旨と爲すものにして即ち一物同時に有りて且つ無きことを得ずといふが如し是單に形式のみを取扱ふを主として實迹と同一躰を爲すものに非ず若し夫れ具成の論法は思想の全躰より開説して正に世界進化の次序と合し衆反對の旨義を幷容して能く之を調諧總合して遂に實迹と一躰を爲す者なり即ち實際活潑の論法にして自在隨生の範疇たり是故に万般の實迹一も此の範疇の中に入らざるなくして而も之が束縛を受くるとなしと今略〻三斷法の論式を示さば玆に甲なる本義起るときは必ず之に隨て其反對の義な

る非甲起るものとし甲、非甲已に對立するときは此兩旨義本より相反すれども而も亦必ず相合すべきの理あるを以て乃ち之を總合して乙なる旨義起るものとす而して甲を正斷と云ひ非甲を反斷と云ひ乙を合斷といふ此三斷を一節族とす一節族にして終る者を單式と稱し節族の數多相連繫する者を複式と稱す其圖左の如し

又節族に大小ありて大節族の中に更に小節族を開くもの之を錯式と稱す即ち甲、非甲、乙の三大斷の各斷の下に更に又三小斷形をなす者是なり此等の諸式相合して哲學の躰系を成すものは即ち所謂思想必然の次序に出づるなりヘイゲルの哲學は終始皆此論法より成るものとす

理法學は思想自躰の進化を論じ万有哲學は物界の進化を叙し精神哲學は心界の進化を說く者なり請ふ先づ理法學より解說せむ

第一　理法學(存在、本素、總念)

(存在)宇宙万象の本原は即ち思想にして思想自躰の進化を論ずる者は即ち理法學なるが先づ思想開發の第一歩に現じ來る者を純有の旨義となす純有とは未だ他に毫も關係を生せざる純一絶對の存在といふことにして夫のスピノザが所謂一切の關係を脫離せる泰一の本躰なる者と殆ど相同じ但だ彼は之を消極的に論入し去り此は之を積極的に說出し來るの相異あるのみ然るに純有なる者は元來吾人の得て理解すべき所に非ず何ぞや蓋し吾人の光明を知るは闇黑あるに由てなり乾坤唯、光明のみならば焉ぞ光明の光明たるを知らんや今唯だ有のみとせば何を以てか無と擇ばん若し夫れ純無の旨義も亦然り天地唯、一黑ならば黑の黑たる本より知る可からず且既に無なりといふ是れ已に無なる者あるなり亦何ぞ有と異ならんされば純有と純無とは俱に邈乎たる符號的の想念にして本より實に在る者に非ず凡そ思想の法先づ一旨義を提出すれば其中に必ず之に反對せる旨義をも含有する者にして理法學に在て前者を本義(又は正斷)といひ後者を反對の義(又は反斷)といふ已に兩義相對立するときは即ち又相合して更に一旨義を生ず之を

總合の義(又は合斷)といふ而して總合の義は實に前の兩義より一層明晰の域に進み一層實迹に近づきたる者とすされば今有と言ふときは隨て無なる意味をも生ぜざるを得ず若し無なければ有もなく有なければ無も亦あるとなし有無相待て始めて有の有たり無の無たるを知るを得べし是に知る夫の純有なる旨義は思想猶未だ剖判せず方に渾沌たるの域に於て發する者なるを語を換へて之を言はゞ純有なる者は其實は現に有る者に非ずして則ち將に有らんとする者なり是故に純有の旨義一たび發すれば隨て純無の旨義起る兩義已に對立するときは互に相容れざるが如きも而も能く之を調諧し乃ち互に相發揮して有をして判然有たらしめ無をして判然無たらしむる者あり是に於て乎實在の旨義生ず譬へば猶純然の光明一たび闇黒を加へて始めて色彩の觀念を發揮するが如し是所謂總合の義なり抑も無よりして有に之く者之を生と謂ひ有よりして無に的する者之を滅と謂ひ有無の相往來する是を轉化と謂ふ轉化は即ち實在の由て生ずる所にして生滅は即ち實在の生滅なり

實在とは一方より觀れば即ち質といふことにして又一方より觀れば自存(又は自在)

といふことなり自在とは「是の物は即ち是の物にして他の物には非ず」と確說するの義にして例へば是れ馬なりと言はゞ即ち是れ馬に非ざる者には非ずと斷定し以て其物と他の物とを劃然區別するの意なり已に自他の區別を明かにす是に於て性質なる者を生ず

性質に反對して起る者を分量となす蓋し質の確定するは自在の旨義に由るものにして自存といへば即ち是れ一に限れるなり乃ち斯に一なる旨義を發す已に一といへば隨て多なる旨義を生ず夫れ一と多とは本より相反すれども而も多は是れ一の聚合より成る者にして一といふも亦多中の一部たるを表する者なれば畢竟一即多にして多即一なり是に於て數なるものあり乃ち斯に分量の旨義起る分量は又二樣に別る分別と連續と是なり且つ此二者互に相反すと雖も而も竟に相一致せすんばあらず何となれば凡そ分別せる者を量らんとせば必ず之を連續して算せさる可からす而して連續せる者を測らんとせば亦必す之を分別して算せざる可からさるの理あり例へば今、人頭を數へんにもと是れ個々分別的の物なれども指を屈するに當ては都て之を一連視して一人二人三人と數へ行かさるを得

ず又一竿の長さを度らんにはもと是れ一條連續的の者なれとも尺度を繰るに當ては即ち之を尺寸分厘に分別せざるを得さればなり夫れ分別と連續とは俱に之を外延の量と謂ふ即ち長短多寡等單に數量上に就て幾何幾個と數へ得る者にして彼の性質の旨義とは全く相關せざる者とす然るに已に外延の量あるときは即ち之が反對たる內包の量起らざるを得ず內包の量とは即ち度の謂なり夫れ是に至て分量の旨義は前には相關せざりし性質の旨義と方さに相合一す蓋し夫の色彩の濃淡、熱の高下、物質の輕重等の如きは皆度に屬し而して之を計るは數に依ると雖も而も彼の外延の量の如く尺度を以て數へ得へきに非ずして必ず性質と相關係せざるを得ざればなり

已に分量、性質と相合するときは則ち斯に比例の旨義生ず比例とは分量と性質との間に於ける一定の割合といふことにして即ち性質を變ずれば分量も隨て變じ分量を變ずれば性質亦隨て變じ二者の間常に一定の關係あり例へば若干の水を若干の度に熱すれば性質變じて氣躰となり容量亦若干に增加すと云ふが如き即ち是なり比例に至りて斯に存在の旨義の一段を了り乃ち本素の旨義に移るものとす

〔本素〕夫れ存在の旨義一たび開發するや遂に量質の二義を現し二義又合して比例を生ずるに至れば斯に本素の旨義となる抑も上に云へるが如く比例とは度の割合を謂ふものにして例へば水の溫度の增減によりて或は氷となり或は蒸氣となるが如きは皆度の變化即ち比例に關するとなるが而も其水氷蒸氣の三態は其形こそ殊なれ其本は同一物なりと考へざるを得ず斯く同一物なりと考へらるゝ所以の者即ち是れ本素なり更に之を言はゝ本素なる者は夫の性質と分量とが相合一する所の處に存し即ち一方より觀れば比例となり一方より觀れば本素と現ずるなり

抑も本素は夫の存在に反對して起る所の旨義にして彼に在ては尙純一渾沌未だ彼此の二相を呈せざりしも本素に至ては已に明かに彼此の限界を生ぜしを以て何事も皆二樣に見えざるとなしさりとて本素は存在と別躰なるに非ず畢竟是れ存在が自己を明瞭にせん爲め自己に反射せしめたる者に外ならず譬へば猶顏色を鏡面に映じ其反射に依て始めて自家の顏色を明知するがごとし夫の存在の塲

合にては尙判然對立する者なきが故に未だ自己の躰相如何を知るに及ばずと雖とも本素に至て始めて之を確知するを得るなり是故に本素開發の有樣は存在の開發と各〻其趣を同うするも存在に於ては單に「有」と「無」との二義に止まり本素に在ては積極的と消極的の關係を以て現出し「なり」と「に非ず」との二義即ち肯定的と否定的とを現出するの差あり故に本素には出行と歸來との二用を兼ぬるものとして可なり本素も亦三樣に開發す曰く本素自躰、曰く本素と表象、曰く現實是なり蓋し本素の初めて現はるゝや自己が直接に自己に躰照するの場合にして恰も鏡に對して自から其顏色を視るが如し斯く自己が自己に對照して生する所の關係を同一といふ是れ自己は自己なりといふことにして即ち「甲は甲なり」の肯定式に當れり然るに自己が自己に同一なりといふときは己に是れ幾分の差異を認めたるものなり譬へば猶鏡中自己の影と鏡外の自己とは自ら別物たるがごとし若し差異なければ同一といふとも亦あるとなし故に已に同一といふと起れば直に之に反對せる差異の旨義伴生せざるを得ず即ち「甲は非甲に非ず」の否定式の由て出づる所なり然れども同一と差異とは亦基本に由て合一せらる例へば白の旨義と非白

の旨義とは互に相容れざるものなれども色彩なる旨義に於ては相一致するが如し其互に相容れずして而も竟に一たる所以の者是れ基本なり然るに基本已に立つときは新に又後件なる者隨て起らざるを得ず蓋し後件を出す能はざる者は之を基本と謂ふべからず基本なければ亦後件あるとなし故に基本と後件とは前因後果の看あれども而も結局同一躰となすべし而して此の基本後件を考ふる時は是れ已に「本素と表象」の題項に移り居るものなり

凡そ「現に然る者」は必ず其前に「將に然らんとする者」あらざる可からず其將に然らんとする者は是所謂基本にして即ち之を本素と爲す本素の發表せる所は則ち之を表象と謂ひ表象は則ち本素の後件たり更に之を言はゞ本素は常々將に發表せんとする者にして表象は其の已に發表せる者の名なりされば二者の關係は即ち所謂基本と後件の關係に外ならずして結局同一躰たると勿論なり本素の發表して表象を成すに積極消極二樣の旨義あり即ち積極的には物質となりて現はれ消極的には形躰となりて現はるゝ者とす然にる物質と形躰とは本より相異なるものなれども形躰を離れては物質なく物質を離れては形躰なく其互に相待ちて存

する所より觀れば竟に亦別躰となすを得ず乃ち此二者の合一せる所をば成立と名く而して夫の本素の斯く成立し居る所を稱して事物と謂ふ

次に又本素が表象とならずして直ちに其自身を發顯せんとする所よりして勢力と運用の二樣に現ず蓋し勢力は運用と異なれども勢力あるとを徵するは一に運用あるに依り運用は一に勢力の然らしむる所なれば其關係は猶物質と形躰との關係の如きのみ且つ勢力といひ運用といふも均しく本素より出でたるものなれば其實表象と別異なるに非ず即ち通常物質と稱する者をも一方よりは之を勢力に飯するを得るを以て知るべし唯だ其區別は物質を物質と現はし形躰を形躰と現はす所以の力が則ち所謂勢力なりといふに在るのみ之を要するに單に本素が發表せる上に就て觀るときは是れ表象(即ち物質、形躰)にして本素が將さに自から發現せんとする所の有樣より觀れば即是れ勢力なり而して勢力運用の現るゝときは斯に內外の分起る蓋し夫の勢力の將に出てんとしつゝある所を指して內部と謂ひ其の已に現出せる所を指して外部と謂ふ而して運用とは外部に現はれたる勢力の謂に外ならず是に至て內外の別始めて明かなり夫れ此の如く內外は本

より相反せり然れとも若し外なきときは內なく內なきときは外あるを得ざるより觀れは二者亦同一躰なりと謂はざるへからず乃ち內外の相合一せる所是を現實となす

現實と云へば本素と表象とを合し內部と外部とを一にしたるものにして本素の最も明瞭確實に現はれたる者なり而して此現實なる場合をば直ちに其物として主指するときは即ち是を本躰と稱す已に本躰といへば隨て之に對する屬性なる者起らざるを得ず而して本躰屬性の關係は即ち原因結果として現はる已に原因結果となりし上は原因も即結果となり結果も即原因となる蓋し通常原因と稱するは多く働き掛けの事情を指し結果は常に受働の地に在りとなせとも其實は所謂結果も亦常に原因に向て働くを見る例へは今手を以て机を推さんに手を動かすは原因にして机の動くは結果なりとせんか手は本より机に向て働けとも机も亦手に向て抵抗の働を起すを以て双方共に發動的にして同時に又双方共に受働的なりと謂はざるべからず且つ手を机に向ひて動かすも二者の際一毫にても隙ある間は曾て結果を起さゝるを以て未だ之を原因と稱すべからず然るに其の一

旦机に接觸するに及べは則ち單に二者同時に運動しつゝあるを見るのみ其れ是を指して原因となさんか將た結果となさんか畢竟此の同一事情を目して一方より之を原因といひ一方より之を結果といふに外ならざるべし是に由て之を觀れは原因と結果とは始より同一躰なると明かなり已に因果を同一躰として觀るときは則ち之を相關と謂ふ相關に至れは是れ本素の一段を結びたるものにして又已に總念の旨義に移れるものとす

(總念)既に本素の條下に於て二樣の相反對せる旨義即ち本素と本素及ひ表象とが終に合一して現實となるとを說けるが此現實の場合は即ち是總念なり凡そ事物の觀念なる者は必ず許多相反對せる旨義の總合に成るものにして例へば人といふ總念の宙に竪鼻横目等外部の形躰を含むのみならず又彼の生活運動感覺道理等內部諸般の性質及び其の他物に對する地位關係等をも悉皆包括するが如し是故に總念の旨義たる之を思想開發の大躰の順序に就て言へば彼の存在の旨義と之に反對せる本素の旨義とを總合一致して始めて起る者なるが之を細析するときは則ち有無を兼ね異同を併せ自他を包み量質を一にし而も彼此相合するに隨

て愈〻其分を明にし物質、形躰と並立して即ち躰を成し勢力、運用と表裏して斯に用を生じ躰用を總べ內外を合して斯に本躰、屬性、因果、相關等の衆理を具備し、乃ち整然として現實の事物を成立する者是之を總念と謂ふ總念亦三樣に開發す曰く主觀、曰く客觀、曰く觀念、是なり

主觀亦分れて全稱、特稱、單稱の三種となる蓋し主觀的總念の始めて現はるゝや必ず全稱の形を以てす全稱とは事物一種類の全部を汎稱するの謂にして「諸甲は乙なり」の式に在て「諸甲」の名辭に相當する者なり例へば今「白」といふとを想起せんか是れ白色類中の何物にも適合する者にして即ち全稱なり然るに其白なる者を愈〻明にせんとせば白墨の白か白紙の白か白雪の白か白馬の白か何れにまれ其中の一個物を呈出し來らざるを得ず即ち白墨とせんか單に白墨と言はゝ猶汎然たるを以て結局此の白墨と指示せざるを得ず「此の」と指すときは是れ單稱なり是に於て全稱に單稱を加へて乃ち斷定を生ず例へば「此の白墨は白し」と言はんが如し然れども全稱と單稱のみにては全稱は廣きに偏し單稱は狹きに偏し二者の關繫猶未だ瞭然たらず是に於て之が中間に介する特稱なる者あり特稱とは「或る」の語を

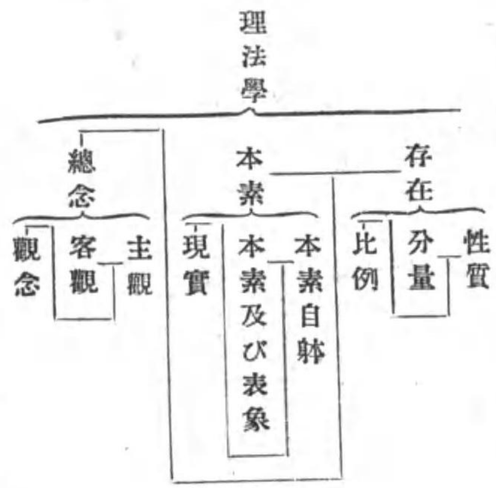
冠して以て全稱中の幾分を汎指する者にして而して單稱は全稱と特稱とを併合し最も實際に近づける者とす例へば「此の白墨は白し」といふは單稱命題なるが已に「白し」といふ全稱の義を含み又「此の白墨」は「白」中の一分即ち特稱たるの義をも含めるが如し夫れ三者已に備はるときは乃ち推測式を生ず蓋し「諸甲は乙なり」(全稱)といひて直ちに「此丙は乙なり」(單稱)と斷ずるときは丙乙の關係猶未だ缺然たるを免れずと雖ども今其中間に「丙は甲なり」(之を直轉すれば「或る甲は丙なり」となる即ち特稱なり)といふ一橋を架し以て丙が甲中の一分たるとを示さば即ち「諸甲は乙なり、丙は甲なり、故に此丙は乙なり」となりて乃ち整然たる推測式を成すべきなり然るに斯く推測式に達するときは最早主觀的の形式にのみ止まり得ず必ず外物を將て此型中に鎔鑄せんとす是に於て業已に客觀に移れるなり

客觀は主觀に反對して起れる者にして亦開きて三樣となる曰く機制、曰く化成、曰く結局是なり凡そ外物を觀察する必ず先づ其形狀、結構、位置等を視る是れ機制を以て客觀の第一步に置く所以にして機制とは則ち機械的排列の謂なり已に機制の觀察を終れば隨て化成の觀察に移らざるを得ず化成とは化學的變化の謂にして其外形の如何に關せず唯だ其內部の性質作用に注目するのみ之を要するに機制は特別に屬し化成は全躰に屬せり次に二者を合一して起る者を結局即ち目的の旨義と爲す蓋特別にして全躰に合し一事一件偶然に非ずして遠大に向ふことを表するあれば是れ取りも直さず目的を有するなり而も向ふ所ありて目的を有するも向ふ所ある以上は猶ほ客觀たるを免れざるに之を內に修めて直に進達せんとするに至れば自ら主觀の性質を帶ひ來らざるを得ず是に於て客觀主觀と相合し即ち斯に觀念に移る

觀念亦生命、認識、純全觀念の三段に分かる蓋し物皆相應の目的を有すと觀るときは即ち亦皆相應の生命ありとなさゞるべからず故に觀念の第一步に於ては必ず先づ生命の旨義起る即ち汎く生命といへる者のみに就て考ふるなり然るに生命なる者は自動の源にして自動あれば必ず之に對するの外物なかるべからざるを以て更に外物に對して自己の生命なる者を認む自己を認むるは即是れ認識にして自他の分乃はち明かなり自他の分已に明かなるときは隨て他をして自に融合せしめ客觀をして主觀と一躰たらしむる者あり是を純全觀念と爲す純全觀念は

即ち總念の旨義の終局にして又實に理法學の大圓圓たり是に於て乎當に夫の理法學に反對せる万有哲學に移るべきなり

以上は理法學の大畧なるが今其綱目を圖に約すれば左の如し



（圖中細目は畧せり）

第二　万有哲學（重學、物理學、有機學）

純全觀念の旨義は理法學の結局にして而も亦万有哲學の由て起る所なり蓋し万有は本是れ觀念の所造にして既に純全の觀念といふときは即ち實物世界の構成に外ならず然れども理法學に在ては其開發の模樣常に井然たる秩序を以て現はれ條理一貫して復た一點の疑を容るべきなし而るに翻て世界の實際を一見するときは曾て一定の秩序あるとなく雜然として現れ紛然として起り乍ち生じ乍ち滅し變幻万態殆ど理法を以て推す可からざるに似たり然らば則ち夫の條理の太だ明晰に規律の甚だ整齊なる者は是れ猶未だ虛に偏せる者たるを免れず是に於てか理法學に反對して万有哲學の起るわり然り而して斯く相背反しながら能く對立する所以の者は亦是れ思想必然の法則に由るに外ならず是故に万有の始めて起るや實に紛亂錯雜にして殆ど理法の外に在るものゝ如しと雖も而も其進歩の次第は即ち思想進歩の次第なるを以て亦彼の理法學に於けるが如く整然として三段に開發し終に進で精神哲學に入るに及で又理法學と相合せざるを得ざる者とす所謂三段に開發するとは第一重學、第二物理學、第三有機學是なり

〔重學〕世界の開闢を考ふるに方り第一に起り來る者を物躰の觀念とす蓋し夫の鴻濛の始め宇宙寂然聲無く臭無く唯〻一種有爲の氣象の充盈するあるのみ殆ど形容すべからず既にして纔に其兆象を認め單に之を稱して物躰といふ物躰の始めて

生ずる花乎として六合に彌漫し而も個々相散在して未だ統一する所あらず然るに個々物躰には亦各々一中心點に向て集合せんと欲するの傾向あり是に於て物々相牽引するの力を生ず名けて引力若くは重力といふ乃ち散在に反對して起れる者なり重力の法則を論する者を重學とす此法則や實に万有を統轄する所以の一大理法たり蓋し最初單に物躰として現れ紛々散漫せし時に當ては殆ど全く理法を離れたるが如くなりしも其既に中心點に向て漸々相近づかんとするの傾向あるを認むるに及では則ち是れ理法の管する所たり語を換て言はゞ思想は常に理法を中心として之に向ひ漸く相近づいて竟に獨立の一躰たらんと欲するの傾向ある者と爲すべし夫れ已に重力の生ずるあれば隨て物躰の運動起る運動は則ち離散と集合との二力を併合せし結果なり物躰已に運動あれば斯に星辰列宿の象あり之を研究する者を天文の一科とす而して研究更に一歩を進むれば則ち物理學の範圍に入る

〔物理學〕重學に在りては專ら分量上より物躰を研究するに止まれども物理學に至りては更に形質上より論究する者とす即ち彼の天文學の如きは重學の一科なる

が其の主として論ずる所は星躰の大小、相互の距離、運行迴轉の速度、盈蝕隱見の期日等單に分量上の穿鑿に過ぎず然るに物理學に至ては研究漸く複雜に渉り分量に兼ぬるに物躰外面の形狀及び其内部の作用を以てす而して其外面の變化を論ずる者は物理學科に屬し内部の變化を講ずる者は化學科に屬す蓋し物の初めて生ずるや首には唯だ機械的の構造有るのみにして次で化學的の作用を生ずるものとす既にして化學的作用を生ずれば終に乃ち之に反對せる有機的の構造起る是に於て乎生命なる者あり生命ある者を論ずるは即ち有機學の範圍に屬す

〔有機學〕凡て有機物は一方には化學的作用に依りながら又一方には之に抵抗し以て其生活を遂る者なり蓋し化學的作用の要點は常に物躰の組織を破壞分析するに在り例へば水の組織を破壞して水素と酸素とに飯するが如し然るに有機躰は常に此作用に反抗し彼の破壞に對して益〻凝固せんとを欲し彼の分析に對して益〻保合せんとを欲せり例へば動物の身躰組織常に化學的作用の爲めに分解消磨せられ斷へず死路に進みつゝあるが故に乃ち時々食物を躰中に送り亦化學的作用を藉て之を同化し以て其生命を維持するが如し是故に有機學は化學に反對して

而も夫の重學と物理學とを併合せし者といふべし有機學又分て地質學、植物學、動物學の三科と爲す

地質學に於て論ずる所の者は山川河海岩石泥土の屬にして實に生物の初期たり蓋し生命とは上にも言へるが如く化學的作用を藉て化學的作用に抵抗し以て舊態を保存せんとするの謂なれば物躰にして苟も此の如き働きを有する者は皆多少生命ある者と爲さゝるべからす夫の山川岩石の如き往古火力水力等に依て發生し爾來亦是が爲めに幾多の變遷を蒙るを免れざりしと雖も而も常に己を變ぜんとするの力に抵抗して永く舊態を保たんと欲するの傾向あり今日に至るも獨幾分か舊時の面目を留存するの事實あるを見るときは亦是れ幾分か生命を有する者と爲さゝるを得ず但だ其生命たる極めて單純なるを以て其働作の如きも隨て著明なる能はず瞥見すれば殆と死躰に異ならざるが如きのみ故に曰く山川岩石は生物の初期なりと

既にして生命の有樣彼の岩石の類よりも一層複雜に進むときは則ち斯に草木の屬あり之を論ずる者を植物學と爲す抑も岩石の屬は纔に生命を有するのみにして

て曾て成長の作用あるとなし然るに草木に至りては分明に成長繁殖の作用を有し且つ其化學的作用に抵抗する働作の著明なると固より岩石の比に非ず然りと雖も其働作たる根幹枝葉全體一致し居るにも拘らず猶各部區々の働作に屬し未だ全體を以て獨立の運動を營むと能はず即ち獨立の性猶完全ならざるを以て之を分つときは無窮に至る故に慧眼よりして之を視れは每草皆一大叢にして每木皆一大林なり樹木の質に依りては一木の數枝を剪て他の數木に接するに各々他木として生活するを得べく或は之を地に挿むに每枝更に又一木を成し愈〻分ちて愈〻增殖し以て無窮に至るを得べき狀あり是豈全體獨立の不完全なる者にあらずや若し夫れ動物に至りては然らず能く全體を以て獨立し自ら己を命令指揮して以て活潑の動作を作す是れ動植の大に殊なる所なり

既にして昆蟲魚介禽獸等の動物起るあり之を論ずる者を動物學と爲す是に至りては生命の有樣愈〻複雜となり個々獨立の性愈〻暢發せるを以て其自ら生活するや必ず他物を攫取し啗食して以て自體に併合し以て彼の化學的作用に抵抗せんとを勉め其外物に對するや利あれば則ち之に就き害あれば則ち之を去り唯〻利己の

一念以て其全身を使役す其運營動作の活潑頻繁なること草木の比にあらず而して動物の最も高等に進める者を人類と爲す人類は動物の結局なり夫れ人類あれば斯に精神あり是に於て乎万有哲學を結了して乃ち前きに相反對せる理法學と合し斯に漸く精神哲學を發する者とす

第三　精神哲學(主觀精神、客觀精神、純全精神)

抑も人類の初めて生ずるや本より蠢爾たる微物にして之を他の動物に比するも敢て異なる所を見ず之を宇宙の大に視るときは殆ど言ふに足る者なし而も能く宇宙の大を證得して終に所謂無限絶對の大精神と一體たるを得る者は亦夫の人類に非ずして何ぞや實に精神未だ万有の境界を離れざる上は所謂人なる者は即ち宇宙内の人たるに過ぎすして精神も亦宇宙の内に在り渺たる滄海の一粟も曾ならずと雖も其の漸々發達するに隨ひ益〻万有に抵抗し抵抗するに隨ひて益〻之を明かにし明悟の極竟に全く万有界を擺脱し了れば則ち宇宙反て精神の内に在りて精神の眞に絶對無限なるを證得すべきなり斯の人や以て宇宙を造出すべく以て宇宙を一空すべし何となれば思想を造り出すは是れ實物を造り出すと正に同一事たればなり豈眞の自由に非すや豈眞の獨立に非ずや夫れ眞成の獨立自由に到達するときは即ち斯に上帝あり上帝豈外に在らんや是れ將に精神哲學に於て論究せんとする所なり

〔主觀精神〕思想の進化既に物界を經過し來れば漸く移りて精神界に入る但し物界に在りても全く精神無きに非ずと雖も其狀態たる猶頑冥不靈にして未だ精神と稱するに足らず恰も瓦石の如く然りしなり而るに漸く進みて人類の域に至るに及び始めて所謂精神なる者あり蓋し精神の初めて發生するや先づ靈魂の形を以て顯はる靈魂とは精神の未た彰明ならざるときの名なり(靈魂は人類而下の生物にも皆之有るものとす)此初發の精神に在りては常に氣候土地風土等所有周邊の境遇に變化せられ又其人の性質の左右する所となりて殆ど全く受働的の地位に在り譬へば昏眠初めて醒めて纔に黒白を辨ずるが如く猶万有の附屬たるを免れず故に又之を万有的の精神と名づく是れ當に人類學に於て論ずべき所の者なり万有界を離れて將に精神界に入らんとするの中間に於て感覺なる者の生ずるあり感覺に在りては未だ自他の判斷を有せず其覺知する所實に僅々の事柄を出で

ずして只纔に人らしき者たるに過ぎざるのみ既にして一歩を進むれば即ち感情起る苦痛快樂即是なり已に苦痛快樂を知るに至れば斯に自己なる者を知る是に於てか認識なる者あり蓋し自己を知るは是れ万有を把りて之を自己の外に置くものにして自己を知りて始めて万有を認め以て自己亦愈〻明なるに至る斯く自他相對照して分明に内外を識別する者是之を認識と謂ふ認識を論ずる者之を認識現象學と爲す是より更に一歩を進むれば乃ち心理學の範圍に屬し正に主觀精神の本部に入る心理學の主として論ずる所の者は精神を精神として觀察する事なり抑も精神の始めて万有を離脱するや纔に万有に對して唯だ自己有るとを知るのみ漸にして覺知力理解力を有し自覺の性を帶ふるに及びて万有に對するを須あずして自ら能く内に省み以て明かに自己たる所以を解し乃ち自他の精神各々皆覺悟する所ありて他精神も皆我れと同樣なる心意を有せり即ち所謂自己てふとは己れ獨り之有るに非ずして他にも亦一樣に自己てふと有りと確認するに至る斯く相互に「自他均しく自己なる者有り」と認めて自己のみ特に然りと云ふ妄念を放棄するときは茲に精神を自由にし精神を精神として觀察し得るなり(自己の

み特に然りとするは他に對して爲すとなれば猶ほ區域を作り居りて未た眞に自由を得たりと謂ふへからす唯た自他同樣にして彼れ我に入り我れ彼に入ると思惟してこそ精神を自由にしたりと爲すへけれ乃ち精神を精神として觀察したるなり)精神の有樣斯くの如く暢發し來れば先づ理論の精神即ち睿智と爲り次で實際の精神即ち意志と爲るが此れ認識の最も發達せる者なり畢竟彼の認識なる者は獨り受働的の有樣に止まる能はずして常に發働的の狀態に進まんとするの傾向ある者とす睿智は事物を受識し且つ思考し又内省して意志に達するが意志は肉慾願望欲情を經て自由意志に進み内に認めたる自己を外に向つて働かしめ既に内に形成せる思考を實際の事物に施さんとするを主とするなり是故に睿智は專ら主觀精神に屬すと雖も意志は主として外物に働くを以て則ち斯に客觀精神に移る

〔客觀精神〕客觀精神は主觀精神に隨伴しながら而も之に反對して發生せし者なり亦三段に開發す曰く權利、曰く道義、曰く常綱是なり

客觀精神に於て自由意志の初めて發現する形を權利(法律)と爲す權利とは「某々の

事を爲すを得」と積極的に限定するの謂にして即ち人々各々自己の本分を知り又他人の本分を認め我を一人前と視ると同じく他人をも一人前と視る者是を權利を知ると謂ふさて權利の「一人前」として現るゝときは斯に所有といふことを生す即ち自ら取りて己に供するを得といふ考なり人々己に所有あれば隨ひて所有の變換起る是に至りて自他權利上の交渉漸く複雜となり乃ち相互關係の共認をして愈々確實明瞭ならしめざるべからず是に於て乎契約なる者有り

夫れ既に契約あり隨ひて違約無き能はず蓋し契約を履行するは正に公義の在る所にして即ち全社會大意志の存する所なるが大意志と小意志とは利害必ずしも常に平行するものに非ずしも時に或は矛盾相容れざるの場合あり故に彼の一個人若くは少數人の意志は動もすれば多數一般の意志に背きて非違を行ふる過咎あるを免れず是に於て乎罪惡なる者生ず然るに自己に罪惡あれば亦自から之を打消すの權利なかるべからず則ち此權利を名づけて罰と謂ふ夫れ罰なる者は敢て他より受くるに非ずして自から己れの罪惡を滅せんが爲めに取る所の消極的の權利なり世人是を以て他より受くる者と爲すは抑も誤れり蓋一旦刑罰に服す

るときは（縱令生命は亡ふとも）罪惡乃ち消滅するを以て再び社會の大意志に合し以て善良の自己に復するを得るに至る是罰の自己固有の權利に外ならざる所以なり

以上は權利の開發の次序なるが既に自ら惡を作り而して又自ら之を除くの場合に至りて斯に道義の旨義起る即ち道義は權利に反對して發する所の者なり蓋し彼に在りては意志の外部に發動せる形を以て現れ全く客觀に屬すれども此に在りては稍〻主觀に合せんとするの傾向を生じ即ち意志の內相上より觀來る者なり乃ち又三樣に開發す曰く旨趣、曰く志向、曰く善是なり

旨趣とは心中何事にても一事を想ひ起せば則ち該思想に對して自ら其責任を負ふの義にして即ち心內に於ける企圖經營とも謂ふべき者なり然るに此をして初めて其向ふ所を定めしむる所以の者は即ち所謂志向に在り志向は實に旨趣の本源なり又指揮官なり故に志向の善惡は實に正道邪路の由りて岐るゝ所にして道義學の主とし講究すべき要點なり曰く何をか善と謂ふ曰く各人の意志能く全社會一般の大意志に一致し敢て或は戻る莫き者是之を善と謂ふ善は即ち道義の結

局なり然りと雖も善あれば即ち隨ひて不善なき能はず何ぞや他無し是れ猶相對の善にして未だ以て確立圓滿の者と爲す能はざれはなり此れ即ち道義なる者に固有せる缺點なり夫れ既に缺點あり是に於て乎常綱の旨義起る常綱は權利と道義とを合一して生ずる者なり

常綱の最初に當り第一に起り來る者を婚娶の事と爲す抑も婚娶は一に男女の關係に基き(個人を孤立せしめず)二に權利の關係に基き(財產を共有す)三に情愛信用に基く是れ親屬發生の起源にして亦實に國家構成の基本たり(斯く婚娶の事たる唯り男女相愛するの情意に發する者に非ずして實は國家構成の大目的を以て起る者なれは夫の離婚を許す制の如きは斷じて之を排擊せざる可からず何となれは此れ甚だ常綱の本旨に戻り敢て一個人の小意志を以て彼の全社會の大意志に反せんとする者なれはなり若夫れ離婚を許すとは獨り彼の大目的に副ふと能はざるが如き特別の事情ある場合に止まる可きのみ)婚娶の事あれば斯に親族なる者を生ず既にして親屬增加し兒孫繁殖するに至れば斯に共同といふと起る共同とは人々相倚り相扶けて各個人の利益を相濟す所以にして即ち社會的の現象なり然るに共同の組織更に一歩を進むるときは斯に始めて國家なる者起る蓋し共同の場合に在りては尙一個人を以て主となし彼の社會全躰てふ旨義の如きは未だ表面に現はれざりしも國家を形成する場合に及びては則ち社會全躰を以て無形の一主躰を立て彼の一個人の小意志の如きは皆悉く此の一大意志中に消融し去るに至る是に於て乎國家の主躰たる政府の權力は實に廣大なる者にして其各個人に對するや殆ど無限の力ありと謂ふ可し之を要するに共同の場合にては一個人の爲めに共同ある譯なれども國家に至りては國家の爲めに一個人ある事となるなり

然りと雖も世界の中國家なる者一にあらず更に衆多の邦國の紛乎として相對峙するあり是を以て彼此の間亦互に制限あり隨ひて强弱相侵し互に盛衰興亡無き能はず夫れ是くの如きは未だ以て眞成の獨立と稱す可らず既にして更に一歩を進むるときは則ち始めて夫の世界人類の全躰といへる唯一無上の大旨義中に入り來る已に斯の域に達するに及びては彼の一個人といへる旨義は勿論各國家といへる旨義をも皆渾然として此中に消融し即ち所謂小精神相對の境界を超脫し

去りて漸く夫の大精神絶對の本相を顯彰し來る者とす夫れ是に至りて最初相反對せし主觀客觀の二相は全然相合して一躰となる因りて是を名けて純全精神と謂ふ

(純全精神)純全精神も亦技藝、宗教、哲學の三段に開發す而して其最初に現はるゝ者を技藝(美術の義)と爲す技藝とは精神を感覺上に表出するの謂にして即ち人智の有形物(石色音等)に浸入し由て以て自己(全社會若くは全人類の大精神に就きて云ふ)の肖像の幾分若くは全部を標示する者に外ならず約言すれば意趣を物に寓するとなり但其人智の浸入する所の物の中自己の意趣を發表し得るの度に於て自ら高下の階級あり今之を列序すれは物質の形式に勝ちたるを表號的技藝とし物質と形式と伯仲したるを典雅的技藝とし物質の形式に從ひ精神獨り超越したるを觀想的技藝とす而して個々の技藝を列擧すれば第一建築、第二彫刻、第三繪畫、第四音樂、第五詩賦是なり今請ふ五種の技藝に就きて畧言せん

第一、建築は作者の意趣を表示するに於て區域の最も狹隘なる者にして唯物質の上に隱然其兆象を寓するに止まり未だ以て直に意趣を形はすに足らず即ち建築

の藝たる作者是に由りて自己の力量を表示して以て自ら悅ぶ者に過ぎざるなり乃ち埃及の三角塔(ピラミッド)の如き宏大といふ一點を除かば曾て他の奇有るに非す是其國人の精神我が力量の斯くの如く其れ大なりといふとを符號的に表示するを以て滿足せしを證するに足れり之を要するに建築の技藝に於ける價値は特に高大、宏壯、長久、不動等の意を發するに足るあるのみ故に之を表號的の最純なる者と爲す即ち精神を表はすと最も少くして而も空間を要すると最も多き者なり

第二、彫刻に至りては建築に比すれば空間を要すると稍〻少く而して精神を表はす部分漸く增加し乃ち猶木石に藉ると雖も而も復彼の徒に重疊纍積を事として意趣の茫漠たるが如きにあらず能く生類の形態を摸して以て明白に作者の意趣を表發し就中人物の狀貌を寫すに至りては頗る精神の在る所を明示するに足る者あり然りと雖も彫刻の像は猶人物等の形躰を寫すに主にして未だ十分に其精神の眉目の表に發する者を幷せて之を寫すと能はず是れ其繪畫に及かさる所以なり

第三、繪畫に至りては空間を要すること少くして而も意趣を發表する所の區域は

反りて益〻廣く其五官に於けるや既に觸感を離れて單に視感のみを以て滿足し其物質に屬する部分は唯り彩色の存する有るのみにして餘は皆虛靈活潑の精神なり蓋し繪事の上乘なる者は天地山川の形象、樓閣臺樹の結構、幷せ寫して之を席間に縮め忽にして風雨江海を飜へし、忽にして皎月青嶂に懸り、草木花果或は榮え或は枯れ、飛禽あり、走獸あり、笑ふ人、怒る人、悲む人、躰容情意幷に宛然として丹青の表に生動す是れ其の意趣を發揮するに於て大に前二技に超越すと爲す所以なり

第四、音樂に及びては復空間を要せずして單に聽感に訴へて滿足する者なり蓋し人の事に觸れ物に感するや或は喜び或は怒り時にして樂み時にして哀み種々雜多の情思鬱然として內に發し其間又緩急疾徐の別あり而して音律皆此等の情念を取りて一々之を聲音曲度の間に漏洩す其情性を發揮すること深くして且切なりと謂ふべし是其の迥に前諸藝に優れりと爲す所以なり然りと雖も音律の人の情念を表發するや其形なほ漠然として分明ならず恰も彼の建築と稍〻其趣を同うする者あり蓋し彼は主外の純なる者にして此は主內の純なるものなり是に知る物反對の極に至れば竟に還た相一致するの傾向を生ずるの理あるを是に於て乎諸

藝を合して更に是より超越する者なかるべからず何ぞや曰く詩賦是れなり

第五、詩賦の物たる能く構築し能く彫鐫し能く描寫し能く詠歌し能く話說し能く思念し凡そ世界の事物苟も想像の及ぶ所殆ど一も摸寫すべからざる者無し即ち作者の意趣を表發するに於て區域の最も廣濶なる者と爲す然れども詩の躰たる一に非ず其世界進化の運を表發するの度に於て亦自ら三級の別あり一に曰く詩史、二に曰く頌歌、三に曰く院劇、而して詩史の一躰は實に彼の主外的諸技と相類似する者あり蓋し其主とする所規模の宏大なるに在るの點より觀れば正に建築と相似たり又其の英雄豪傑の狀貌氣象を摸寫するの處は恰も彫刻繪畫と相類し專ら神怪の情と無終の意とを表發するを以て大旨とせり次に頌歌の躰に至りては作者自ら其懷抱する所の情念を表發するを以て本旨と爲す是れ恰も音樂の專ら內を主とすると其趣を同うせり若し夫れ院劇の一躰は則ち前の二躰を合して一と爲せるものにして詩韵の最上乘に位し又實に諸藝に冠たるものとすればその意趣を表發する所の區域極めて廣大にして庶物なり人類なり國家なり各人なり古今の沿革、東西の事蹟、人事の成敗榮枯得失より以て喜怒哀樂愛惡等百般の情

念思慮に至り殆ど世界の事物を擧げて皆これを表發せざる莫し夫れ是に至りて方に技藝の終局を告げたる者と謂ふべし詩賦の理想よりして宗教に轉移すること當然ならん

宗教は技藝より胚胎し來るも而も之に反對して起る者とす蓋し技藝に係る情念は美妙の意趣を感覺に發揮する者なれども宗教に係る情念は則ち之を概念に發揮する者なり(但し詩賦は方に概念に入る)凡そ宗教は万物自然の形躰と絶對不測の意趣とを合し人物を以て神明といふ萬能の本躰に合一せしめんとするの傾向あり蓋し其の初めて起るや必す先つ(一)所謂自然宗教の形を以てし自然の勢力自然の事物を崇拜し個人の能力を消滅したる如く爲す(其種類固より一に非ざるも之を要するに山川草木禽獸土石等有形庶物を拜して以て神と爲るより神の多き千万箇ならす之を拜するの意蓋し謂ふ此等の神皆非常の勢力あり我れ之を祈らば亦其の庇護に託して以て非常の事業を爲し得べしと)神明の意想漸く開進すれば(二)頗る高尚と爲り或は猶太教の如く全智全能の天帝を敬し或は希臘國教の如く美妙端麗なる相貌を尊ひ或は羅馬國教の如く國家の權力を維持する爲め種々

の神躰を假借し來りて禮拜するなり更に進歩すれば則ち(三)現示教たる基督教の起る有り基督教の旨趣たる實に能く眇々有限の軀を以て廣大無邊の上帝と融合し有形にして而も能く無形に、無常にして而も能く有常なるとを顯はし上帝たる大精神が自ら形骸を被り又自ら離脱して大精神たるとを證明するなり夫れ是に至りて宗教的情念の暢發も亦極れり是れ其最完最備最上の宗教たる所以なり然りと雖も宗教の旨趣たる畢竟人の歴史上に藉りて發する所にして終に未だ全く思想の獨立を證するに足らざるもの有り蓋し思想の本分は思想の獨立を明證するに在りて夫の宇宙古今の變遷の如きは正に思想の由りて以て漸次に自から其の獨立なるを知得する所の現象の連鎖たるに外ならず之を要するに思想は唯だ思想に依りて以て自ら知る可きのみ自ら依り自ら知る是れ正に其の獨立たる所以なり然るに宗教は外より强ひて其の定むる所の旨趣を信奉せしめ且つ其の所謂神なる者は吾人と離隔し居るが如くするを以て未だ以て思想の獨立を證するに足る者と爲す可からず彼の耶蘇なる者も其の人の知行より觀るときは實に能く思想の獨立を證し得たるものなれども之を宗教として觀るときは必ず其の耶

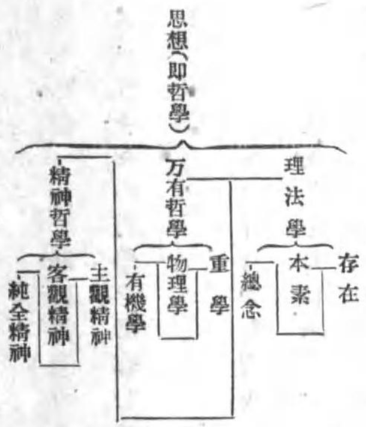
蘇を崇拜せしむるに非ずや抑も人苟も思想の眞に獨立なるを證得せば則ち是眞に耶蘇たらざるもまた耶蘇の一類にして上帝の形體を被れるに彷彿たり實に耶蘇の地位に立つものは是れ已に宗教の域を脱せるものにして宗教の中に在るものは未だ耶蘇たるを得ざるものなり是れ宗教の終に思想究竟の發達たる能はざる所以なり然らば則ち如何せば以て思想の獨立を證得す可きか曰く他無し夫の哲學を修むるに在るのみ

夫れ哲學は實に宇宙全躰の知を發揮して以て思想の眞に獨立なるを明證する者なり蓋し宇宙の全躰は即ち思想の全躰に外ならざるを以て苟も宇宙の知を盡さば思想の全躰斯に顯彰し來りて我の外にまた宇宙なきに至らん是れ豈眞誠の獨立に非ずや是れ哲學の迥然技藝宗教の上に卓越して以て人心無限の需めに應ずるを得る所以なり

抑も宇宙の本原を尋ぬ無限の至理の眞相を究むるの極めて難事たるとは固より論なし是を以て古來哲學と稱する者の沿革を閲するに或は有常の旨義より起りて終に無常の旨義に皈し或は無常の旨義より出て丶還た有常の旨義に入り或は

古を倚びて今を虐し或は今を是として古を非とし衆說迭に興りて紛々決する所を知らず後出の者常に勝を制して順次に以て盛衰し曾て一も全勝を得る者なし而も亦是れ思想の沿革に外ならざるを以て古今幾多の哲學は皆我が哲學の一部のみ是故に我が所謂哲學は獨り技藝宗教に卓越せるのみならず又實に古今の哲學を一括せる者なり即ち全宇宙の至理を表發し盡して又餘蘊なき者なり即ち思想進化の全程を閲了して竟に其の最高層に達せる者と謂ふ可し而して是より更に一歩を進むるときは則ち又再び理法學の始めに還らざるを得ず終りて又始まり漸運已むとなし是之を思想の循環と謂ふ是之を至理の無窮と謂ふ

以上はヘイゲル哲學全系の概畧なり今其大綱を圖して概括に便す



存在に反對して本素起り總念之を合して乃ち理法學の一系を作り次に重學と之に反對する物理學とを合して有機學起り以て万有哲學の一系を成し次に主觀精神と之に反せる客觀精神とを合するに純全精神を以てし以て精神哲學の一系を纏め乃ち此を以て彼の相反對せる理法學と万有

哲學とを合一して斯に哲學の全系を了し、終れば則ち又始まり環の端なきが如し或人ヘイゲルの哲學を形容して蛇の自ら其尾を嚙むが如しと云へり奇喩と謂ふべし

蓋しヘイゲルの其哲學を構成するや先づ純全獨立の原理を求めて乃ち思想といへる一大旨義を工夫し來り宇宙万象を擧げて皆此中に包含せしめ因りて其開發の第一の基礎となる可き者を斯の思想中に搜索して遂に夫の純有の旨義を獲て以て其議論の端緒を發せり其意に以爲らく眞誠の哲學なる者は實に世界創造以來の履歴を再び思想中に繰り返すの謂にして換言せば思想必然の順序を其儘に推し行けば取りも直さず哲學の全系を成すに至るべし而して其發程の第一歩は實に全程の大基礎なれば此旨義の包含する所は必ず万般の旨義に超越して最も廣大ならんことを要し且其の表證する所は必ず最も確實にして又一點の疑を容る丶能はざる者ならざる可からず然り而して夫の身外個々特別に存立せる万般の事物の如きは皆以て之に當るに足らざるなり何となれば今一の外物を識るには必ず「此の物、今、此處に在り」として之を識るを得るとなるが其の此と指すは何物にも通用せらるゝとなりて其の今と指し此處と指すも亦何時にも何處にも通用せらるゝとなれば畢竟此等は單に形式たるに過ぎずして其表證する所太だ漠然一も摸捉すべからず且つ此物を識るは必ず彼物の之を限る有るに由り彼物は亦此物有るを待ちて始めて彼物たるを得るとなれば將た孰れを本とし孰れを末とせんや畢竟彼此相待ち相限りて始めて斯に彼此有るのみ故に身外万般の事物は一も其眞を證するに足る者なく從ひて基礎として恃むに足る者なきなり然らは則ち何如にして可なるか曰く唯だ純有の旨義能く待つなく能く限る無く超然生滅の表に獨立して又動かす可からず又疑ふべからず是れを以て思想開發の第一基礎と爲す可きなりと(有に對して無ありと云ふも即ち所謂無なる者の有る譯なれば曾て純有の旨義に妨げなきなり)

是に由りて之を觀れば所謂純有の旨義たる思想と其大を同うする者にして又夫のフィヒテが所謂大我なる者と毫も異なる所なし而して其の開發の次第を敘するの處は夫のスペンサーの進化論と恰も符節を合するが如し但だ彼は万有の法則を尋ね此は精神の發達に據るの相異あるのみ蓋しヘイゲルの論法に據れば事々

物々必ず反對の理を存するを以て又事々物々必ず理に循はざるとなし故にヘイゲル常に因應定數の說を固持し乃ち曰く凡そ現に有る所の事は皆理に合すと即ち一事一物必ず避く可からざるの數有りて然るを謂ふなり是故に若し人ありて其所說に反對するときは即ち謂ふを得ん渠れ吾が說に反對す是れ已に吾が說に循へる者なりと普通の語を用ゐて之を言はゞ凡そ宇宙間の事物命に由らざる莫きのみ我れ吾が說を是とするも命なり彼れ我が說を非とするも命なり其の之を命に皈するも亦命なり何物か之を命ず思想是なり其れ唯だ思想自ら命じ自ら循ふ是其の定數に應じて而も能く自由なる所以なり其れ唯だ思想自ら反對者を造出して又自ら之を消融す是其有限に現じて而も能く無限なる所以なりされば又ヘイゲルの意に以爲らく吾が所謂哲學は古今一切の哲學宗敎の發達必然の次序を擧げて皆此中に包括したれば何人と雖も又此の範圍を出づる能はず獨り能く超然として世界の至理を大觀するを得べし哲學の事斯に完結せりと其の自から信ずると篤しと謂ふ可し

ヘイゲルの死後其學派首として兩黨に分れ一は保守を旨とし之を右黨と稱す

一は進取を旨とし之を左黨と稱す但し右黨は久しからずして衰歇に就けり左黨中に在りて最も著名なるは博士ストロースなり

シヨペンハウエル

講者云ふ本篇も館內員の筆記なるが小生先日來特に繁忙にして充分に刪改するの遑を得ざりしを以て一二箇所の外其儘に揭載する事と爲しぬ固より別段の不都合なきを信すれども或は他事を混入して順序の統合を失ふの嫌なきにあらず乞ふ讀者之を諒せよ

シヨペンハウエルは千七百八十八年ダンチヒに生まる父は賈人にして可なりに富み母は小說の著者として頗る名有り氏少うして佛英二國に遊び其國語に通ず既にしてゲッチンゲンの大學に入りシュルチェに從ひて哲學を修めしが當時世人の多く崇尙せるアリストートル及びスピノザの學說の如きは其の好む所に非ずして主にプラトー及びカントの學說を愛せり然るに千八百十一年伯林に遊びフィヒテの講義を聽くに及びて又大に其說を喜べり然れども後一家の說を立つるに及びては全く之に反對せり會〻伯林に戰亂ありしを以て去りてイエナの大學に赴き此

に學位を受け爾後四方に周遊して特に伊太利に留ること五年頗る其の文藝美術を研究せりと云ふ氏性强記、事理を見るに敏く且つ元來資產足れるを以て安じて學問に從事するを得たり但だ其人となり偏屈にして和氣に乏しく自ら負うて人を輕侮し物に觸れて輙く憤怒を發し人と交りて動もすれは睚眦を裂き其母とすら猶抗爭せしと少からざりきと云ふ又嘗て怒に乘じて一婦人を衝倒し其臂を折りたる爲め遂に二十年間も之を扶持せざる可からざるの義務を負ひしとあり又居常太く疾病を懼れ一旦疫癘有りと聞くや僅に其兆候に過ぎざるも即ち直ちに行李を戒め匆々去りて他邦に避けしと云ふ其偏癖概ね此の如し故を以て人多く之を疎じ絕えて親友知己有らず生涯空しく孤憤を抱きて終れり唯り死に先だつ五年一の熱心なる弟子フラウエンスタットを得たる有るのみ是より先きショペンハウエル三十歳(千八百十九年)の時始めて一書を著し其學說を公にせり書中フィヒテヘイゲル等諸子の說を痛擊して餘力を遺さず因りて自から以爲らく此書一たび出でば以て一世を傾倒すべしと乃ち之を印刷に附するや直ちに去りて伊太利に遊べり既にして還りて世評を探れば案に相違し世間其名をだに知る者稀なり是に

於て大に憤り是より益〻世俗を罵り世人を視ること土芥の如く特にヘイゲル派を疾視して殆と寇讎の如くせり後二十年を經て(五十歳の時)第二版を發兌せしが讀む者未だ多きに至らず又更に二十年を閱し年七十に及びて第三版を發兌せしが此頃よりして稍〻世の注目する所と爲るに至れりされば此書は實に其眞價に比して亦當時哲學の研究は專はら大學の間に止まりて廣く世間に及ばざりしと及びフィヒテ、ヘイゲル等の說既に世人の腦裏に先入して主と爲れるとの事情有りしに職由せずんばあらざるなり若し夫れ言辭の雄健行文の流暢なる當時諸學士の企及すべき所にあらず且つ氏は學說に關しては常に喜びて他人の攻擊を受取りしと云ふ亦以て其心事を見るに足れり千八百六十年享年七十三を以て歿す後フラウエンスタット其傳記を編めりと云ふ

ショペンハウエル自から稱してカントの門人と爲すも其學自ら亦一流派を成せり乃ちカントとヘイゲルとの中間に位する者といふべしヘイゲル既に專ら智慧の作用を倚びて一切實驗の方法を無用視し唯だ推理の一方に由りて以て世界を

構成す可く唯だ議論の力に藉りて以て萬事を明知す可しと爲せしがシヨペンハウエル大に之を非とし乃ち意志なる者を抉摘し來りて之を智慧の上に倘へ且つカントの哲學に就きて其大本たる二綱領を取りて之を奉ぜり一に曰く吾人の智慧本より能く及ぶ能はざる所有り故に學者必ず子細に檢覈して可知と不可知との分界を辨じ以て考察の區域を判然たらしむるを要す二に曰く凡そ實驗に由りて徵證す可からざる事は皆空虛に均しきを以て吾人の宜しく論議すべき所にあらずと然れどもシヨペンハウエルも亦大にカントと意見を異にする所有りカントは以爲らく純粹總念即ち範疇の諸則は總べて先天に存在して形而上學の基趾たるべき者なれども而も是れ經驗的の事物にのみ適用すべくして經驗外に出でゝ事物の眞躰に合同す可からず視る物聽く物前後左右悉く範疇にあてはむるも其の刺衝し來る者は皆空間時間に現はるゝ雜多の感覺に外ならざれば何程眞相を窺はんとするも到底其詮なかるべく去りとて全く感覺を除き去らば先天の範疇有りといふとも即ち空虛同樣にして何の益もなきことなれば畢竟吾人の知る所は獨り事物の現象に止まり夫の万有原理の學の如きは本より確立し得べき所に非

ずと（哲學史六三頁を參看せよ）而るにシヨペンハウエルは之に反して以爲らく智慧の及ぶ所は實に經驗の外に出でずと雖も然れども其經驗の境界中に於て事物現象の上に超越して其の眞躰を見得すると敢て甚だ難きに非ず換言すれば万有原理の學は經驗界中に於て之を建立するの餘地無きに非ざるなり更に一方よりして之を言はゞ純正哲學の旨趣は當に現世界の事に限り唯其事の極めて深奥なる處を抉摘するとを求むべし若し夫れ世界は安くより出來りしか又奚に由りて存するか將た其の將來歸住する所の處は如何等の問題及び之に附隨して起る所の神の有無の說に至りては固より經驗の得て徵證す可き所に非れば斯の學に從事する者は初より意を此に留めずして可なり若し强て此範圍外に馳突し知る可からざる所を知らんと欲せば其終に人を欺き自ら欺かざる者幾んど希なり要は唯だ其有る所の實迹を討究するに在るのみと斯く見來れば經驗界中万有原理の學を建立するに綽々餘地あると明瞭なるが但だシヨペンハウエルの所謂經驗なる語は獨り耳目五官の實驗を指して言ふに非ずして更に反省內觀の實驗をも含める所の廣き意義を以て解釋せざるべからず

シヨペンハウエル更に一歩を進めて曰く凡そ純正哲學の講究に於て根據とす可きは唯り實驗の一方有るのみ夫の純然推理の一方に由りて一家言を構成し絶えて之が徵證を擧げざる者の如きは其學たる終に踏虛架空の物たるを免れず且つ夫れ本原といひ本質と曰ひ純全と曰ひ必然の理と曰ひ無始無終、無邊無際、獨立不倚と曰ふ凡そ此等の語は卒然之を見れば直ちに先天より來れる者の如きを覺ゆるも子細に之を考ふるときは是皆吾人精神の冥々の間に把住し得たる所の旨義に外ならざるを以て亦必ず之を內觀的實驗の中に求めざる可からず

又曰く我が哲學の方法は經驗と分解とに由りて一々徵證を求め以て一系の說を爲すに在り即ち卑近より上り層々累進して以て高遠の處に達するを主とす若し夫れ世の所謂神物同躰の說を爲す者は一に總合の方法を用ゐ先づ首に一の至理を把住して以て議論の根據と爲し因りて細大の事を擧げて悉く此一理に繫けんと欲す其往々實迹に背戾する有るは固より怪むに足らざるなりと

之を要するにカントは万有原理の學を以て究竟一事をも確知す可からずと爲しヘイゲルは之を以て万事を明らむるを得ると爲し而してシヨペンハウエルは之を

以て經驗以外の事は渾て之を知る可からざれども苟も經驗の及ぶ所は皆之を明らむるを得べしと爲せり是其說の前二子の中間に位する所以なり

人或は曰はん若し專ら經驗に由りて以て万有原理の學を構成せんと欲せば寧ろ此學に易ふるに物理學を以てするの愈れるに如かんやとシヨペンハウエル之に答へて言ふ然らず二學の間本自から涇渭の存するあり決して混淆す可からず且つ物理學は必ず万有原理の學を待ちて始めて其基礎を固むるを得る者とす何となれば物理學が講究する所の諸般の現象は皆自然の理と自然の力とに循ひて現じ來る者にして而して此二者は實に万有原理の學の研究する所に係ればなり且夫れ万有原理の學を以て物理學と混同するに至りては是れ道德を擧げて之を委棄する者なり抑も人或は道德は神學と緊切の關係を有すと謂ひ或は世界万物の外に於て別に全智全能の神躰有りと爲すに非ずんば道德は得て維持す可からずと謂ふが如きは是大に謬れり道德本より毫も神の有無と相關する者に非ず唯だ夫の萬有原理の學即ち之が源本と爲る有るのみ蓋し眞成の道德は斯の世界の空幻恃むに足らざるを看破し以て寂靜無爲に歸するに在るが斯の知見を發し得るは

實に万有原理の學を講ずるに非ざれば能はざるを以てなりと

斯の如くしてシヨペンハウエルは万有原理の學の必ず立つるを得可くして又必ず立てざる可からざるとを論斷し因りて一家の哲學を構成せり世其學を呼びて貫徹觀念教といふ其全系二大原則を以て貫聯せり一に曰く世界は心の表現に外ならず二に曰く世界は意志の發顯する所に係ると而して第二則は第一則を一層發揮せし者に外ならざるなり

シヨペンハウエル先づ一問を發して曰く世界万有の現象は果して安くより來れる乎と因りて自ら之に答へて曰く是れ吾人の智慧其物に固有せる特殊の性質より來れるなり蓋し吾人の外物を認識するや我に自ら一定の範疇有りて四來の刺擊皆此中に鎔陶せらるゝ者なれば凡そ事物の吾人の認識に上る者は必ず皆一定の形式を印し復事物本來の眞相に非ざると明けし是故に假し眞相を舍て姑く現象のみに就きて言ふときは世界万有は一に人心の反射なりと爲さゞるべからず今試に一人の耳目を去らば如何是れ其人に在りては世界復聲色無きなり若し更に自餘一切の諸官を去らば是れ世界復一物無きなり世界一物無き即ち是れ世界無

きなり且夫れ吾人自ら諸現象を射出し而して又原因結果の關係を以て此等諸現象を整合連結するは實に吾人の智慧の作用に外ならず然らば則ち世界万有の現象は一に吾人の智慧に由りて存すと言ふも豈欺かんや

蓋し智慧を分析すれば感性(直覺力)悟性(理解力)理性(推理力)の三者に歸するとなるがシヨペンハウエルも亦カントと同く空間時間の旨義を以て之を感性に屬せしめ原因結果の法則を以て之を悟性に屬せしめ概念を以て之を理性の所作に皈せしめたり獨りカントの十二範疇に就きては大に異議を挾み以爲らく所謂範疇なる者は到底因果の一理に止まるべし夫の擾々十二を臚列するが如きは特に甚だ笑ふべきの事たりと其時間空間の旨義に就きても亦以爲らく此等の物は唯だ當さに是有りと謂ふに止まるべきのみ敢て時間空間其物に事物の面目を變改するの力有るに非ず例へば鮮肉の久きを經て腐爛するは決して時間の然らしむるに非ずして全く原因結果の一理に循ふなり夫のカントの論ずる所の如きは已に甚だ過ぎたりと之れを要するにシヨペンハウエルの意は凡そ吾人の認識に上る所の者は何事にても皆感性、悟性、理性の三面に現はれ畢竟三者

其實は一躰にしてカントの論ずるが如く判然分別し得べき者に非ずと云ふに在るが如し

然れども是れ特に主觀上より認め得たるの眞理のみ今若し客觀上より立言せば物無きときは是れ我無しと言ふを得べし亦是れ易ふ可からざるの眞理たり蓋し我の我たり智慧の智慧たるは物を待ちて始めて之を知るを得べし智慧は事物の現象を以て其就て力を用ゐる所の資料と爲すと猶眼の彩色を以て就て視力を顯はす所の資料と爲すが如きなりされば主觀(心)と客觀(外物)とは終始必ず相待ちて存する者にして又如何なる事物と雖も必ず主客二樣に見えざるは無く二者畢竟二にして一なり彼の唯物の說を執りて物の外に復智慧無しと唱へ或は純然虛靈說を持して智慧の外曾て一物無しと論ずる者の如きは均しく是れ一に偏して他を顧みず皆迷謬の甚しき者なり

然らば則ち吾人精神の本原は果して如何斯の世界の眞相は果して如何抑も夫の物理の學及び論理の學は皆吾人の智慧に依りて立つ所の者なるが吾人の智慧は本より時間的の定能を爲す者なるを以て其事物を認識するや一時に万有の全躰

を該括する能はずして必ず先後相續きて之を認識せざるを得ず又連續を以て性と爲すを以て其物を認識するや必ず個々零碎ならざるを得ず又時間の經過に隨ひて勢遺忘無き能はず即ち一物を認識するの間は一時他物を忘れ居らざるを得ず既に此三失あり故に智慧は決して我が精神の本原に非ず而して其の認識する所の世界万有は其眞相に非ずして特に其反射たるに過ぎざると明らけし然らば則ち物理及び論理の學の到底世界万有の假相と相離れざる者なるとも亦甚だ明瞭なりとす

夫れ智慧既に以て世界の眞相を認むるに足らず而して物理論理の二學皆現象の外に出づる能はざるときは則ち將た奚に由りて更に是より進みて夫の事物の眞相を目的とする所の万有原理の學に入るを得る乎曰く請ふ先づ吾人精神中に就きて智慧の外更に最も我と親切なる者有りや否やを講究せん若し之有らば則ち其物や以て吾人精神の本領と爲す可く以て世界万有の根基と爲す可きなり

蓋し吾人は思念し考慮し議論するの前既に已に生活するとを求め居れり而して生活するが爲めに常に爲す有るとを求め居れり斯く常に爲す有らんと欲するとを

は本より人々性情の自然に發し曾て瞬時も間斷あると無し而も吾人或は明に自ら其然るを知るとあり或は自ら知らざるとあれば其智慧に由りて然るに非ざると明なり且夫れ欲するとも亦爲すとに外ならずして爲すとは即ち動くとなれば動くとと欲するとは實は始めより別事にあらず然らば即はち其由る所知るべきのみ他なし意思是れなり夫れ意思微せば吾人焉ぞ身躰あるを得ん苟も身躰なき豈復所謂智慧なる者有らんや知るべし意志は實に吾人精神の本領にして又實に吾人形軀の根基たるとを

夫れ吾人既に意志より來るときは則ち自他一切の外物も亦應さに意志を以て其本原と爲さゝるべからず蓋し世界万物の存するは職として吾人之を思念するに由りて存する者なれば其の世界万物を講究するに當り吾人を推して以て万物を料るは豈至當の順序に非ずや

抑も意志の意義是の如く其れ廣汎なるを以て人或は曰はん是れ物理家の所謂勢力なる者と何ぞ擇ばんと然れども是れ本末を辨ぜざるの言のみ蓋し勢力は皆意志なりと謂ふは可なり意志は即ち勢力なりと謂ふは即ち不可なり要するに勢力

は特に意志の一部たるに過ぎざるのみ抑も所謂勢力なる者は皆外物を以て根基と爲し即ち彼の現象中に於て原因結果の理に循ひ以て推知し得たる所の者に過ぎずして畢竟吾人の之を知るや未だ明確切實と爲すを得ざるなり若し夫れ意志に至りては身外の現象より來るに非ずして吾人一たび瞑目反觀せば我が精神の奥區に於て分明に其の鬱勃潑剌として將に發する有らんとするが若きを見る是れ即ち吾人の眞我にして形無く聲無きも而も瞭然として現じ其間復疑惑の容るべきなく我能く我を觀て而も能觀の我は本より所觀の我と同一躰たり乃ち所謂獨立不倚なる者又主客内外の別有らんや

蓋し現象上よりして觀し來れば凡そ世界の万物は皆之を夫の勢力に歸するを得れども所謂勢力とは將に外に向ひて或る働きを發出せんとする所の者の謂にして即ち將に爲す有らんとする所の者なれば其本躰は亦實に意志に在りと爲さゞる可からず今一石を取りて之を投せば石忽ち地に向ひて落つ是れ其本より落ちんと欲するの意志有ればなり又其靜止するに方りてや之を移動せんとする者あれば必ず之に抵抗す是れ其永く舊處に安ぜんと欲するの意志有ればなり之を大

にすれば日星の運行之を小にすれば塵埃の浮動皆其然らんと欲するの意志に由りて然るに非ざるは莫し但だ夫れ金石草木の如きは自ら欲する有るも自ら其欲するを知らず禽獸は自ら其欲する所を知ると有るも亦未だ其然る所以を知るに及ばず其然る所以を知りて之を意志に歸する者は獨り人類特有の智慧に在りて存す概して言へば感性は万物皆之を具へ悟性は唯だ禽獸と人類とのみ之を有し理性に至りては獨り人類のみ之を占むるなり更に之を言へば欲するとと知るとと即ち意志と認識と相伴ふを得る者は獨り吾人々類に止まるなり然れども其吾人すらも亦平生不知不識の間に於て許多の動作を營み居るに非ずや亦以て意志の知慧に先ちて自存するを證するに足れり之を要するに知慧なる者は意志の漸々暢發して極めて複雜精妙の作用を呈するに至れる者にして形躰なる者は意志の自ら發動して客觀上に表現せる者に外ならざるなり

是に由りて之を觀れば意志なる者は宇宙間處として存せざるなく物として有せざるなし故に遍有は是れ意志の一性質なり而して更に又二樣の性質あり何ぞや曰く不滅曰く無限の自由是なり蓋し意志なる者は夫の時間の外に立ちて常々必

ず現在なる者なり（時間は智慧に由りて認得せる一旨義に過ぎず）故に今一物有らんに其形躰は一旦消滅するも其本質は曾て消滅するとなし即ち意志の表象は常に轉滅を免れざれども而も意志自躰に在りては始めより依然として存し或は此處に在りて表發せざるも必ず彼處に於て表發し斯の如くして永久已むと無しされば結局各物個々の意志は形躰に隨ひて轉輾生滅すれども世界全躰の大意志に在りては本來不生不滅なりと爲さゞるべからず且夫れ意志は已に時間の外に獨立するを以て又原因結果の理法の律する所と爲る者に非ず是豈無限の自由に非ずや然れども是れ特に意志全躰に就きて言ふのみ若し夫れ各人各物の行爲に就きて言はゞ其の制限有ると固より論無きなり

以上は是れシヨペンハウエルの哲學の大意なり更に其主旨を一括すれば凡そ經驗以外の知識は皆確實と爲す可からずとするの點に於てカントと合し而も万有の原理は經驗以内に於て之を認むるを得べしと爲すの處に於てカントに反し而して遂に意志なる者を提出し來りて大に其意義を擴充し宇宙万有を擧げて皆其の表發する所に係ると爲し以て大にヘイゲルの純智說に反對せり若し夫れ意志は

果して安くより來れる乎と問はゞ則ち曰く是れ吾が故さらに闕如に附する所なり何となれば是れ實に吾人の當さに知り得べき所の境界の外に在るを以てなり獨り吾人が意志の本躰に就きて知り得べき所は其現在の狀勢が常に甚だ活潑にして斷へず將に勃發せんとしつゝあるの一事是のみと但此の意志に附するに無限自由の一性質を以てするの一段に至りては亦少しく自言に背き夫のカントが實踐理性批判に於けるが如く感情に任せて知の及ぶ可からざる所を論斷せるの嫌無き能はざるなり

是より一歩を進めてシヨペンハウエルが道德に係る意見を畧說せん蓋し其說に從へば人性の善あり惡あるは皆其人の最初知らず識らず自ら其此の如くなるとを好みて斯に乃ち善人ともなり又は惡人ともなれるなり故に當初自ら其性質を定むるに方りては人々の意志は實に自由なれども其一旦定まる以上はもはや吾人の行爲は一も自由有るとなく其一たび善人となれる者の行爲は常に善意に出でざる能はず一たび惡人となれる者の行爲は一々惡意に出でざる能はずして自ら肆に氣質を變化するを得ざる者とす是故にシヨペンハウエルの道學たる畢竟行爲

に係る心術の等級を論議せる一說たるに過ぎずして初めより此を以て俗を易へ風を移すを目的とせし者と爲すを得ず

其言に曰く人の意志漸く發達して現世界の事實に通ずるに至れば必ず二種の觀念を發す即ち一は斯の世界を以て善良なりと爲すの觀念にして一は斯の世界を以て害惡なりと爲すの觀念是なり而して善良の觀を作す者は勢永く斯生を保つを願はざるを得ずして害惡の觀を作す者は勢速に此世を辭するを願はざる能はずと因りて自ら後者を取り現世界は一切皆惡なりと斷じて遂に純然たる厭世敎に入り乃ち夫の佛敎小乘家の說と酷だ相肖似するに至れり

其說に謂ふ意志は猶饑者の如く常に不滿不足の狀態に在り汲々として其欲望を滿さんとを勉め奮扳營爲曾て已むとなし抑も吾人の力を出して爲すと有るは皆需求する所有るが爲めなりされば需むる所にして未だ獲ざるの時に方りては必ず苦痛の感有るを免れず然るに一旦其望を達するに及びては暫時快樂を感ずるが如きも其快樂は望を達すると同時に漸々消散に歸するを以て更に又需求する所有り一願を達すれば隨ひて又一望を生じ曾て滿足の期あるとなし且夫れ所謂

快樂なる者も畢竟前の苦痛に比して今の苦痛較〻小なるの謂にして亦是れ苦境中の物に外ならず之を要するに世の所謂快樂なる者は終に純全の快樂に非ずして願望は竟に是れ苦痛の源たりされば吾人の生涯たる唯だ生活を求むるが爲めに不測の苦海中に漂蕩する者にして紛々擾々尅爭是れ事とし孜々營々日も亦足らず宛も嵓礁碁布の間激波怒濤の際一葉の扁舟を操りて雲際の彼岸に航せんと試みると一般精を耗し氣を殫し其末や一敗地に塗れて終に死滅に歸するのみ願望、痛苦、爭鬪、敗滅、是の如くにして生し是の如くにして死し以て千萬年を經過し竟に吾人跡を寄する所地球自ら壞裂破碎するに至りて後已まんとす嗚呼此の如きの人生此の如きの世界果して以て喜ぶ可しと爲す乎果して以て善良なりと爲す乎」斯の世界は是の如く其れ醜惡なり而して世人は猶其生活に眷戀すると彼が如し是れ世の害惡の終に絶期無き所以なり抑も害惡の由りて生ずる所の者利己の一念に過ぐるは莫し蓋し利己の一念は即ち自他差別の妄見に發し生活の願望の太甚しきものたるに外ならずして苟も此の私情に徇ふ者は唯だ自家の利害を是れ計りて曾て他人の利害を思はず遂に或は天下の物を擧げて以て己れに奉せんと

欲するに至る是に於て乎害惡爲さゝる所なきなり抑も自己と云ひ他人と云ひ万物と云ひ其本を尋ぬれば只是れ一大意志に外ならず故に現象の上にこそ區々たる差別は有れ一たび實相上より大觀するときは自他本より同根にして万物始より一躰たり又何の畛域か之あらん是故に惡行なる者は罰と同時に行はるゝ者なり夫の他人を害して以て自ら利せりと爲す者の如きは正に是れ右手を以て左手を擊つ者なり自ら惡を爲して隨て自ら罰する者なり將た何の利益か之あらん是故に苟も志を道德に存し斯の世界の敝惡なるを厭ひて其苦患を免れんと欲する者は當に一切差別の妄見を去りて以て自己なる者の毫も愛惜するに足らざるとを明にし一切の苦患は皆生活を願ふの一念より生ずることを知りて務めて寂滅に歸せんとを求むべきなり抑も世人太く死を恐ると雖も死なる者は決して恐る可き者にあらず世人の之を恐るゝは畢竟將に死せんとする時の苦痛を恐るゝに外ならず敢て死後の生無きを恐るゝに非ざるなり人豈未生前の生無きを恨む者有らんや其既死後の生無きを憾まざるも亦知る可きのみ斯く言へばとて敢て自殺を勸むるにはあらず蓋し自殺なる者は人一時の苦痛に堪へずして强ひて自ら引

決するのみ其心は猶依然として生活を願へり故に其意志暫らく形を隱すも異日又復び生を斯世に託せんとす是れ毫も事に益無し之を要するに形骸を棄つると俱に生を願ふの心をも斷絶するに非ざれば未だ以て眞の寂滅と爲すに足らざるなり

且夫れ一個人の死は僅に世界の死の一部のみ世界の意志は猶依然たり是故に道德上よりして之を言へば宜しく全世界の寂滅を求めざるべからず而して此目的を達せんとならば人々各々皆務めて苦業を修し特に淫戒を嚴持して以て子孫の絶滅を計らさる可からず然れども是れ容易に望むべきの事に非ず唯だ夫の眞に道德に志すの士は當に斷然形骸を捐棄し併せて斯生に眷々たるの心を絶滅すべきなり此心を絶つの法如何曰く智慧を研磨して以て自己の何物たると世界の何物たるとを明了にするに如くは莫し夫れ一たび世界を明知するときは即ち生活の正に苦患の源たるを證得せん苟も斯の境界に達せば乃ち自ら其の去就を撰擇するを得べし而も其の撰擇を爲し得るは決して私心の自由あるに因るに非ずして正に夫の世界大意志の自由と融然一躰を爲すに至れり夫れ是に至りて始めて

至樂の境に入り而して其意志始めて滿足するを得べし滿足せば是れ已に意志に非ず即ち意志の寂滅なり是れ之を純全の寂滅と謂ふ佛家の所謂涅槃是なり

シヨペンハウエル是に於て大に涅槃の旨義を贊し因りて自ら其義を解して謂く涅槃とは純無の義にして即ち斯世界の消滅を謂ふ而して其の毫も有の義を雜へざる所以の者は蓋し一たび涅槃の境に入るときは其中曾て復斯世界の事物を存留すると無く又斯世界の事物は一として其中在る所の形狀を譬喩す可き無きを示すに在りて其實は眞に物無きの謂に非ざるなり然れども哲學の旨趣は本と斯世界の事を講究するに止り滅後の事の如きは既に其範圍外に屬するを以て敢て論斷せず是れ吾が哲學の不知の二字を以て其終局と爲す所以なりと

シヨペンハウエルの所說を揭載し了りたればハルトマンロッツエ等の意見を揭出すべき筈なれども期限あるを以て已むことを得ずこれを他日に讓るとせり

且つフィヒテシエリングヘイゲルシヨペンハウエルに關する講義の筆記にして校閱に遑あらざりし所少からざれば折を見計ひ大に取捨改正するあらんと欲す讀者乞ふ之を諒せられよ

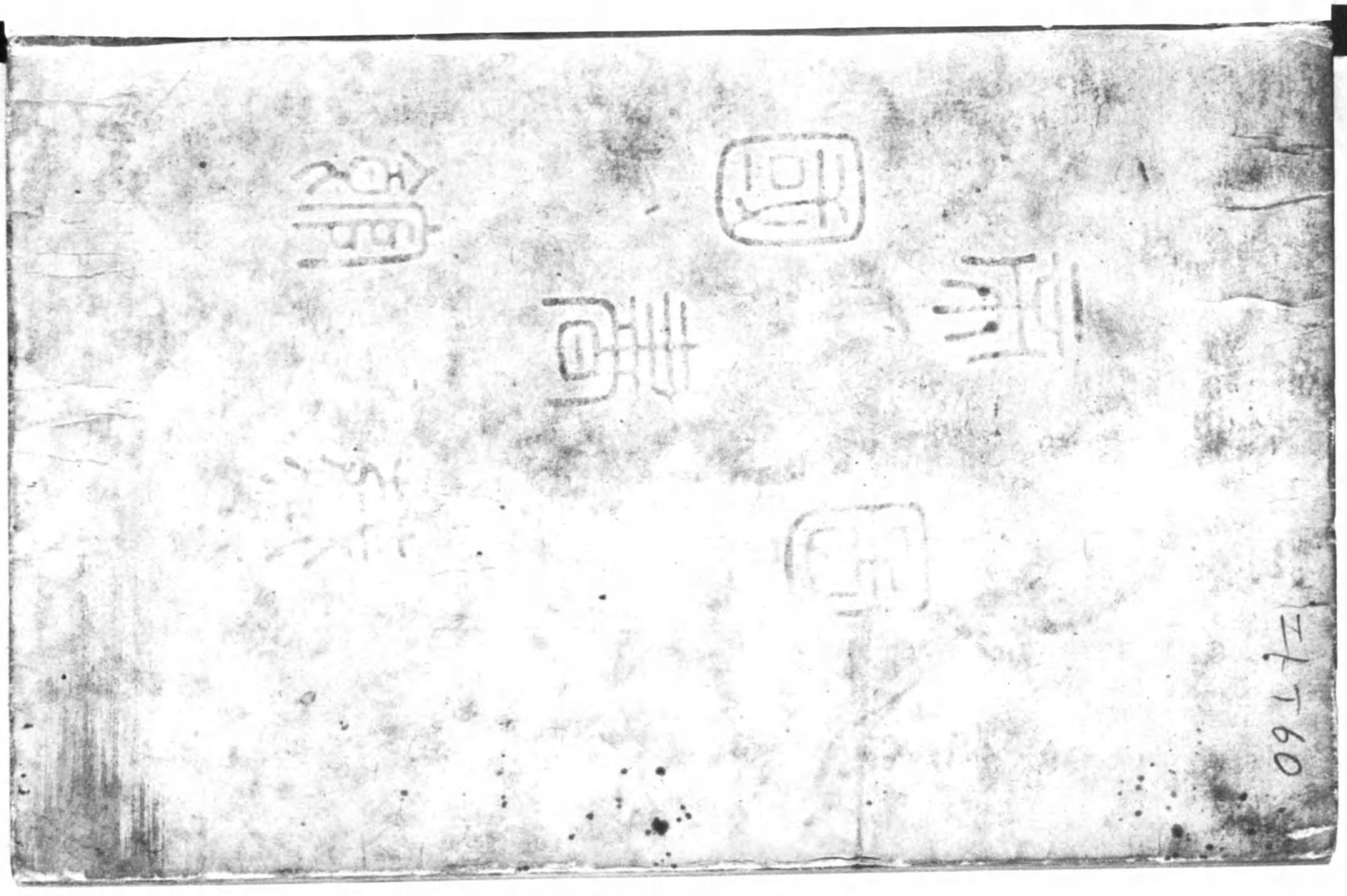
14
224

近世哲學史

畢

テ注高レ

(一ホ)



淡